

324-1  
160



心  
霊  
の  
備  
養

明治  
42 12 23  
内交

# 心霊の修養

## 目次

第一章	心霊の修養	一
第二章	心霊の偉大	七
第三章	靈育と徳育	一四
第四章	不覺の靈力	三五
第五章	使命の自覺	五〇
第六章	吾人の向上を妨るものは何ぞや	六四
第七章	心力傾注	七六
第八章	人生の價値	九二
第九章	人生の大願望	一〇八

第十章	人格の進歩に伴ふ愛の發展	一三五
第十一章	沈黙の教訓	一四四
第十二章	味爽の祈禱	一六四
第十三章	祈禱の生涯	一七九
第十四章	祈禱の極致	一九三
第十五章	聖化の階段	二〇七
第十六章	俗中の聖	二三〇
第十七章	逆境の聖者	二四八
第十八章	心情の聖化	二六〇
第十九章	颶風中の聖	二七五
第二十章	超脱の妙境	二八六
第二十一章	此世ならざる快感	三〇四

第二十二章	生辱と死榮	三一八
第二十三章	天上の星	三二九
第二十四章	家庭の向上	三三九
第二十五章	家庭の趣味	三五八

# 心靈の修養

宮川 經輝 著

## 第一章 心靈の修養

キリスト曰く「人全世界を得るも其生命を失はば何の益あらんや」と。然り、人類の有する内なる心靈は外なる生涯よりも偉大にして、且つ其言ふ所や行ふ所よりも遙に優越せるものである。

されど世には身斯くの如き偉大なる心靈の内在せることにすら思ひ及ばざる者が多い。偶々ここに心する人あるも、先づ彼等の兩眼を遮るものは、或は利慾、或は權威、或は名譽等所謂果敢なき浮世の快樂である、斯くして心靈修養のことに力を盡くす人は誠に稀である、此間に在りて吾等基督信者は少くとも心靈の偉大なるを知りて、これが修養に努めねばならぬ。左は言へ心靈の修養

は遊藝の稽古の如く短日月にして早く眼に見ゆる効果を現はすものではない、ソコデ誰でも暫くは修養に志すも、忽ち日暮れて道遠しの威に打たれ、未だ其半ばにだも至らずして志を變ずるやうになる、英米の如き祖先以來心靈修養に心を傾けたる國ですら中途志を變ふる人あるを見る、古より倫理と道徳以外に心を寄せざりし我國民の未だ心靈修養に全力を注ぎ得ざるは、誠に慨嘆の至りである。

我基督教の歴史を繕きて、熊本郊外花岡山頂の盟約の條に至る毎に、一種云ふべからざる感慨の湧き出づるものがある、明治九年、其連判の白紙に署名せる者四十余名あつたが三十三年を経たる今日に於て尙ほ堅き信仰を保てるもの幾人なるかを尋ねれば大凡其の五分の一若しくは六分の一に過ぎない。

實に心靈の修養は難いが倦まず怠らずして十年十五年二十年三十年の熱誠を以てすれば神必ず其の信仰に報ひ給ふ事は吾人の確信する所である、見ずや、かのナイル河上、一葉の蘆舟に載せて流された幼兒モーセは、四十歳にして己が國民の苦しめる状を見て埃及の實を受けんよりは事る神の民と共に苦しむは

良してふ志を懐きてメデアンの野に心靈を養ふこと四十年間、齡八十にして再び世に立ちて憐れなる猶太人を埃及より救ひ出だし又も四十年間アラビオの原野に彷徨ふたモーセがシナイ山頭に立つて神の聖前に切なる祈禱を捧げつ、山を降りたる時の顔は天使のそれの如く光り輝いたと云ふことである、心靈の修養は短日月の間に其の出來榮を現はすものではない。

更に、詩篇四章の八節に於て「われ安然にして臥又ねぶらん、エホバよわれを獨にて坦然にをらしむるものは汝也」と歌ふたダビデを見られよ、彼は幾度びか罪を犯し又幾度びか悔い改めたる人だが、「われを獨にて坦然にをらしむるはエホバ也」てふ安心を得るに至るまでの修養は蓋し容易ではなかつたらう、又使徒パウロは羅馬書八章三十七節以下に「然ども我儕を愛しめる者に頼りすべて此等の事に勝ち得て餘りあり」と叫んだ、男子こゝに至つて是れ豪雄、飢渴も、裸程も、悩みも、責めも、死迫るとも、すべて此等の事に勝ち得て而かも尙ほ餘りありと云ふ。蓋し斯る勇氣は修養せられたる心靈の上のみ惠まらるべきものである。

心靈の修養とは何であらうか是れは一大問題である、思ふに激江の水滾々流  
れ／＼て盡きざるは、其の水源琵琶湖に連なるが故である、心靈の修養も亦そ  
の通り、先づ其の心靈をして天地宇宙の神に結び付かせねばならぬ、而して其  
神より出づる清き靈的生命の絶えず我が靈に注がれ来るに至つて始めて心靈修  
養の道に入り得たるものと云ふことが出来る。

ナザレのイエス、キリストが十二の歳より三十歳まで竊かに養ひ給ふた心靈  
を持つてバプテスマのヨハネより洗禮を受けられたが其の時天よりこれ我心  
に叶ふ愛子也と云ふ聲が聞えた、實にキリストをしてキリストたらしめたのは  
此の聲であつた彼はこの一と聲によつて我は父の秘藏子也、父は我と共に在す  
てよ堅き自覺を抱かるゝやうになつた、天の父の秘藏子なればこそ且つ父彼と  
共に在せばこそ枕するところなくとも、前より後より將た左より右より責め立  
てらるゝ間にも不屈不撓の態度を以て諄々道を説いて止まず遂に萬世の救主た  
る使命を盡された次第である。

私共先づ舊約聖書の詩篇を讀み現はれ来る靈味津々たる言葉を我が心に滲め、

尙ほ新約聖書を開いてヨハネ傳に現はれたるキリストの靈的經驗、パウロ十三  
通の書翰に現はれたる彼が心靈修養の道程を辿つて深く考ふるところあらば心  
靈修養の根本はキリストのその如く、又パウロのその如く、「我は天の父の  
愛子也、天の父我と共に在す」てよ自覺に因ることを悟るであらう。

又私共を資けてこの自覺を強からしむるものは、神の遣り給ふた自然である、  
同時に自然を歌へる文學美術である、プラオニングの詩中「小兒の神觀」てよ  
詩がある、云く「神高きに在すと人の言へば、我は仰ぎ見ぬ松の梢、されど神  
は見え給はざりし」とこれ首句である、神を慕ひ神を見んとて求むる切にして  
あどけなき心を見ずや、「さは言へ造り給ひし自然の中に、いづこより漏るゝ聲  
かは知らねども、ヒンと我が身に染むばかり、御手に觸れけん心地ぞする」と  
これ終句である、哲學者でも、思想家でも、倫理學者でも、又科學者でも、こ  
れ以上の言葉を言ふことは出来まい、終日春を尋ぬるも、春の姿は見えない我  
家に歸つて軒の梅ヶ枝に春は來てあつたと云ふ事があつて人一度比奥山深く分  
け入りて山靈の氣身に染むところ孤座して天地の神に祈禱を捧ぐるの時必ずや

云ひ知れぬ一種の思ひに満されそこに始めて神の御姿を認めることが出来る、私共常にこの思ひを持つて神に接觸し、朝に夕に聖書を繙き瞑想を凝らし祈禱を怠らずんば知らず識らざるの間に我等の靈は養はれて、美しき心靈の光遂には出で、顔面に輝くに至るであらう。

私共日本人は古より靈性修養に資すべき良き書物を恵まれない不幸の國民である、近時坊間に行はるゝ文學書及詩文は云はずもがな、蜀山人の詩集、古今集、其中に輕妙の文字、綾羅錦繡の句はあるが靈的修養に貢獻する所は極めて少い、今こゝに舊約聖書中の詩篇を繰り返しくて深く味ふの時はブラオニングやテニソンやロングフエローやウオルゾオルスの與へざる或物を發見するではないか韓退之の語に人の能く人たるは其腹に四書あるに依ると云ふことがあるが私は改めて人の能く人たるは其腹に聖書あるに依ると叫びたい。

## 第二章 心靈の偉大

我なんぢの指のわざなる天を觀、なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、世人は如何なるものなれば、これを聖念にとめ給ふや、人の子はいかなるものなれば、これを顧みたまふや。  
(詩篇八章三節四節)

思へば心靈ほど偉大なるものはない。從來教會では人は罪にそめるもの、墮落せるもの、實に見る影もないものとしてをつた。成程人間の一面は誠にそうであつて中には鳥獸にも劣つた生活をして居るものも少くない。會つて米國の紐育で貧民窟を見に行つて、ア、これでも人間か、何のためにコンナ生活をして生きて居らねばならぬのかと思つた事がある。が然し夫れは朽つべき肉體の事であつて、一度人の靈魂の事を思へば決してそうでない。ヘンリ、ワイド、ピーチャイが、停車場で手も顔も黒光りに光つて居る新聞賣子を抱いて、其頬に接吻をした時或人か先生汚いじゃありませんかと云ふと、ピーチャイは「彼の中にも限なき魂があると思へば可愛くて接吻せずには居られぬ」と云つたと云ふ

話がある。若し人あり、深夜前庭に立ちて蒼空を仰ぎ、幾千萬の星辰が燦然として輝き、天體が無音の樂を奏して運行するを見、而して翻つて我と我身を顧み來るならば、何人も古の詩人と共に、いかなれば蛆虫にも比すべき吾等を斯も顧み給ふかと叫ばざるを得ないであらう。人の子はいかなれば之を聖念に認め給ふやと彼等が歌つたのは、是れ實に心靈の偉大を自覺したもの、叫びである。

去る四月のヒツパート、ジョーナル誌上に、信仰個條と云ふ一文があるが之れは近來の大文字である。其中に「人の靈魂は其の議論よりも大なり、又其行よりも大なり。人が自らの失敗と不完全とに屈せずして、理想を實現せんと欲して已まざる所以のものは、自己の衷に合理的なる無限大の意志の存するを自覺すればなり」云々とあるが、實に人の魂はその事業や議論や又たは成敗以上遙かに大なるものである。人は時とする神など云ふものはない、人間は此世限りのものだなどと云ふとがある。然もイザ死ぬとなれば何人も矢張り永遠に生きたいと希ふものである。之れは實に衷なる靈魂の自然の叫びである。曾て

私が東京で某博士を訪ふた時、博士は神はないと云はれた。所が共に卓を圍んで夕餐の膳に向ふと、自から食前の祈禱をせられた。博士は之れは習慣だと云はれたが、思ふに博士は議論でこそ神はないと云はれるが、博士の靈魂は神のないと云ふ事を承知しないのである。世の中にはそう云ふ人がよくある。之れ即ち靈魂が議論以上、現實以上、より大なる所以である。以下各種の方面より少しく之に就て述べて見よう。

第一 心理學上の現象。近年唱らるる心理學上の學說によれば人には二つの意識即ち現意識と其奥に潜める副意識がある。換言すれば今する事の後ろに隠れ居る更に大なる意識があるとの説である。

例へば演説を聞く、如何にもそうであらうとか、之れは自分が思ふ所と符節を合する様だとか思ふのは、云はく潜める意識が出て來たのである。又藤な腹案もないが、イザ演壇に立てば感興大に湧いて雄辯滔滔々満堂を壓すると云ふ如きも、此の副意識の作用に外ならぬので、之等は現意識より潜める意識が大なるを示すものである。之から考へても人の靈魂は現在の吾等が自ら知るよりも



遙かに大なるものであると分かる。

第二 道義學上より見れば如何と云ふに人の希ふ所は實際行ふ所よりも遙かに偉いものである。例へば人格の高い人が、節を變じ其人格を毀けた時世は堂鼓を鳴らして之を責むる。夫を責むる人は如何なる人物かと云へば其人格に於て品性に於て却てツマらぬ人である。之れは即ち其人の道義上の理想が云はしむるので即ち現實以上である。又自分が密かにツマラぬ事をやる、人は一人も知らぬけれども衆目の間に曝された如き悔恨を以て之れで男が立つかと責めらるゝは何のためか。云ふ迄もなく魂が責めるのである。是前にも云る如く人の魂が其行ふ所よりも大なる所以である。

第三 文學上より見れば如何、人の心は現實に満足が出来ぬものである。泰西に於ても佛蘭西のソラの如き獨逸のニキッエーの如き露西亞のゴルキの如き盛に寫實主義、現實主義を主張した。之等のものは一時は成程社會の迎ふる所となるかも知れぬが、決して永續的のものでない。現實の心は多少之を喜ばんも魂は承知しないのである。我國でも近頃自然主義など云ふ狂病的な文學が

勃興した。其あかげで色々な弊害が起つて來た。然し如何に墮落せる日本でも靈魂は之を許さぬのである。西洋でも常に現實主義を理想主義が仆す。我國でも早晩理想派の大文學が起り來るに違ひない起らねばならぬのである。何となれば覺醒せる偉大なる靈魂は云ひ難きの嘆きを以て高き文學の起り來るを望むからである。

第四 哲學上よりは多く云ふを要せぬ。大哲プラトンは現在の社會に満足し得ず彼の有名な理想國を書いた。又トーマス・ムーアも同じくユートピアを書いた。之等は何を意味するか、云ふ迄もなく現在に満足せぬ我が靈魂の憧憬を具體的に現はしたのである。其他何れの哲學者と雖も理想を説かざるはない、之れ吾人の現在に永遠に生くる魂の住家としては餘りに小なるからである。然らば主イエスは如何に教へ給ひしか。主が人の命は全世界よりも貴しと喝破せられたのは、人心の偉大を洞察したる萬古不易の真理である。イエスが如何に人の心を尊ばれたかは癡病人、税吏、罪人を愛し、之と飲食を共にした事でも知る事が出来る。人の心を愛するとは即ち其の魂を愛するの謂であつて、

馬太傳五章六章七章の絶大なる教訓は皆之れ限無く人の魂を愛するキリストの告白と云ふべきものである。彼は十字架の上の今はの際にすら、人の靈を思ひて、父よ彼等を許し給へ、彼等なす所を知らざればなりと祈り給ふたのである。我等は此の我等の裏に秘められて居る所の靈魂は儘に偉いものである事を認めねばならぬ。而して之れが修養を心掛けて、益々其大を完成せねばならぬ。人は肉體の爲めには絶えず食物を要求して、もし一食にても得ざるに於ては不平を起すものであるが、何故夫れよりもモット大切な我が靈魂のためには食物を取らうと努めぬであらうか。何故靈魂の食物を得るとに熱中しないのであるか。之には種々の原因もあらうが、我等の祖先から之を忽せにして居つた事も大なる原因である。歐米の立派な人々を見るに彼等は先祖傳來實に高潔なる宗教的生活をなして、父より子に子より孫に、其清い高い信念を傳へたものである。彼の新英州又は英國蘇格蘭の如き處で實に見上ぐる計りの慕はしい大人格に出逢ふ時に連も我等が企て及ぶべくもあらぬやうな、一種の深い高い尊いものがあるのを見るのは即ち之である。然し過去は追ひ難し、今や我等は自らを起點

として次に來るべき我等の子孫のため奮然として此大事業をなさねばならぬ。之れは教育家が如何に骨折つた所が又た報徳教や孔子教が如何に奮發した所が、眞に靈魂の尊貴なる所以偉大なる所以を自覺し、靈魂をキリストに結びつけ神に結びつけねば到底駄目である。此宗教的修養を外にしては斷じて不可能である。故に私は我が國民が一刻も早く此の靈魂の尊貴なる所以に目醒めて魂の修養を努め、鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く我靈魂は活ける神を慕ふと歌ひし古の詩人の境涯にまで到達し、先づ自ら高尚雄大なる奥ゆかしい宗教的人格となるの日の來らん事を希望して已まないものである。

### 第三章 靈育と徳育

我等の知る所は秘密たりし神の奥の智慧なり此は創世の先より神の預じめ我儕をして榮を得しめんが爲に定め給ひしもの也、此世の有司に之を譲も一人もなし若し譲ば榮の主を十字架に釘ざりしならん、録して神の己を受する者の爲に備へ給ひしものは目いまだ見ず耳いまだ聞ず人の心いまだ念ざる者なりと有が如し。

(香林多前書第二章七節、至九節)

諸君は教育に三育あるといふ事を御承知であらうと思ふ、即ち智育と體育と徳育である、今一つを其の上に加へなければならぬといふことを教育者が唱へる様になつた、即ち情育である、譬へば美を愛し美を樂むの情を養ふが如きは即ち情育の一である、又善を好み善を行ふ心を大いに發揮して、善を見ては何うしても之を爲さずしては居られないといふ情を養ふのは情育の一つかも知れない、けれども情育といふ時には寧ろ美しい情感を養ふといふ事に限つたものではあるまいかと思ふ、我日本では一向さういふ方面には今日まで心を用ゐら

れなかつたのである随分人の快しとしないやうな言葉を使つたり又見苦しい動作をしたり、又聴苦しいやうな事を云つたりした、人がどんなに不快に思はうが介意ないといふやうな事もある、稍や進んだる國民の間に於ては、所謂文明の上流に位する人々の間に於ては、情感を重んずるといふ事は余程注意されてある、成るべく我四邊に來たところの人々が心持よく感ずるやうに言葉使ひと云ひ動作と云ひ行狀と云ひ、大いに注意する事になつて居る、兎も角情育に付ては我日本よりも大いに進んだ點がある様に思はれる。

更に其上に加ふべきものは今晚の主題たる靈育といふ事である、徳育といふ方面は我日本に於ては勿論であるが、遠き昔に於て希臘にも羅馬にも支那にも印度にも盛んに行はれた事である、殊に我國の徳育は希臘、羅馬、支那、印度に比べて見ても劣らざるのみか、遙かに優つて居る點がある、明治維新以來に於ても體育智育を重んずると共に、徳育の重んずべき事を大いに唱道し、殊に二十三年に教育勅語を賜はつて以來は、何れの學校に於ても一年に二度なり三度なり捧讀式を行ふのみならず、學生には暗記させて居る、ところが學校の

徳育は案外効果がないといふ事であつて、獨り當局者が心を苦めて居るばかりではなく、私共までも其効果の擧らない事を見て、是ではならぬと思つて大いに心を傷めて居るやうな次第である。何故に効果が擧らないかと云へば餘りに形式に趁り過ぎ、何ういふやうにして君に忠を盡すとか、何ういふやうにして親に孝を盡すとか、又目上の人にはどう云ふ風にお辭儀をするとか、只坐作進退動容周旋といふやうな事が重になつてある、何うしてもそんな事では生きた人間、即ち活潑な心を有する人間を薰陶する譯には行かない、夫では決して萬物の靈長として立つ自由の精神を有する人間を養ふ術ではあるまい、彼の軍馬を養成するとか、或は犬や猫を養ふといふやうな事であれば、何歩進んで止まれ、幾分間止まつて居れば更に幾歩向ふへ向つて進め、或はワンと云はなければ此魚は食はされない、ワンと云へと云ふやうな風でも夫で躰が屈くが、自由の心を有つ所の萬物の靈長たる人間はさういふやうに外部から來るところの方法ではそんな薰陶方では立派な道徳家になる事は出來ない、何うしてもさういふやうな事では、多くの人々が敬慕するやうな人格を磨き立つる譯には行

かない、折角出來上つたところの人間は何うであるかといふと、宛然木偶見たやうなものになつてしまふ、かくの如くして養成された人には人が笑ふやうな時にも瞬きもせずして澄し込んで居る、教育勸語を捧讀する時は直立不動の姿勢を取らなくちやアならぬ、讀終つた時には最敬禮を行はなくちやアならぬといふやうな事又はチャンと出來るのである、けれども其人が一度教場を退いて宿舎に這入るか、或は學校を卒業して社員になるか、銀行員になるか將又店員にでもなるかした時には、其教育勸語で磨かれたところの直立不動の姿勢も、最敬禮を行ふ事も何にも役に立たず非道徳の行動を取るのが尠くないやうである。

そこで今日はマア一歩進んで徳育といふものは人格を磨かしむるものである、徳育といふものは立派な品性を養ひ育つるといふ事に着目をしなければならぬ、之をやるのには今までの方法では何うしても不可ないからして、大いに一ツ古への學問をさせた方が宜い、夫には論語や孟子を讀ましたら宜からう、是は今までの教育が誤まつたといふ、即ち今までの教育勸語に基づける徳育では

充分に目的を達する事は出来ないからして、何でも一ツ方法を考へなければならぬと云ふ事丈は明白である、而して替へるといふ方法がどんな方法であるかといふと、虫の食つた古い論語、又は孟子を此所へ引張り出して来て皆に讀ませる、尤も夫を讀めば決して無用ぢやない現に私の如きも論語を讀んで、ア、實に是は聖書にでもあるやうな良い言葉であるといふやうなのを悉く書抜き、又孟子を讀んで、是は實に自分の心に刻み込むべき言葉であるといふやうなのを悉く採擷して、夫を小さな本にして座右に備へて居るくらゐに論語も讀めば孟子も讀んだけれども、夫を千度萬度讀んで見たとて、果して夫がどのくらゐな益があるかと尋ねて見れば、何うも孔子さんはなか／＼エライ人である、孟子はなか／＼辯士であつて、能くも斯ういふ工合に言廻したといふ事に就ては非常に感服する次第だが我が人格又は品性を磨き養ふ上に於ては、格別の効がないと云つても宜い譯であつて私に取つては格別の効をなさぬのである、夫は前が基督教に氣觸れて居るからして、何程やつてもさういふ心でやるからして決して益がないといふ人もあるであらう、然れば孔子や孟子に心酔したとて

ろの漢學者とか、或は今日論語孟子を讀むところの人が何れくらゐに立派な品性を養ふて居るか、何れくらゐに見上るやうな人格を養ふて居るかと尋ねて見ると、其人達も大いに失望して、思つた程の効能もなかつたといふ事に歸着するであらうと思ふ。私は徳育といふ方面は今話するが如く論語孟子を讀むといふ事も、或は孔子孟子のやうな人格を慕ふといふ事も極めて善い事ではあるけれども、夫丈では何うしても目的が達せられない教育勸語を尊重して、さうして動容周旋禮に當るといふやうに心懸けた者は、其教場にては成功をしたが、教場以外に於ては失敗を來して居るといふが如く、論語孟子を讀んで味ふところの者も、論語孟子を讀んで居る其瞬間は大いに益があるやうであるけれども一度其本を疊んで棚の上に置いたといふ時には、何れくらゐ其感化が残つて其人物をして奇からしむるか又清からしむるかといふ事は問題であつて、何うも普く効果を奏する譯には行かない、此徳育といふものゝ目的は何所に在るかと思へば、私共をして仁を行ひ義を行はしむるといふ事に歸着するであらうと思ふ、尤も古人を調べて見ればさういふやうな養ひ方に依つて伊藤仁齋親

子、中江藤樹、貝原益軒の如き人も出来て居るからして、滿更効がないといふ事は出来ない、ところが明治の今日に於て夫が効がないといふは何ういふ譯であるかと云へば、昔の人は一生懸命に夫に心酔してやつたから夫の効があつたが、明治の人は傍ら仕事にやるから効がないといふ人があるかも知れないけれども、實はさうぢやアない、藤樹先生と云ひ伊藤仁齋先生親子と云ひ貝原先生と云ひ、是れは百年に一人か二百年に三人より出ないやうな極めて上根な人間であつたので、非常なる自信力と非常なる勢力を有した方であるからして、彼の先生達が孔子の教へに行かずして佛法に行つたならば、必らず佛法の善智識になつて居るに違ひはない、彼の先生達が軍人になつたならば、名将となつたに違ひはない、さういふやうなエライ先生は何の道を取つたとても極めて上達するのである、只私が問題として考へなければならぬと思ふ事は百年に一人出るとか二百年に三人出るとかいふやうな大人物ではなしに、さういふやうな人は放つて置いても一人で進歩發達をして行く人である、放つて置けば發達の出来ない放つて置けば進歩の出来ない否進歩發達が出来ないのみか墮落すると

いふ、詰らない人間になつてしまふといふやうな人々を、何うしたらば徳育で遣り付ける事が出来るかといふ事が問題である、西洋諸國の狀態を見て、何よりいふやうな所が一番徳の盛んな所であるか、何れの國が一番行儀の宜い國であるか、何れの國が一番能く公德が行はれて居るかといふ事を調べて見ると、論より證據徳育の盛んな所である、言換れば宗教々々の能く行届いて居る所である、然らば何處の國かと尋ねになるならば、毎も私がお話し申す如く英國であるが、英國といふ中にもスコットランドである、次は米國であるが、米國といふ中にもニューヨーク、ホストンを中心として居る其四邊の五州六州といふ間であらうと思ふ、宗教の最も盛んな所に麗はしい人物が居る、宗教の最も盛んなる所に美しい家庭がある、宗教の最も盛んなる所に美しい社會道徳が行はれて居るといふ事は、宗教家であるところの私共が之を論ぜずとも、苟くも耳を持ち眼を持つた人々が佛蘭西、伊太利、葡萄牙、西班牙の夫から露西亞獨逸等を歩いて、而して後に英國に踏込んでスコットランドに進入り、更に轉じてニューヨーク諸州の間を巡廻つて見聞し而して聴く物見る物觸

る物に就て公平なる観察を下す事の出来る人であつたならば、確かに心の底に此所は奥床しい、ア、彼所には實にア、いふやうな美しいものがあると銘肝し、自然に頭が低つて慕はざるを得ないやうになる事あらう。

然らば諸君が短刀直入私に向つて靈育といふものは何かと問はるゝであらうが、此靈育といふ言葉は宗教家の間に於ては決して今日に始まつた事ではない、昔から行はれた言葉である、殊に英語に於てはスピリチュアル、カルチユールといふ文字を使つて、頻りに唱へられて居つた事である、けれども靈育の二字は只宗教家が之れを唱へた丈であつて、未だ大中小の學校教育に従事するところの教育家の間には普及ばなかつたのである、ところが今日亞米利加の大學教育に従事して居る人々の中で、オペリン大學の校長キング博士の如き、又ノルスウエスターン大學校のゴイ教授の如き、其他スタンフォード大學の理學の講座を擔當するスタルボク氏の如き、ハルワルド大學のロイス博士の如き、又はクラーク大學の校長ホール博士の如き、口を開けば靈育の重んずべき事を唱へて居るのである、靈育といふのは體育智育德育情育と段々經登つて來て、

其總ての教育の冠として、尊重すべきものである、靈育とは御互ひ銘々の心が智、情、意といふ三つに岐れる様であるが、其智、情、意といふ三つに分たるる其奥に、モ一一つの奥深いところに潜んで居るものが即ち靈、或は心靈といふ文字も使へば、本我とか小我とかいふ文字も使つて居るのである、兎に角私共の心の働きの智となり情となり意となつて大いに發達をする、其大本源に遡つて其所に總てを繋いで居るところのものを指して心靈と稱するが、其心靈を智として養ふには科學哲學がある、之を意として養ふには道義學がある、之を情として養ふには審美學がある。

然らば心靈其者を養ふのは何うしたら宜いかと申せば、是は何うしても此天地宇宙の奥に在す大實在者といふところの大いなる心靈、我靈を此世の中に生ぜしめた大靈と相結び、此靈に觸るゝに非ざれば何うしても發達する事は出來ない、何うしても成長する事が出來ないといふ事は明白である、諸君の中には我衷に靈があるといふ事丈は自分も承知であるけれども、天地宇宙の奥に眼に見えないところの大靈があるといふ事は何うしても分らない、分らないけ

れども何か其所に在らねばならぬと思ふて、假りに在るとして置くのだといふ考を起しになる方がある、夫は丁度佛法の考と同じ事である、如来といふのもあるものじやアない、菩薩といふものもあるものじやアない、只我心はある、我靈はある、我靈の中に極めて高尚なる極めて奥深いところの理想がある思想がある、夫を如来とか菩薩とか名づけて假りに之を佛として拜んで居るのであるといふ事であるが、若しそいふ事であると、丁度案山子を此所に立て、鳥を威すのと同じ事である、我靈が……我心の他には何にもないものである、けれども假りに我心の内にとつて居るところの理想なり思想なりの粹の粹を如来とか佛とか名づけて、假りに在るとして置くといふ事であつたなら、假りに在るとして、夫で我靈を養はうと思つても出来ぬ、夫は丁度諸君の前に極めて巧妙な盡工にパンの書を書かせて、夫から牛肉をピスタキにしたり或はフライにしたり、或は其他の美しい料理にした書を書かせてさうして、パンと洋食の總てを諸君の前に掲げて、諸君が毎日其パンを眺み、其牛肉の色々の形に變つた料理

を眺んでお在になつたならば、諸君の身體が夫れで成長するか、夫で諸君の身體が確かに發展するか、到底さういふ事では發展はしない、到底さういふ事では成長はしないだろふと思ふ、矢張り客觀的に存するところのパンと、客觀的に存するところの牛肉を料理した物を手に取つて食はなければ血液にならぬ、食はなければ身體の滋養にならない、して見ると印度思想は別に心の外に何も無い、けれどもないといふのでは何うしても人が承知はしないからして、假りに在るとして置いて是で安んじてやるといふやうな事で養ひをしても夫では養ひが附かない、然らば道徳學者がいふやうな場合にナニ神も佛もあつたものじやあない、あれば結構であるけれ共、別にあるといふ事を極めなくても人間は品性を養ひさへすれば宜い、人間は人格を磨きさへすれば宜い、人間は何所までも高き理想を養ひさへすれば宜いと云つて押へ附けて見れば何うなるかといふと何うも押へ附けられた時には何だか夫で宜いやうである、けれども押へを取つてしまつた時には何うであるかといふと、心の中は何にも無いやうになつて、更に人生といふものは味のない詰らないものになつてしまつて、是で



は何うもならぬといふ事に成行くものである、今朝も私が話したいとした如く多くの賢者や學者が世に出て、口の酢くなるまで否な人の耳に蝸が出来るまでに道徳の講釋をなさる、人は正義の道を踏まなければならぬ、人は仁愛の道を行はなければならぬといふ事を講釋なされて、幾らかの人は立派な人間になつたけれども詰り其教は世の中に行はれないやうになつてしまつたといふものは、即ち何うも其深い所に這入つて養ふ心がないからである、品性とは何であるか、人格とは何であるか、仁義五常の道を行ふといふのは何であるか、私が見るところでは是は花である、是は實である、花なり實なりといふは何うして木の枝に着いたかと云へば、其枝が幹に連なつて居るからである、其幹は根があるからである、其根は眼には見えない人の眼には觸れないけれども、地の下の深い所に這入つて、上に十間伸びて居るなれば地の下にも亦十間這入り込んで、そうして地の下に在るところの滋養分を取つて之を幹に送り、幹から枝に送り、枝から遂に花として現はれ、實として現はれて來るといふ事になるのである。

私が今晚諸君の前に話しをする所の靈育といふは即ち夫である、徳育の極致は正義を行ふ人になるといふ、正義を行ふ人になれば即ち夫が品性となる、そこで立派な行狀丈が出来る、ところが其正義の道を聽いて、そうして夫を行ひ得るといふ人は稀な人間であつて、普通一般に於ては只正義の道を聽いた丈では行ふ事が出来ぬといふ事で失敗してしまふ、然らば靈育の極致は何であるかと諸君がお尋ねになると靈育の極致は信仰といふ、信仰に始まつて愛に終るのである、夫れは彼得後書の一章の五節以下に信仰に徳を加へ徳に智識を加へ、智識に撻節を加へ撻節に忍耐を加へ忍耐に敬虔を加へ、敬虔に兄弟の睦を加へ兄弟の睦に愛を加ふべし」とある彼所をお開きになつてよく讀みになれば其信仰といふものが眼に見えない所、即ち智、情、意の三ツに岐れて働らく前的心靈、極めて奥深い所に在る心靈が天地宇宙の奥深い所に在つて、人の眼に觸れない其大實在者の靈と相結び相觸れて、さうして其奥深い根本から養ひを取つて來るといふ、夫をイエス、キリストは誰でも分り易いやうに、何人も悟る事の出来るやうに天に在ます我儕の父よと云つて祈れと仰しやつた、管に祈る

といふばかりではなくして、イエス、キリストは天の父の御慈愛を人間にお示しになつてさうしてどんな下根の人間でも、一丁字を知らないやうな人間でも、天の父の深い御慈愛が其人の腹の底へ一度示されると、其人は茲に一種の光明に觸れて、其天の父を慕ひ天の父に懐いて、己が所有物も我靈も我身體も、何も彼も悉く天の父の御前に差出して、献身犠牲の生涯を以て神に仕へやうといふ心になる、是れが宗教である、己が持てるところのものは財産でも學問でも名譽でも爵位でも、尙己が生命までも神の聖前に差出すといふ心を此所に起さしむるといふのは、是れ非常なる力である、其の力を人々に與へて、さうして人々の心をズーッと高いところへ引揚げてしまふ、既に高い所へ引揚げられて、さうして朝に夕に天の父よと云つて祈り、朝に夕に其の父の御聖徳に感化されて、其の愛に率かれて居るといふ事になれば、我衷には神の子といふ高き理想が生じて来る、我衷には天の父が借に在すから何をも恐るゝに思はないといふ慰安が出て来る、さうなれば、我心の奥底がズーッと濕ふて来て、心廣く體胖かなりと云ふ心持になるのである、さういふやうな人が此所に出來たとす

れば其人の顔を見て御覽なさい、其人の人格を見て御覽なさい、實に麗はしい實に尊とい、何うしても帽を脱いで敬禮をしなければならぬやうなものがあるのである、靈育も此妙境に達すれば眞に難有のものである。

若し諸君が「ジョンバンヤン」といふ一人物を御研究になり、又は「バンヤン」が著した天路歷程を御研究になつたならば、私のいふ事が能くお分りになるであらう、バンヤンといふは若い時には實に仕方のない男で嘘言を吐き人を呪ふやうな事もする、殆んどあらゆる悪事を行ふて遂に零落果て、日本で云へば煙管の直し見たやうなことで行つたのである、一日彼れが商賣用で或人の家を訪ねた、すると二三の老婦人が車座になつて話をして居る、聞くともなしに其話に耳を傾けて居ると、婆さん達が交る代る心靈上の話し、交る代る安心を得た話しをして居る、バンヤンは仕事をして居つたが遂に仕事を廢めて、其話に全身耳となつて聞入つて居つた、話しが終ると彼は我に歸り、ア、實に驚いた、實に驚いた、彼の三人の婆さん達は教育もなく、一丁字も知らないといふやうな無學な婆さん達である、然るに今の話しは我耳には天の使者の話しのように

聞えた、彼の三人の婆さん達の顔を見るにつけ、彼の婆さん達の美しい品性を見るにつけて、我は恐ろしいばかりに罪人である何うして斯ういふやうな恐ろしい罪を行ふて居つたか、此所で一つ我は生れ變つて立派な人間にならなければならぬといふ、無限の威がベンヤンの心の中に起り來つたといふ、是から彼は天の父を慕ひ、キリストを慕ひ、生命々々、限りなき生命と云ふて一生懸命に天の父に寄附り、キリストに寄附つて、さうして罪を憎み汚れに打勝ちたいと思つて非常に奮闘をいたして居つたが、遂に非常なる人物となつたのである、夫れから侃々諤々の辯を揮つてさうして斯道を説いた、當時英吉利に於ては免許を得た即ち按手禮を受けた牧師の外には、英吉利の政府の免許を受けた教會員の外には道を語る事が出来ないといふ制度があつた、夫に反對してベンヤンが頻りに道を説くのであるから、到頭牢屋の中に打込まれた、彼れば牢屋の中に十二年の間いれられた其の間に何をいたしたか、即ち著述に従事した、初め筆を執つて天路歷程を書掛けた時には手が震つて何にも書けなかつたが、聖書を精讀すれば結果立派に靈育上の書物を著す事が出來た、是れは二十年前ま

では聖書に次で人々が愛讀した書物であつた、天路歷程は實に面白い書物であつて、此方の靈的經驗が進めば進む丈分るけれども、其の經驗のない者には分らないと云はれた書物である、使徒パウロが大人格に成つたのは、今朝お話しした如く、ステパノが石にて打殺された時に笑を含んで、自分の身を害する人々の爲に祈禱をして此世を去つたのを、深く感じたからである、又ベンヤンが斯くの如き立派な人格に成つたのは、三人の無教育な女達が無教育ではあるけれども、靈育といふ方面には非常に進んで居つて、未だベンヤンが聞いた事のないやうな心靈の世界の話をしたからである、諸君、曩にお話ししました如く藤樹のやうな仁齋のやうな、益軒のやうな人間ならば、夫は別に是れといふ靈育を與へなくても其自信力と其勢力を以て孔子の教を取れば、聖人賢者といふところまで行く事が出來佛に歸すれば善知識となれる人である、けれども私共はさういふ上根の人間に生れずして、普通下根の人間に生れたところの者が、罪を解脱し慾に打勝つて、立派な美しい人格となりたい、尊い品性になりたいといふ事であるならば、麗はしい花を見、麗はしい實の熟つて居るのを認むる

時に方つては、地の下の見えない深い所にまで根が張つて居る事を忘れてはならない、其根があつて初めて花となり實となるといふ事であれば、私共の徳育のモットー後ろに靈育といふものが控へ、さうして眼に見えないところに於て理想を養ひ精神を養ひ趣味を養ひさうして天の父を拜し天の父を慕ふ事に依つて、右の如きものが私共の内に發し來つた時に初めて夫れが四肢百骸に現はれて來て、諸君が平素御希望なさるところの人格も出來れば品性も出來る、人格が出來れば品性が出れば、其人格あり其品性ある人が行ふ時には義の行ひとか仁の行ひとか、不言不語の内に五常の道は獨り行へるやうになる、ところが動容旋禮に當るやうにといふ事を何ぼ考へて居つても、此人格が高まらず此品性が清まらなかつたら到底出來ない、然るに其人格や品性なるものは、我々下根の人であつては何うして養ふか我々凡人であつては如何にして之を養ふかと云へば其上根の人、即ち藝に列擧したやうな人物が生れながらにして有つて居るやうなもの、我々は生れながらにして有たないから下根だ、夫をキリスト、イエスが私共に與へやうとして世に降りになつたのである、使徒パウロは哥林多

前書の第二章に「目いまた見ず耳いまた聞ず人の心いまだ念ざる者なり」と録したが、夫が即ちキリスト、イエスが靈の賜物として我々にも與へなさるところである、此靈の賜物を得なければならぬといふ事を此所に鼓吹して居る。私は近頃此方面に於ての教育が足りないと思つて居る、我日本の總ての學校に靈育を施したのであるけれども、未だなか／＼さういふ場合に行かない、切めては基督教會に集るところの我々が、其靈育の何者であるかを深く味はうて、之を我物としたいものである。更に一言したい事は、斯くの如き靈的實驗を得るのが靈育とすれば、夫は諸君が靜かなる部屋に於て膝を曲げて、天の父と御交際なさる事に依つて得らるべきものであるかも知れない、けれども膝を曲げて天の父と交はるに先だつて必要な事は、其靈育に關する書物をお讀みになる事である、然らば靈育に關する書物とは何であるかと云へば羅馬書第八章である、之と共に哥林多前書の第二章も皆お讀みになる筈である、更に諸君に讀んで貰ひたいと思ふのは約翰傳である、其約翰傳をお讀みなされて何しても其意味が分らないといふ事であ

るならば、不肖私が「約翰傳釋義」といふものを著はして居る、其一本をお求めになり、二度三度初めから終りまでお読み下されたならば、幾らかお助けになるであらう。

前述の如く徳育といふ丈では力足らずして、到底下根の人間に於ては其目的が達せられない、上根の人間ならば自信力と勢力に依つて遺果せる、そこで我々下根の者に於てはいよいよキリスト、イエスが與へなされた其靈育といふ方面に這入つて、上根の人間が持つて居るものよりも更に優れる心靈の世界の奥妙なる味ひを得ねばならぬ、左すれば夫が自信力となり勢力となつて、上根の人が進んだところよりも更に以上上の所にまで進む事を得るので、此所に立派な品性と立派な人格が出来て、諸君が希望せらるゝところの行状も出来るやうになる、徳育と靈育は恰も車の兩輪の如きものなれば此二ツを結び付くるに非ざれば、到底目的は達し得られない、どうかよくお考へになつて、一層其意味をお味ひにならん事を希望する次第である。

#### 第四章 不覺の靈力

イエス自ら能力の己より出たるを知おほせいの人々を顧みて曰けるは我衣に捫りし者は誰なる乎、  
(馬可傳第五章三十節)

本節の趣意とする所は會堂の幸にヤイロといふ人があつて或時イエスに來つて其足許に伏して、私の幼き娘が今死なんとして居るから、何卒來て彼の女の上<sup>2</sup>に手を按いて生かして下さいといふ切なる願ひをした、イエスは其願ひを容れて足をヤイロの家にお運びなされる途に、多勢の人が押合つてイエスに追隨たからイエスは人の力に擁されて前へくとお進みなされるやうな有様であつた、其内に不思議な事には何かイエスのお身體からして力が出たやうにお感じなされ、誰か私に觸つた者があるかと仰せられた、弟子達はこんなに多くの人々が押合つて居りますから、誰が觸つたのか到底分りませんと申したところが、誰か觸つた者があるに違ひはないと云つて其邊を環視しなされた時に、一人の女が恐るゝ前へ來て私は永い間病氣に罹つて困つて居りましたが、先生のお召

物にでも觸りますれば病氣が治るだらうと思つて一寸觸りましたところが、直ちに病氣が治りましたと申したと云ふことである。

私は近來人間に失望をする、汽車に乗つて居る人を見て失望をする、又船に乗つて居る人を見て失望をする、管に往來の人を見て失望をするのみではない、博士、學士、道德家、宗教家といふやうな一粒撰りの人を見ても失望をする、表面に現はれた丈の人間を見ると是が神の姿に象つて造られた人間であるならば、神は餘程人間を造り損ひ給ふたのであらうといふ感が起るのである、是が萬物の頭であるといふ事は受取れない、何うも萬物の内にて人間が其上席を占むるとは訝しい話である斯く考へて人間を研究すると、第一己れが淺臺なこと、基督信者になつて以來既に幾十年を経て居るにも拘はず薩張り詰らない、又他人を見ても心から敬はねばならぬやうな立派な者は多く見當らないので、甚だ失望の至りだと思つて居る。

然るに歴史上に現はれたる人物中で、今尚ほ世に知られて居る人、又は知られざるも、大に優れたる人々に就いて研究する時は、人間は打見たよりもエラ

イものである、成程是れだから神の姿に象つて造られたとも云へよう、是れだから萬物の頭とも云へようといふ考へになつて來る、愈々其方面を調べて見ると、愈々人間の奥床しい事が分つて來て、心の内に大いなる喜悅を生じた次第である、今其研究の二三を擧て見よう。

人間には意識の外に副意識がある事は心理學者の證明する所なれば既に御承知であらう、副意識とは演説をする、オルガンを弾く、手紙を書くなど總て人間が仕事をする時に忠義なる下僕となる者で言はゞ意識の家來である、意識を助くる所の忠義なる下僕である、其副意識の一段高尚なる方面がある、夫を英語ではサブプリミナルコンシヤステスといふ、是れは潛意識といふ意味で、心の内の奥深いところに潜んで居る力である、意識を滿洲の野に百萬の軍隊を指揮せる大山元帥に譬ふれば、副意識(私のいふ潛意識)は兒玉大將を長とせる參謀部である、意識を東郷大將に譬ふれば、潛意識は三笠艦に集まつて居る海軍の粹を集めた最も優れたる參謀部である、其滿洲に於ける陸軍の參謀部と、三笠艦に集まつて居る海軍の參謀部の後ろには東京に參謀本部があり、其參謀本部

には海陸軍の俊才が集まつて如何せば此戦ひに勝つ事が出来るかと、智恵を絞  
り力を集めて居るのである、私共の意識は話をしよう、詩を作らう、歌を詠ま  
ふ、書を描かう、音楽をやらう、樂譜を作らう、と云やうに活きた働をする、  
其活きた働さをさせる其後ろに潜意識なるものがある、其所には非常な力が集  
めてあつて時々驚くべき有様を現はすとである、意識が大名の表座敷であれば  
潜意識は奥座敷である、其奥座敷の力に依つて表座敷が活動を呈するのである。  
時々世の中に神童といふ者がある、日本では五六歳の子供が巖谷一六も小首  
を傾けるやうな立派な字を書く事がある、又五六歳の子供が小野湖山も舌を巻  
くやうな詩を作る事がある、西洋では度々數學上に神童が現はれるが、私の調  
べたものゝ内には數學上の神童が十八まで載せてあつた、其最も早く算盤の才  
を現はした者は三歳で、其最も遅く現はした者は十歳であつたが、彼等の才智  
は實に驚くべきもので、此處に一萬七千八百六十一は何と何を掛け合せたもの  
であるかと聴くと、即ち其尋ねの未だ終らない先きに三百三十七に五十三を乗  
けたのであると答へた、數を聞くや恰も電光石火の如く直ちに何々を乗けると

即答をなす、如何にしてそんな答へが出来ると尋ねて見ると自分でも分らな  
いのである、然しこの驚くべき才智も多くは五年でなくなつて、普通の人に歸  
つてしまふ、ピッテルとホエートリといふ二人は其算盤の才が生涯續いた  
といふ事である、普通の人に一萬七千八百六十一は何と何の數を掛け合すれば  
出来るかと尋ねれば、なかなか急に答へが出来ない、けれども數學の神童は直  
ちに三百三十七に五十三を乗じたものであると答へる、實に驚くべきものであ  
る、大山大將をして戦に勝たしめたのは參謀長である、其參謀長の下に集まれ  
るは陸軍の大英才である、其の陸軍の大英才と共に數十年間に集められたる地  
圖だとか、其他軍事に關する書類だとかである、數學の神童が斯の如く電のや  
うな力を以て數を現はすのは、其神童の心の奥に在る潜意識といふものゝ働  
きである。

更に進んで詩人が詩を作る事を言て見よう、佛蘭西人にシヤバネーといふ詩  
人があつたが、彼は詩を作り掛けてクツと睡つてしまふ、次の朝起きると、昨  
日作り掛けて置いた詩の續きが泉が地の底から混々として湧き出づる如くに、

金玉の名句が出て来る、これを速記者が私の説教を速記するやうに速記すれば、茲に何人も及ばないやうな最も優れたる詩が出来たといふことである、尙其他英國で有名なジッケンズといふ文學者があつて『ミッセスカンク』といふ傑作を著はした、其傑作をなすには奥座敷の方から微かな聲がするので、其の聲に耳を傾むけつゝ筆を走らしたといふことである、希臘の聖人ソクラチスは常に其心の中にデモンといふ魔が居つて、深遠なる考へを彼に與へて呉れたといふ事が書いてある。

十五世紀の頃であつたと思ふ、佛蘭西が英吉利の爲に攻められて、殆んど國の半分は英領になつてしまつた時に、ジャンダークといふ無學なる百姓の娘が此佛蘭西を英吉利の手より救ひ出すのは我が使命であると思ひ、時の帝王に見へて其事を奏聞すると、帝王は殊の外満足に思召し、政府は一に汝の手に任せるといふ特命を與へられた、茲にジャンダークは千軍萬馬を指揮し、佛蘭西を救ふて立派に勝利を得せしめたが、時はならずして捕はれて火炙の刑に處せられた、これ彼女が十九の年である、無學なるジャンダークが佛蘭西を英國の

手より救はんと志を興したのは僅に十八才、而も其僅かの日月に大軍を指揮して敵を惱ます事が出来たのは、是れ彼女に兵法に達したる智識があつたのではない、陸軍の事に精通せる智識があつたのではない、只其の奥深きところに潜んで居つた力が現はれ來つて、斯の如き偉大なる働きを爲しめたのである。聖書を開いて見ると、使徒パウロは我内に二人の人ありと申して居る、一人は惡をなせよといふ、一人は善を行へよといふ、この善をなせよといふ力が即ち潜意识を意味するのであるまいか、昔から今日に至るまで代々の神學者がイエス、キリストの頭腦は普通の頭腦ではないと思ひ、其の頭腦の中には神の魂と人の魂とが二ツ相住居して居つたと信じたのである、人の魂といふ方は時に飢を叫んだり時に疲勞を叫んだりして居るが、神の魂は其奥深い所に潜んで居つて、時々其大いなる力を現はしたものである、キリスト、イエスが世界萬人に優れ且つ神の子と唱へらるゝ所以は、全くイエスの頭腦の中に神の靈が宿つてあつたからだと申すことである、其神の靈は則ち善意識である、猶太の總ての預言者、總ての天才が代々に練上げた所の其宗教の潜意识が、キリスト、



イエスの内に住居をして居つたから、希臘も羅馬も何れの國も現はす事の出来  
ないやうな宗教の大神才なるキリストを猶太の國が現はすことが出来たと學問  
上から説明をする事が出来るのである、其他ラファエルが畫を描いたとか、ミ  
カエルアンゼローが像を彫つたといふ時には、人以上の力が其畫や其像に現は  
れて居るといふは、此畫にも此像にも、内に潜んで居る靈力が現はれたと申し  
て宜い、潜意识の力は實に偉大なるものである。

諸君は斯様な話しを聴きになれば不思議だ、實に不思議な事だと思召すか  
も知れないが、何にも不思議な事はない、或婦人が子供を風呂に入れて居つた  
時に、俄かに火事だ、サア火事だといふ騒ぎになつた所が、孱弱き婦人が其  
風呂桶に子供の這入つた儘引抱へて外へ出したといふ話がある、其力は何所か  
ら出たのであらうか、其婦人は平素懸命の力を出して見ても、大方此の見臺が  
上らぬくらゐだが、スハ火事、子供の命に關はるといふ大事が眼の前に現はれ  
た時には其孱弱い女の手を以て、風呂桶に子供の這入つたまゝ外へ出すといふ  
力は何所からくるのか、肉體の力の上にも斯ふいふ潜んだ力がある、私共でも

平素相撲を取れといふ事であれば、誰にでも負ける事を自覺して居るが、人間  
の一大事といふ場合になれば、平素力のない私でも五人や十人を殴り倒すくら  
ゐの事は譯はないと思ふ、斯様に只ならぬ力が肉體の上に加はつて来るのであ  
る、肉體の上に加はつて来る力は肉體の力であるが靈の上には只今説明した通  
り詩を作る、畫を描く、彫刻をする、等の場合に、到底人間の力ではない、神  
の力といふべきものが現はれて来る事を見るのである、道徳の上にも於ても、亦  
斯くの如き現象を見る、二十三年も牢獄に繋がれて罪といふ罪は悉く犯し、放  
火もすれば盜強もする、人殺しもすれば皆様の前に云はれないやうな罪を幾度  
犯したか知れないといふ者が、今日私共が説教に行けば實に親切を盡して、寢  
床の世話から食事の世話、汽車に乗れば汽車の世話、船にのれば船の世話をす  
ると云ふ其殊勝なる有様を見る時に、人間以上の力が彼れの上に加はればこそ、  
極悪の罪人が斯かる殊勝げな男になつたかと思はるゝことである、實に人間に  
は善意識といふところに人間以上の神の力が加はつて来て、人間では出来ない  
道徳上の生れ變りを得せしむる事を見るのである、使徒パウロの生れ變り、オ

「ゴスチンの生れ變り、イグネシヨスロヨラの生れ變り、聖フランシスの生れ變り、今日我々が眼の前に見る人々の生れ變りも凡眞個の生れ變りであれば皆これ潜意识の上に人間ならざる神の力が加はつたのであるといふ事は、私が信じて疑はない所である、然らば此潜意识は何所に通じてかゝる力を現すかと云ふに、此は靈の世界に無線電信で通じて居る、我々の心の奥まりたる所に潜んで居る靈の力は眼に見えない天國に通じて居る、我々の衷情に、己も氣づかないやうな所に潜んで居るこの靈能は天地の奥に位したまふ天の父に通じて居るといふ事は、心理學者が學問の上から今日證明して來たのである、只聖書に書いてあるといふ事丈ならば、宗教家の廢物語りであるといふであらうが、英國に於いて心理學者の大家と仰がれるマヤ博士の如き、或は亞米利加に於いて心理學の大家と仰がれるゼームス博士の如き人が之を證據立てて來たのである、昔に心理學者が之を證據立つるのみならず英國の科學界の大王と呼ばるゝボルミンハム大學のサーオリオルロッテは、科學の方面からして人間の心の内に潜まれたる靈は、天地の奥に在る靈なる神と相通じて、此靈なるものは未來永劫

決して滅ぶべきものでない事を證明して居るのである。

諸君、其潜意识の中に在るものは神の力といふよりも、導神が其處に在すと云つても宜いくらゐるものである、主イエスがヤイロの家に足を運びなれた時に、女が石物に觸つたが、主イエスから力が現はれて、其女の病ひが立所に癒えたといふは潜意识から力が出て行つて、其病ひを癒したのである事は、今日心理學者が催眠術の上から證據立つる事が出来るであらうと思ふ、けれども主イエスがエリコに於いて桑の樹に登つて居るザアカイに降りて來い、今夜汝の家に宿ると只一言話され而してザアカイの家にお還入りになつてから未だ一言の説教もなさらぬのに、ザアカイは、主よ私が他人から無理な事をして金を奪つた事があるならば、之を四倍にして返させようと罪の悔改めをしたのは、キリストの善意識に在るところの靈力が現はれて、ザアカイを悔改めしめたのである、主イエスが弟子方の船にお乗りなされた時に、まだ一言も言葉を發しなさらぬのに、ペテロは此罪人より離れ給へと言つて、キリストの前を飛退いといふのは、何かキリストの靈力が現はれて、たペテロに其罪の深き事を非常

に感ぜしめたものであらうと思ふ、主イエスが此靈力をお持ちなされたばかりでない、フランシスもザウフェーも之を有つて居つた、今より凡そ七八十年前米國に於いて盛んに道を傳へたフキニーの如きは紡績工場に行くと、サアフキニーが來たといふので、紡績の女工共が、クス／＼笑ひ出す、大方其姿の可訝しいのを見て笑つたのであらう、其時フキニーがクスクス笑つて居る女工を一瞥すると一言の説教をしないのに、其娘達は其所に屈んで、罪を悔いて泣叫んだといふ事が記されてある、三年ばかり前に英國のウニールスに現はれた、ロバートといふ青年が集會に行き、是から讚美歌を謳ひませうとの只一言を發し、其讚美歌を唱へ出すと、其所に集まつて居る人々は皆罪に責められて泣いて罪の赦しを求めたといふ事が書いてある、是等は群衆心理といふ方面から幾分か説明が出来るに違ひはないのであるが、私は宗教上から之を見ると、人間ならざる神の靈力が彼等に潜んで居て、これが彼等の人格を通じて自己には分らぬが何時か其力を現し人々に罪を悔改めさせるのであると思ふ、此力が基督教になかつたならば、基督教は既に此世界の表に存在して居ないであらう、若しあ

つても佛教の如くに誦らないものになつてしまつて居るに違ひはない、けれども此力が時々現はれ來つて、枯れんとする時に濕潤を與へ、死なんとする時に活力を與へ、さうして神の教會を今日まで活かして來たのである、今にも我日本に於いて其靈力を有する人があると思ふ、これは所謂不覺の靈力で、機があれば力を得て一ツ動かしてやろうなど、思ふ人には其靈力はない、謙遜にして神の聖意に叶ふやうにと殊勝な精神を以て心から神に事て居る者が、何時しか其奥座敷即ち潜意识から神の力が非常な勞ひを以て現はれ來るのである、私共常に靈力が知らざる内に現はれて、人を動かす事を望むばかりではない、私共の道徳力も亦潜意识として思はず知らざる内に現れ人々が其の前に出れば、もう其罪を謝らなければ堪へざる苦痛を持つやうになるだらうと思ふ、只私が希望する所は、智識上に現はれて居る天才が道徳上、心靈上に現はれて、さうして死せるが如き信者、枯れたる如き信者を活かして、遂に神の御國が盛んに世界の表に擴まる事である、けれども其力は求めて得られるものではない、只私共が求むる所は日々キリストを學び、且つ意識上に於てキリストを理想とし、

キリストを救主としてキリストの目の前に行きたいといふ考へで一生懸命に努め勵み朝に夕に祈禱を以て神に近づいて行く内に、何時しか潜意识の神の力が現はれて来て、自分は知らざるに、自分の奥座敷に實に感謝するばかりのエライものが現はるゝといふ事となるのである、只諸君と共に努めたい事は我々が目を覺まして居り、我々が生きて居る以上は一生懸命に努めて、不覺の靈力が我が知らない靈力が我の上に加はつて来るやうにならねばならぬ、キリストは自分の身體から力が現はれて、彼の十二年血漏を煩つた女が癒されたといふ事は一言半句も求めなかつたのではない、お祈りなかつたのではない、是は神より賜はつて其所に行つたものである、私共も神に近づき神の聖意に叶ふやうな信仰を養ひ、而して立派な人格を築き立て、行くならば、思はず知らず其力が四方の人々を感化するやうになる、彼れを一ツ感化しようといふやうな生臭い、水臭い考へでは到底出来るものではない、人は神に象つて造られたといふのはこゝである、人間が萬物の靈長といふのはこゝである、只人間が水を飲み飯を喰つて、さうして暫らくすると死ぬといふのでは萬物の靈長ではない、神に象

つて造られたものではない、思はず知らず靈力が加はつて来る時に又其靈力の現はるゝ源に這入つて、其所に神の聖意に等しい心がある事を認むる時に、其人間の前に頭を低げる譯である、其人間の前に大尊敬を表する譯である、今日學問のない人でも其靈力を有つた人がある、私共は其人に對しては頭を低げざるを得ない。

## 第五章 使命の自覺

民みなマアテスマを受けるにイエスも亦マアテスマを受けて祈るとき天ひらけ、聖靈の如き狀にて其上に降りぬ又天より聲あり云なんぢは我愛子わが喜ぶ所の者なり、時にイエス年おほよそ三十にして福音を宣始む人々にヨセフの子と恣れ給へり

(路加傳第三章二十一二十三)

紀元三十年の頃ヨルダン河の邊に身には駱駝の毛衣を着腰に皮帶を束ね、食物は蝗蟲と蜂蜜丈であつたといふ大預言者、名はヨハナと申すが現はれた、待ち設けたることゝ猶太は申すに及ばず、四方より幾千の人々か雲霞の如くに押寄せて来て、或は自己の罪を責られて豁然として悟る者もあり、或は己が使命を教へられて欣然として悦ぶ者もあり、誠に何うも其勢は凄まじいことであるといふ評判がガリラヤの田舎までも聞えたので當時ガリラヤの湖邊で漁をして居つた若い漁夫の中でも、シモンの兄弟のアンデレ、ゼベダイの子ヤコブとヨハナ、其他二三の人人が逸早く駆付けて、ヨハナの偉大なる人格に打たれ、

且つは其靈能に満てる教訓に心を取られて弟子となり、ガリラヤに歸り来る毎に師のエライイことを吹聴して已まない、又ヨハナは神の國は近づけり汝等悔改めよといふ旗を樹て、盛んに大説教をやつて居るといふ話しを傳へたのである。

當時イエスは父ヨセフが住んで居つた家に母親のマリアと四人の弟、二人の妹達を養育する責任があるので、日々大工の仕事衣を着て、或は家を建てたり或は塀を設けたりして、恰もヨルダン河邊の預言者騷は知らざるものゝ如くして日々の仕事に力を入れて居られたが、ヨハナが天國は近づけり汝等悔改めよといふ説教をする、而かも悔改むる人が澤山ある、其説教の脊後には猶太國に過去四百年間見ることの出来なかつた、大預言者といふ、實にエライ人格があるので、ヨハナの精神は舊約書中の火の如き預言者、エリヤそつくりだといふ評判を耳にされた時は、左なきだにキリストの心には此頃何か非常な響が聞えて居つた、表面から見れば何にも大きな出来事があることは知らざるものゝ如くして、日々の仕事に忙がしくて居られたけれども、其實はイエスの裏にエライ

ものがあつた丈夫れ丈、其心の耳に響くところの響はエライものであつたらうと思ふ、内に何にもエライものはない人はどんな時勢になつても、何ういふやうな出来事に出會つても、夫は済ましたものである、何にも心に響くことはないのであるが、内に一種エライものがあれば非常に響く、其響は智恩院の鐘を耳許に持つて来て撞鳴すよりもマア少し響くことである、バプテスマのヨハチがヨルダン河の邊りに出で、神の國は近づけりといふ説教をした其時代の模様は我日本の徳川の末維新の幕が將に開かれんとする時のやうなものであつた、三百年の長き夢は破られて驚天動地の事變が世の中に出來湧いて來るに違ひはないといふ時代に當つて、三千萬衆中胸にエライものを持たない人々は依然として眠つて居つたが彼の薩摩なる片田舎の小松帶刀の心の中には何か大いに響くものがあつた、長門の田舎なる吉田松陰及び其一輩には何か響くものがあつた、越前にては橋本左内、信濃にては佐久間象山の胸に何か響くものがあつた、内にエライものを持たない人には何にも響かない、内に何か一種の力を得て居る人々には非常に響いたのである、響いたからして何うしてもジツとして居ら

れないので皆京都を指して上つて來たのである、丁度其如くにバプテスマのヨハチ即ち野に呼べる人の聲が響いた、ペテロが行くアンデレが行くヤコブが行くヨハチが行く、ナタナエルも行けばビリボも行く、シモンも行けばイスカリオテのユダも行くといふやうな譯で、皆ヨルダン河邊に引付けられたのである、イエスは後ればせにガラリヤを窃と脱けて、多勢の人々の中に立混つて、ヨルダン河の邊りに歩みを選び、人々の後からバプテスマのヨハチの容貌風采を眺めて居られたのである、悔改めよといふ雷の如き聲も、別にイエスの耳には何等の響をも與へなかつたのであるがヨハチの顔に現はれて居た熱心と、其使命の爲には火の如くになつて叫ぶ其眞摯なる態度は確にイエスの心に何等かの響を與へたに違ひはない、遂に群集の中からしてイエスが現はれて、近くヨハチの傍にお立ちなされた、ヨハチは一目イエスを見るや其崇高偉大なる人格に打たれて、陶然として酔ふたのである、さうするとイエスは何う思召したか謙遜つてヨハチの前に來て、何うか私もバプテスマを受けたいものであると仰せられた、其時ヨハチは私が貴方に洗禮を受くべき筈なるに、何うして私が貴方に

洗禮をお授け申すことが出来ませうかと云つて拒んだのである、イエスは否とよ是は世の人々の普通守るべきところの禮儀であるから我にも洗禮を授けてよと頼みなさるゝので、左らばと云つてヨハナは遂にイエスの手を取つてヨルダン河に降つて水中に洵然と沈んだのである、今や河から上らんとする刹那、不思議なるかなイエスの心中にありし霧の四散して恰も煌々たる太陽を見るが如く二ツ自覺なされたものがある、一は是れ我心に適ふ愛子なりといふ自覺と今一つは犠牲的公生涯に入るの自覺であつた。

尤もイエスはバプテスマをお受なさるゝ其時まで神の子て自覺をお持ちなさらなかつたとは思はない、イエスが十二歳の時にエルサレムの宮にて父母の間に對して貴方々は何所を探して居らつしやつたか、私は何所へ行きませうか、行くべきところは天父の家ではありませんかと仰せられた、此一言を以て見てもイエスの心中には神の子であるといふ一の自覺があつたに違ひはない、而して沈黙十八年の間イエスが或は山に祈り或は谿に祈り、或は人知れず己が心を磨きなさるゝ時に、我は天父の愛子だといふ自覺をお養ひなされたであらう。

然らば其バプテスマの時にわざ／＼天より聲ありて、是れ我心に適ふ愛子なりとお聞きなされたといふは何ういふ意味であらうか今までも父の秘藏子だ、天父の愛子だといふ事は思つて居らつしやつたが、いよ／＼バプテスマを受けて水からお上りなさるゝといふ時に、一層切實に天父の愛を感じ天父の心とイエスの心とが一になつて、殆んど水も洩れないやうになつたのを意味するのだからと思ふ。

今一つの自覺は三十年の間は私の生涯で大工をして居られた、イエスのバプテスマは罪の悔改めのバプテスマでもなければ又自己中心の生涯を離れて神の生涯に這入る意味でもない、イエスには罪の自覺はないのである、イエスには私といふ自覺はないのである、然らばイエスのバプテスマは何の自覺に這入りになつたのであるかと云へば、今までは私の生涯を送つて来たが、是れよりは父の聖前に己が身を捧げて、犠牲の生涯に這入つて、世の人を悉く神の子にしなさなければ已まない、イエス自身は是れ我心に適ふ愛子なりといふ、神の聲をお聞きなさるゝと同時に此世の人々が罪や汚れの中に陥つて居る有様

を樹はして、之に天の御慈愛を知らしめ此人々をして皆神の愛子たらしめたいといふ即ち救世主てよ自覺にお遣入なされたのである。

諸君、此頃自覺といふ言葉を能く耳にすることであるが一體自覺といふは何であるか實は自覺といふはエライ事である、一寸自分が感じたくらゐの事ではない、一寸思ひ付いたくらゐの事でもない、又己が理性に訴へて、ア、すれば斯うなる斯うすればア、なるといふやうに研究して、さうしていよく其秘訣に達したといふやうなものでもない、然らば自覺とは何ぞや少し無理な説明かも知れないが我心靈全體が一丸となつて、或一ツの事を擱んで己が有とするのである、イエスが我は父の愛子であると自覺なされた時には、天の父の腹に這入つておしまひなされた、天の父の愛が溢るゝばかりにイエスに來たのでイエスと天の父と一になつておしまひなされた、即ち我と父とは一なりといふ自覺が其處に生じて來たのである、神の國を此世の中に擴めようといふ時には、總ての人をして神の子たらしめんが爲には全心全力を打込まれたのである、例之は約翰傳の四章にイエスがサマリヤの女に向つて道をお説きなさるゝ時に饑

いのを打忘れてお話しになつた、弟子方が主よ食物をお喫なされと云つた時にキリストは「我に爾曹の知らざる糧あり」と仰せられた、さうすると弟子方は不在の間に誰か食物をお上げ申したのであらうかと思つたので「我を遣はし者の旨に隨ひ其工を成畢る是わが糧なり」と仰せられた、イエスは人の心靈を救ふといふ事に專一になつておしまひなされて、食物を食ふ事までも打忘れ、總身悉く使命となつて力を盡したと申しても差支はない是は自覺である、私共も矢張り何か其所へ自覺を得なければならぬ、石井君が岡山の醫學校を將に卒業をせんとする前になつて、或田舎に行つて休んで居る時に憐れなる乞丐の子供を見て、自分は醫者をして金儲けに掛らうかと今日まで思つて來たが、孤兒を救ふのが自分の使命と自覺したといふ、其自覺はエライもので、孤兒の爲に我を捧げてしまつた「石井君、君は孤兒を育つるのに辛い事はないか」と云へば「何にも辛い事はありません、乞丐の子を澤山我許に寄せて、病氣をした時には其汚ない子供を抱いて寝てやるのも、其子供を風呂に入れて洗つてやるのも楽しい事になつて、少しも汚ないといふやうな感が起らないやうになつて



來ます」と言はれた、自覺といふはエライものである、孤兒を救はなければならぬと自覺をすれば、頭に汚ない瘡の出来たやうな子供でも夫れを抱いて寝てやる事が快樂となると云ふ、ダミエンが癩病患者を看護するのは我使命と自覺をした時にはモロカイ島に飛込んで行つて、癩病人と同じ所に住居をなし、患者の衣服を洗ふたり、其傷口を洗ふたりするのが喜悅となり快樂となつた、癩病がダミエンに傳染つた時には朋友も醫者も早く此モロカイ島から引揚げると云つた時に「ダミエンはモロカイ島の癩病人に身を捧げたものだ、何うして彼等を見棄て、我一人故郷に歸るべけんや」と云つて泰然として動かなかつた是れはダミエンの使命の自覺であつた。

扱て私共が教師となる事が天の使命だと自覺をすれば、教師の生涯を果さんが爲には敢て何者をも避けないといふ事になるのであつて、本を讀まなければならぬといふ事であれば本を讀むが、夫位の事は何でもない、虱の集つて居るやうな貧乏人の寢床に行つて、其虱が自分の衣服に付くも物の數ともしない、夫れに福音を説くのが自分の使命と自覺をすれば、虱を貰つて歸つて來る時に

は自分の心の中に非常なる愉快が生じて神は我をして今日此使命を果さしめ給ふたといふ喜悅に這入る事が出来る、其使命を果さんが爲にはキリストは天の父の愛子として、何所までも父の御慈光の廣さ深さ高さを味はひになつて、總ての人を神の子になさんが爲に全心全力をお盡しになつた、私共も自己の使命を悟つたならば、其自覺した事に總てを捧げて盡すやうになつて來る。

世の中には何うしたら道徳家になれようか、何うしたら人格を磨き立つる事が出来ようかと苦心する人があるが、人格を磨く爲に人格を磨く工夫をする人は、若し人格が磨けたとしても、誠にキザな誠にイヤな人格より出來ないのである、道徳家にならうと思つて道徳家の修業をした人は、何だか其所に一種妙なものがあつて、即ち形式に流れ易いのである、けれども人格の何たる事を知らず、道徳家の何者たる事を知らずして一生懸命に己が使命の爲に力を盡すといふ事になれば、知らず識らざるの間に人格が高まり、道徳が高尙になつて、之に接觸する人々は如何にもと敬服せざるを得ないやうになるのである、其所に秘訣があるのである、バプテスマのヨハネは火の如くになつて悔い改めると叫

ひ、ヘロデ王が罪を犯せば、猛烈に王を責めたのである、ヨハチの人格は實に  
光茫閃電夏猶寒てふ觀があつた、キリストは救世の使命を自覺されたので、其  
の人格は東風吹き來つて滿地の氷雪を拂ふ様であつた、諸君は金儲けが自分の  
使命だとも考へになつて之が爲には手段方法は撰ばない、金さへ握れば宜いと  
いふ考へで金儲けをなされたならば、聖書の講義を聽かれやうが道徳談を聽か  
れやうが更に其効は見えない、同じ金を儲けるにしても、カルネギーの如く金  
を握るのが目的ぢやない、金を得たならば平和の爲に貢獻したい、金を得たな  
らば大學を建てたい、金を得たならば世の人々が敢てしないやうな宜い仕事を  
して、人類の益を計りたいといふ高尚なる動機で金を儲ける、其カルネギーの  
心の中には高尚なる理想と奥妙なる思想とが養はれて行くので、一億になつた  
十億になつたといふ時に、金が儲かつたと共に其人格が輝き、何人も彼の前に  
は頭を下げざるを得ない事になる、金は百萬圓儲けても千萬圓儲けても構はな  
い、只金を儲ける動機が那邊に存するか是れに注意せねばならない、大學に某  
といふ博士がある、なか／＼能辯に演説をされる、殊に教育論でもされる時に

は、耳を傾むけて聴くに足るやうな事を云はれるのである、其人は口を開けば  
人格をいふ、口を開けば道徳の講義をする、さうして人に接する時には己れの  
人格はどうだ、見上げる程のものがあるだらうといふ風にやつて居る、夫が即ち  
人格のない證據だ、けれども若し其人が教育學を考へて、之を天下の教育家に  
教へ示すのが我使命であると思つて、一生懸命に其事にのみ力を盡して而して  
自分の人格や自分の道徳といふ事を忘れてしまふやうであつたら衆皆が其人の  
前に頭を低げるやうになるであらう。

諸君、實に妙なものである、實に妙なものである、庭前に一本の松の樹を植  
えて、之を一ツ立派な庭松にしようと思つて手を入れると、出來上るは出來上  
つたが蜿蜒曲りしたやうな松より出來ない、けれども山の中に自然に手を擴げ  
て、良い空気を吸ひ太陽の光線に照され、風に充分に打たれて、さうして伸び  
くしたところの其の松の樹を見ると到底庭前で手を入れた蜿蜒曲りした松と  
は同日の論ぢやアない、彼れが若し大人格であるならば、此蜿蜒曲りした松は  
小人格と云はなければならぬ、私共は人格とか道徳とかいふ事を頭の中に入

れて置くやうでは、到底立派なものにはなれない、そこで私共には大切な事はキリスト、イエスが得られた神の子の自覚、我は神の愛子であるといふ自覚に這入らうとすれば、朝に夕に天父の愛の深さ高さ廣さのみを考へて、之と同化されたいといふ事に熱衷し且つ天父の愛を圓滿に現はされたイエス、キリストをお慕ひ申して、其跡に従いて行くことである、左すれば何時しか我衷に神の愛子であるといふ自覚が生ずると共に、神の子のやうな人格の輝を發することゝなるのである、私共は金を儲ける人であらうが、教育に従事する人であらうが又も役人であらうが、實に今日の基督信徒は、老たるも若きも男も女も、我周囲の人々を神の子になさなければならぬといふ大使命が我双肩に懸れる事を自覚して、娘さんは娘さん、お婆さんはお婆さん、息子さんは息子さんといふ風に皆それ／＼に我勢力範圍の人々に神の福音を傳へ、さうして我周囲の人を神の子になすといふ信者の本領を發揮せねばならない、夫を盡して御覽なさい、夫を盡しさへすればいよ／＼私共の人格が高まり、見遠へるばかりの人となる事が出来るのである、何ば説教をお聴きになつても何ば教會に入りを

なされても、何ば道德の論をお聴きなされても神の子の自覚に這入らず、又我使命を自覚してこれが爲に盡すといふ事にお進みにならなかつたならば、格別の効は現はれないと思ふのである。

## 第六章 吾人の向上を妨ぐるものは何ぞや

恐に入ぬやう目を醒かす所その靈には願ふなれど肉體よわきなり。

(馬太傳二十章四十三節)

前章に述べた如く我が内には此世のものに満足する能はずして、上に向つて上らんと欲する望がある、而してキリストは吾人に天の父を御現はしになり、殊に限なき愛を示して、吾人を上に引上げようと爲された。一口に申せば内には上らんとするものがある、外には又之を引下んとするものがある、然るに私共が容易く上ることが出来ずして、宗教の極意とも謂ふべき神人合一の妙境に達することが出来ないので、抑々如何なる譯であらうか、キリストの引きたまふ力が足りないのであらうか、將た又上らんとする我望を妨ぐる力が強いのであらうか、實にキリストの道を多年求めて、尙ほ得ざる者が頗る多いのは遺憾千萬のことである。

馬太傳七章の十四節を見るに、キリストも確に向上の難を認めて居られたや

うに思はる、曰く「命に至る路は窄その門は小し、其路を得もの少なり」又曰く「沈淪に至る路は濶その門は大なり」と如何にも沈淪に至る門は濶いが、上へ向つて進む門は窄い、之に入る者甚だ稀なりと云ふに至つては、實に困難を明示されたものである、殊に先程朗讀した馬太傳二十六章のゲツセマテの園の祈禱を讀んで見ると、如何にも残念な考がする。實は御承知の如く、キリストの一世一代の大難關であつて、死ぬるか生きるかの大問題を御定め爲さる場合であつたから、キリストも非常に寂しく御感じ爲された、然るに十二の弟子を悉く連れて行く譯には往かない、其中の高弟——最も能く進んだと覺しき三人を撰り抜いて、園の奥深き處まで御連れになつたのである、我も祈るから以前達も目を醒して祈つて呉れると御頼みになつた。さうしてキリストが祈り了つて来て見たまへば、三人は眠つて居る、此一時だけ目を醒して居ることが出来ないか、どうぞ目を醒して祈つて居れと云つて、又祈り了つて来て御覽なさると前の如く眠つて居る、三度も同じやうであつた、私共であつたならば實に馬鹿々々しい、三年の間も牝鶏が雛を育てる如く、母親が小兒を愛育むが如く

にして養ひ育てた弟子である。殊に腹心の弟子とも云ふべき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人である。それがキリストにとつては死ぬるか生きるかの場合であるのに、暫くも目を醒して祈つて居ることが出来ぬ、詰らないと思つて疝癪でも起すべき所であらうが、キリストは決して疝癪などは起したまはない、只靈には願ふなれど肉體よわきなり」と仰せられたが、此一言は、深く人間の弱點を見抜いて、是れ位までも養ひ上げた所の弟子ですら此通りだ、靈には願ふなれど肉體が弱いからだと言ふのは、無限の同情を人間の弱點に向つて御注ぎになつたのである。

此一事を見ても、私共の内に奮然向上せんと欲する所の願はあつても、妨ぐる力の強いことが現れてゐる、蓋し人間の腑甲斐ない所を能く現はしたもので、コノ「肉體よわし」と云ふ一言は本當に肉體が弱い、眠むたい時に何ぼ力んでも、どんなに工夫をして見ても眠らずして居られない、即ち心靈が肉體を支配することが出来ないのである、心理學の進歩しない時代に於いては、是れは悪魔の誘ひ、或は悪魔の業として八釜敷く申たものだが、今日では人間の靈魂

と身體とは非常に密接なる關係があつて、何ぼ靈には願つても肉體が弱ければ思ふやうに進まれないことを發見したのである、茲に人あり、又しても他人の物を盗む、それならばと云つて盗まなければならぬやうな貧家でもない、是れは盗みたい病氣である。蓋し彼は肉體に何か缺けた所があらうと云ふので、之を調べて見ると果して頭腦の組織に缺點があるとか、或は四肢百體の中で何處か發達の鈍い所があることを發見する次第である、昔ならば直に是れは神に祈らなくてはならぬとか、或は悪魔を拂はなければならぬと云ふことになるけれども、今日ではイヤ是れは體操をやらなければならぬ、適當な食物を與へて機械體操をやらせなくてははいけないと云ふ、それで六ヶ月か一年も體操場に入れて、朝に夕に機械體操をやらせて見ると、其發達の鈍かつた所が能く發達し、随つて頭腦の工合も餘程宜くなるので、モウ盗みを爲さないやうになる、其他の悪いことも致さないやうになるのである、岡山の孤兒院などに於いても、能く物を盗む者がある、そこで充分食物を與へ、充分運動を爲せて、人並の身體に爲すと、トント盗みを爲さないやうになると云ふことである、是れは曾だ

悪少年を改めさせる爲に必要であるばかりではない、私共にも必要なことであつて、盗みは爲さない、又其他法律上の罪人となるやうな悪いことはしないけれども、胃が悪ければ頭腦が悪い、頭が悪くなつて来ると記憶力が悪くなる、或は大切なことを打ち忘れることがある、随つて疝癥を起すやうなことも出来る、しがんだ顔をして毎日送らなければならぬやうなことになる、何ぼ精神上の教を聴いても、何ぼ祈禱をしても、胃が悪く頭が悪くあつたならば、健全なる人のやうに發達が出来ぬのである、そこで胃病を治せば随つて頭も宜くなる、頭が宜くなつて来れば疝癥も起らないやうになる、其他今まで打勝ち難しと思つたことも、容易く打勝つことが出来るやうになる、「肉體よわければなり、此肉體を本當に健かなるものにするならば、どれくらい精神上に助かるか知れない、どれくらい罪に打勝ち易くなるかも知れない、キリストは弟子かたを叱りにならなかつた、「肉體よわきなり」と云ふて同情を御表しになつたのである、私共も悪い事をする人があるからと云つて、無暗に其人を攻撃し、又無暗に其人を罵る代りに「肉體よわければなり」、どうも彼の人はいけないが何か身體に

悪い所があるのだらう、それで彼の人には充分に發達が出来ないのであらうと思つて、其人に同情を寄せ之を助けるやうにしたならば、彼は向上することが出来るだらうと思ふ、又諸君も大に身體を健全に爲されたならば、確に向上することが出来るであらうと思ふ。

次は矢張り肉體に因んだことで、肉慾と名くべきものである。或人曰く身體に血が満ちきつて居る、どうしても情慾が制しきれない、其實肉體の強い人よりも肉體の弱い人に情慾の強いものが多い、青い顔をして下宿屋の二階に人情本などを讀んで居る青年に、却て情慾の奴隷となる者が多い、學校の課業を了つたならば、テニスをやるとか、ボートを漕ぐとか、又は野外に散歩するとか、適當なる運動を執る人は却て能く勉強が出来、夜の十時頃には早や軒を叩いて高枕で寝ることとなるので、情慾情念の誘惑に遭ふことは少ないのである、所が運動もテニスもやりさらぬ、ボートも漕ぎさらぬ、新聞を開けば何時も三頁を讀む、書物と云へば人情本を讀む、そんな出来損ひにいつも女の姿を追つて廻る者が多いのである、キリストは馬太傳の五章の二十八節に、「凡そ婦を見て

色情を起す者は中心すでに姦淫したる也」と御教へになつた、即ち情慾の誘惑が胸に燃へて来て、色々とさう云ふ方面の想像などをするのは、女に觸れないでも既に姦淫をしたと斷言をされたのである、元來人間には飲みたい喰べたい着たいと云ふ慾がある、又人間には色々なことを想像したい情慾がある、其の情慾情念を適宜く制することが出来なかつた時は、由々しき大事を惹起するものである。尤もキリストは此の情慾情念のことは餘り多くお話しにならなかつた、蓋しキリストには情慾情念は無かつたであらう、否、全くなかつたのではないであらうが、悪い意味のものは無かつたであらう、所がパウロの書翰を開いて見ると、情慾情念のことを委しく述べ立て、居る、又ヤコブの書を読んで見ても、ヨハネの書を読んで見ても、同様の次第である、尤も肉體が弱い爲に向上が出来ない、又情慾情念が強い爲に向上が出来ないと云ふこともあるかなれども、更に進んで私共を虜にするものは何であるか、私共を妨ぐるものは何であるかと云へば即ち罪惡である。罪惡と云へば恐ろしいことだ。佛法では煩惱と云ひ罪惡と云ふ言葉は用ゐないやうである。又孔子の教では私慾私情と云ふ言

葉を使つて居るが、罪惡と云ふ言葉は用ゐないやうである、所が孔子よりも釋迦よりも聖く且つ大なるイエスキリストは罪惡と云ふ言葉を頻りに御用ゐになつたのには、何にか其處に深い意味が無くてはなるまい、看られよキリストは當時の猶太人の罪惡を認めて非常に御責めになつた、外の事には大に同情を表して大抵ならば御赦しになつたけれども、罪惡に付てはどうしても忽せにして置くことが出来ない、どうしても大目に見て置くことが出来ないといふので御責めなされた、其御責めなされた罪惡が幾つもある、路加傳の十一章三十九節に云く、「爾曹パリサイ人の人椀と盤の外を潔す、然れど爾曹内は貪慾と惡にて充り」と、是れはパリサイ人の貪慾を御嫌ひなさつたのである、貪慾とは何であらうか、人が金の指環を蓄めて居る、欲しい、人が當世流行の衣裳を着て居る、欲しい、人が金持になる、欲しい、欲しい、欲しい、欲しいと云ふ考が遂に詐僞取財を爲さしむる、欲しい欲しいといふ考が不義の儲を爲さしむる、又欲しい欲しいと云ふ考が遂に賄賂を取らしむるやうになる。

次は馬太傳の六章の始を開けて見ると、施濟をするにも斷食をするにも、人

の目の前を繕はんが爲めにするな、即ち偽善の罪を御責めになつたのである、殊に馬太傳二十三章の終りを見るに學者やパリサイ人が内は惡事に充たされてありながら、表は虫も殺さない温和しい人の如くして居るので、「噫なんぢ禍なかな偽善なる學者とパリサイ人よ」と云ふて、其偽善を御責めになつてある。次に御責めになつたのは自負心である。路加傳十八章の十四節に云く「自己を高める者は卑られ自己を卑する者は高らるべし」と吾人は何でも豪さうにしたい風がある、實に自負心は、道に進む上に於て大なる妨となる、自分ほど豪い者はないと云ふ考へがあつたならばどうしても向上は出来ない、雅各書四章六節には、「神は驕傲者を拒き謙卑者に恩を與ふ」と録してある、馬太傳五章の三節には「心の貧乏者は福なり」と教へてある是れは謙遜なる者でなくては道に進まれないと云ふ意味である。

次にキリストが御責めになつたのは姦淫、言換れば不義を行ふことである、正當の結婚をせずして男が女に觸れると云ふのは、基督教に於ては姦淫である、正當の結婚式を擧て後、夫ある女が他の男に觸れる、又妻ある者か他の女に觸

れると云ふことは、姦淫中の大姦淫である、此姦淫罪は總ての罪の中に於て最も大なるものとして御責めになつたのである、姦淫ほど人の心を腐らすものはない、姦淫ほど人を柔弱ならしむるものはない、又姦淫ほど込み入つた罪惡はない、一たび姦淫罪を犯したならば本心から腐れるので病膏盲に入つたと云ふやうな譯であるから、キリストは此罪を非常に御嫌ひになつたのである。

思ふに何が私共の向上を妨げると云つても、貪慾と偽善と自負心と姦淫ほど大妨害となるものはあるまい、けれども諸君、キリストは罪を御犯し爲さつたことがないので、一點の罪汚も無かつたから、當時の猶太人の罪惡はキリストの眼に映じて、斯の如く四つの罪を盛に御責めになつたのである、所がキリストの弟子のヨハネ、ヤコブ、ペテロ、パウロになれば、勝れた人ではあつたかなれども私共と同じやうな人であつた、自ら罪の念に充たされたこともあり、又罪を犯したこともあるだらうと思ふ、それで私共の向上を妨ぐる罪のことに就ては、キリストよりも尙ほ鋭く、キリストよりも尙ほ深く教へて呉れたやうに思れる、例之へば羅馬書の一章の十八節以下を開いて御覽なさい、これは「罪



の「パノラマ」である、又同書の七章の十三節以下は、パウロの情慾の戦に於ける「全勝」である、キリストは色々御示しになつたけれども、キリストにはア、云ふ戦が無かつたのであつて、偶々あれば馬太傳四章の誘惑ぐらゐの事であつた、パウロは我を妨ぐる罪惡の強きを感じ、「噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と叫んだのである、又ヤコブは雅各書一章の十三節と十四節以下に、「怒すでに孕て罪をうみ罪すでに成て死を生」と云ふて居る。いづれも皆罪惡に付ては非常に苦んだ跡が見える。

然し罪惡の事は先づ是れ位にして、是れより如何にすれば之を脱却することが出来ると云ふ、大問題を考へたい、肉體弱くして情慾情念が強い時には如何にすべきであらうか、キリストは「目を醒し且つ祈れ」と教へられた、情慾情念が萌して來た時には、主よ我を救ひ給へ、我は肉情の虜となつて此處に大罪を犯さんとす、願くは我を救ひたまへと叫ぶの外はあるまい、私共は嘗て情慾情念の誘惑に出遭ふて、將に大罪を犯さんとする危急の場合に迫つた時に、晨に褥を出で、林の中に入つて、天の父よ我を助け給へと、誠心こめて祈るの

外は無かつた、さうして四日五日祈つて容易く其情慾情念に打勝つことが出來た、其時には烟雨濛々たる五月雨の天が始めて霽れ、萬里碧天を見るが如き考になつて、新なる尊き神の御前に感謝を致したことがある、デ諸君が情慾情念に襲はれ、不義の儲をしたいと云ふやうな考が起り來たつた時は其危き場所を逃げて靜なる所に入つて主の御前に目を醒し且つ祈るのが一番の上策である、ナニ俺は強いから構はない大丈夫だと云ふやうな考を持つのは恰も憐寸の箱を抱へて火の側に摺り寄るやうなもので頗る危険である、憐寸の箱を持つて居るなら火の端から逃げるが一番宜い、三十六計逃ぐるに若かずとは是等のことを言ふのであらう。

## 第七章 心力傾注

なんぢ心を盡し、服従を盡し、意を盡し、志を盡し、力を盡し、主なる爾の神を愛すべし。是誠の首なり。

(馬太傳第二十章第三十七節)

此言葉はキリストが御發明なされたのではない、申命記の六章を御愛讀になつたと見えて、イヤ六章ばかりではない、六章七章八章といふやうなところを御愛讀になつて、大宇宙に記えて居られたのであらう、其證據には馬太傳なり路加傳なりの第四章に野の試みにお出遭ひなされた時にも、申命記を引いて悪魔をお退けになり、又茲に或學者が来て、先生、誠の中最も大いなるものは何でありませうかと尋ねした時に直ちに申命記の六章の五節をお引きになつて、先きに朗讀を致したやうなお答へをなさつたのである。

今日は『心力傾注』といふ題を掲げたが、實は私は此題に就て諸君にお話をしていた資格のないものである、夜寢床に這入る前に、毎も静かな所に於て其日の事を顧みる時に、神前にお断りをいたして居るやうな事である、或は演説

をなし或は説教をなし、或は聖書の講演會にも出席して、他人の眼から見られた時には多忙しうに見えて居るが、神前に進み出で、果して力一杯を盡したかと顧みる時に、濟まない思ひが生じて来る、神よ今日も是々の事を致しました、準備は不完全でありまして、僅かにお茶を濁したくらゐの事でありませぬ、誠に相濟まない事でございます、明朝からは早く起きてマア少し一生懸命にやりますからどうぞ免して下さいと、お詫をするのが常である、さういふ私が皆様に此大切なるキリストのお示しに就いてお話しをする事は出来ない譯である、併しキリストが斯くまで盡せと仰せられたのだからして、自分が盡せないにしても其意味だけを考へて見たいと思ふたのである。

第一に『心を盡し』とあるが是は何であらうか、或は讀めもしませんけれども希臘語を出して見たり、又は二十世紀の新約全書を繙いて見たり、或はベニゲルの註釋を取出して見たりしたが、今日までは度々講義を致して居つた事は違ふ意味を見出したのである、心を盡すといふ事は心情を盡してと替へたら宜からう。

諸君私共人間が有して居る心靈の働きの中で、最も高尚なるものは心情であらうと思ふ、何が先立つかと云へば腹である、其腹といふ事をマア一つ言換れば誠となるので、心情を盡すといふ時は即ち我生命を傾けてといふ事になる即ち命懸になつて盡すといふ事であるから此以上はあるまいと思ふ、諸君は生れてから今日に至るまで何か命懸の仕事をしたことがあるか、事は大小を問はない、命懸の仕事をしたことがあるか、親に孝を盡さんが爲めに命懸になつた事があらう、妻を愛するが爲めに命懸になつた事があらう、子供の病氣の爲めに命懸になつた事があらう、或は國の爲め或は神の王國の爲めに命懸になつた事があらう、今日の盡すといふは即ち我が命を懸けてといふ、命を差出してといふのである。

其次の精神を盡すといふは、是は我が喜ぶ物我が楽しむ物を打棄て、アシシのフランシスが父親の意に背いて信者になつた時に、父は怒つて裁判所に訴へ、我意に背いたところの息子には何一つも譲らない、一物をも與へないといふ事で段々裁判が進行致したのである、フランシスは法廷に呼出されさうして

父親と對面をして裁判を受けた時に父親は我意に背いた息子には何一物も與へませんと申立てたので裁判官はフランシスの顔を見て「夫で宜いか」と尋ねたれば「宜しうございます、何一つをも貰ひません」と云つて其所で釦を外して素裸體になつて、自分が着て居た衣服を父の前に差出し裁判所から裸體で飛出した、我着て居る衣服までもキリストを愛せんが爲、神に事へんが爲に抛つたところのフランシスは人の悦ぶ富を棄てた譯である、人の悦ぶ家を棄てたのである、人が欲しいと思ふ物は悉く棄てたのである、精神を盡すといふ、此精神は英語にてはソールといふ字が使つてある、即ち活力といふ意味である、活きて居るからには家も欲しい衣服も欲しい食物も欲しい、色々悦び楽しむ物があつたが、夫等の物を皆悉く打棄て、もやる、即ち犠牲となつてといふ意味であらうと思ふ、其次の意を盡すといふことは、是は英語にてマインドとなつて居る、此の意味は即ち智慧を盡すといふ、今持つて居るだけの智慧を盡すといふのでは足らない、私共が熊本に在學中斯教を受け而して、いよく決心して先生の所へ行つて「先生、私等は是から道の爲に盡さうといふ決心を致しました」

と言つた時先生は「道の爲に盡さう：何になる積りか」「ミニストル教師になり  
たい」と云ひますと先生から直ちに一棒を食はされた「汝等のやうな詰らない  
人間が神の爲めに、或は道の爲めに教師になるといふ事が出来るものか退れ」  
と酷い目に叱り飛ばされた、若し普通の宣教師であるならば眼に涙を湛えて「ア  
、良い志を起した、それであつてこそ」といふところだが、汝等のやうな詰ら  
ない人間が何うして教師になれるか、退れといふ譯で非常に叱られた、夫から  
五六ヶ月経つて又同じ人が同じ事を繰返して云つたところが、今度は先生非常  
に悦んで賛成した、其教訓は私共の心魂に銘じた譯である、我々のやうな詰ら  
ない者が何うして教師になれるか、教師といふものは實に大にしては天下を双  
肩に擔ふて立たなければならぬ、只一教會の牧師に非ずして、其時代に對し  
ての教師とならねばならぬといふところで、磨き上げた智識を以て主の爲に盡  
さなければならぬ、爾來三十幾年の年月を経來たつたが、私共は一日も先生  
の教訓を忘るゝことなく、意はせを盡して主に仕へなければならぬ、磨き上げ  
たところの智力を以て盡さねばならぬといふ考へを有して居る。

第四は力を盡すとある、英語にはスツレンジとか、又はマイトといふ字にな  
つて居が、元の意味は意志の力を盡すといふ即ち己が身體を統一して、全心全  
力を盡してといふ意味であらうと思ふ、私共の先生はワン、アット、エ、タイ  
ム、一度に二ツの事をするな、只一の事をせよと教へた、夫から其次にはツウ、  
ウイズ、ザイ、マイト、汝の全力を傾けてやれ、是が即ち此所にある、力を盡  
してといふことである、聖徳太子は十人の訴訟を聞いたとか何とかいふ事があ  
る、又或人は書物を読みつゝ、人の話を聴く事が出来るさうであるが、夫は例外  
人の話を聴く時には全身耳となつて聴くのである、物を見る時には全身眼とな  
つて見る、物を考へる時には全身心となつて考へる、夫が即ち力を盡してと  
いふ、耳では聴きつゝ、眼では外見をして居る、眼では本を読みつゝ、耳では隣り  
の謠曲を聴く、心では考へつゝ、何所かに野遊びに出掛けて居るといふ事であつ  
たならば力を盡して居るのではない、力を盡すといふ時は我心をも我身體をも  
統一して、思ふといふ時は眼も耳も閉いで思索に這入るのが、是れ力を盡すと  
いふ事である、斯く考へ來る時には、恐らく此世界の人に心を盡し精神を盡し

意を盡し力を盡すといふ、此文字に當る人はなほだらうと思ふ、恐らくないだらう、けれども多年修養を積んだところの人は或は是が出来るかも知れない、今日は陛下が我大阪市の東から北の方を汽車に召して御通行なさるのである、之に就て思ひ起すのは我日本人の忠義である日本人ほど忠義心の厚いものはない、けれども其忠義といふのは千代田城に向つての忠義であつて其他の點に於ては頗る不忠實なる國民ではないかと思ふ、職務を盡す上に於て不忠實、約束を守ることに不忠實、時間を守ることに不忠實、己が委任されたる其委任に對して不忠實、總ての點に於て不忠實なる日本國民は只千代田城に對した時のみ忠實なものである、イエス、キリストがお教へなされたる忠實といふことは今お話し申した四ツを盡すといふ字から生出されて來た、イエスのお教へなされたる忠實は上に向つての忠實であると共に下に向つての忠實である、眼に見えぬ物に向つて忠實であると共に眼に見えない物に向つて忠實だ、其意味は事の大小輕重に拘はらず自分がなさなければならぬと思ふ事は全力を盡してなすといふことである、力一杯を盡してなすといふのがイエスの教訓である、左

ばこそ聖書の中に賞められた人々に付て、其賞められた點を味ふて見ると如何にもと思ふのである、一は馬可傳十二章の終りの所にイエスが弟子方に向つて説教をして居られた時に金満家達が賽銭箱の所に來て、聞えよがしに金の音をさせて入れるのには、イエスは少しも氣をば注げられず、知らざるものの如くして居られたが、其所に身に黒い服を着け頭に黒い頭巾を冠りたる女がコツソリと音もさせじと歩み來て賽銭箱に近寄りコツソリと賽銭を納めた途端イエスは説教を廢めて其の方を見やられた、女はもと來し途を逃るが如く退いた、イエス言葉を續け「誠に我爾曹に告ん箱に投入し凡の人々よりも此貧しき寡婦は多く投入たりそは彼等は皆其餘れる所を以て入れこの婦人は其不足ところより其すべての所有すなほち全業を盡く入れたれば也」と御賞賛なされた、今一つは馬可傳十四章の中程を見ると、一人の女が歩つて來て、ナルドといふ價高い香膏の函を破つて、其香膏をイエスの頭に塗つた逸事が記してある、イスカリヲテのユダや其他の弟子達は實に詰らない事をする女だ、先生も先生だ此ナルドの香膏を買つて貧乏人に施せば一廉な慈善になるのに、ムザ／＼其

函を打破つてイエスの頭に注ぐ、なんらうことかと囁いた、其時イエスは只一言「此女は力を盡してなせり」と仰しやつた、此女は力を盡してなせり、もうイエスがお死になさるのも程遠くない、切めてはイエスのお葬式の印にと思つて秘藏して居つた價高き香膏を持來つてイエスの御頭に注いだ、此女は心力を盡してなせりと云つてイエスは御満足なされた。

夫から今一つは路加傳八章の四十節の邊りである、一人の女がイエスがパリサイ人の家で饗應を受けて居られたる時に歩つて來た、さうしてイエスの足に接吻をして止まない、其時パリサイ人は咄いた、イエスは私は足下の家に来たけれども足も洗ふて呉れず、香水も注げて呉れない、けれども此女は我足に吻を接けて止まない、此女は我足に香膏を塗つて呉れたと示しになされて、多く罪を赦さるゝ者は又多く愛するといふ一句をお添えなされた、イエスは此女の縁の黒髪を以て其の足を拭き、唇を開いて、イエスの足に口吻をするといふ、其優しい所爲に御満足をなされたのである。

諸君、イエスに叱られた人は澤山ある、其叱られた人は多くは男子である、

イエスに賞められた人は少ない、其賞められた人は三人が三人共に婦人である、而して其女達が賞められるほどの仕事をやつたといふのはどんな事であるか、一人の女は四厘の賽錢を納めたに過ぎない、一人の女は香膏をイエスの頭に注いだに過ぎない、今一人はイエスの足に口吻したといふに過ぎない、お母さんは子供の頬邊に何ぼでも接吻をする、譯のない話だ、此事は至つて小さい事であつて殆んど算ふるに足らない程小さい、若し誰か私に私の頭に香水を注げて呉れても、別にさう有難いとも思やアしない、四厘の金を教會に寄付して呉れても別に其人にお辭儀もせぬであらう、けれども主イエスは其小さな行ひを見て、彼れは身代を盡して納めた、其香膏を注ぎたるを見て、彼れは力を盡してなせりとお示しになつた、して見ると大説教者にならなければ神が満足をなさらぬといふ譯でもない、又大事業家にならなければ神が満足なさらぬといふのぢやアない、成程私共はクレルウオーのベルナルド或はアシシのフランシス或はタルソのポトロ或はウキツランベルヒのルーナルといふ名前を聞いて、其實に偉大なる事業に値れる

のであるが、諸君、世の中に名を知られたるルーテルやフランシスやベルナルドやボロといふ人ばかりであつたならば、決して神の王国は世界に擴まるまい、決して神の御名は全世界に響き渡りはせぬのである、何ぞ知らん四厘の金を納むるところの聖者があり、己が白粉を主の爲めに抛つところの聖者があり、人の足までも洗はんとするところの聖者がある故に、尙知れない無数の聖者があるからして、神の御名は崇められ神の御國は全世界に擴がる譯であらうと思ふ、して見れば今日の我々でも智慧はないだらう、力はないだらう、徳はないだらう、意は甚だ薄弱でありませう、けれども私共が主の御名の爲に盡さうといふ一念が此所に發揮すれば、主は其盡さんと欲する状をお認下さるに違ひはない、諸君は御實驗なされた事はないであらうか、私共が有らん限りの力を盡すと、神は我々に力を御加へになるといふことを、火事だ〜といふ聲が隣家から聞える、アツと思つて臺所を見ると早火が廻つて居る、我愛する子は二階に臥せてある、其時に其母親が二階に駆け上つて、外へ抱へ出したといふ話があるが、女の一念岩をも通すといふ、我子を救はなければならぬといふ一念

で、猛火の中に飛込む事が出来たといふ、人間の力の盡きるところ超自然の力が加はり来る、恐ろしい力が其所に加はつて来る事を私共が自覺せねばならぬ、是は物質の力であるけれども私共が或は文章を記かうとする時に或は又演説をしやうとする時に、取措考へても〜何も出て来ない、時は一刻々々と迫つて来る、又考へても出て来ない、もう何うもならぬと思ふ時に一生懸命になつて、神よ我に力を與へ給へと祈りつゝ、僅か三分か五分の間に思想が沸いて来て、夫が流れて文章となり、夫が流れて演説となつたといふ時には多くの人々の心を振ひ動かす力が生じて来る、ショーペンハウエルが洋筆に墨汁を付けて、紙の上に持つて行つた時には、未だ何も是といふ思想も起らなかつたといふけれども、其洋筆が段々〜と走り始めた時に思はず知らず思想が加はつて来て、世にも類稀なる傑作が出来たといふ、平素磨き鍛ふて居る所の人が、イザといふ場合に一生懸命になつて、洋筆に墨汁を染めたといふ時には、超自然の力が其所に加はつて来るのである、私共が此世の中に於て道の爲に盡さうとか、或は福音を天下に宣傳するといふ場合に、此靈妙不思議なる天の力が我に加は

つて来ないといふ事であるならば、私は今日から辭職する、私は今日から福音  
宣傳の仕事に抛つ外はない、何ぼ諸君が御同情下されてもお助け下されても、  
諸君の御同情や諸君の力だけでは私共は動くことは出来ない、けれども毎度々々  
不忠實なる我にも天の靈力が加はつて来て、今日こそは大失敗をいたしたと  
思ふ時に、不思議にも多くの人々が悔改めて、誠の生涯に這入つて行くことを  
見る時には、アア神よ實に感謝す、何うして斯の如き力を我に與へ給ふたかと  
申さなければならぬ事がある、一生懸命になりさへすれば己れ以上の力が加  
はつて来るが故に、只瞞着半分に左なくとも仕様事なしに仕事をして居る事  
柄に對して見れば、其上よりの力が加はつて、瞬間の仕事の出来榮は實にエラ  
イものである過日も一人の若い人が斯う云つた、責任を負て治療をしなければ  
ならない、外科治療をやらなければならぬ場合が迫つて来ると祈つて刀を取  
る、祈つて刀を取る時に自分以上の良い結果を見ると、如何にもさうだと思ふ、  
重患者を預つてシガレットを吹きつゝ、刀を取るやうな不信實なるお醫者様と神  
よ是は此人の生命に關します、私の刀が一度誤れば此人の命が亡くなりすど

うぞ神よ我を助け給へといふ眞面目なる祈禱を以て刀を取るといふ時に、天の  
力が加はらずして居ようか、必ず神は其人の心を愛で、力を注ぎなされるに  
違ひはない、何事にまれ私共が心力を注いでやるといふ時には、確かに我以上  
の力が加はり來つて、思ひ掛けないといふ程の良い結果を得させ給ふに違ひは  
ない。

斯く考へ來る時には、私共はいよく神の恩寵を感謝せざるを得ない、私共が  
傳道の生涯に於てどれ程に一生懸命になつた事があるかと聽かれたらば、實に  
耻かしい、是々である、云へないが、神が我を用ゐて大いに力を現はし給ふこ  
とを見る時には、神の恩寵を感謝するの外はないのである、どうぞ私共は諸君  
と共に我は智慧が足らぬ、我は力が足らぬ、我は意が弱い、我は肉體が實に弱  
いなんといふやうなことを言はずして、主よ我此所にあり、願はくば我を用ゐ  
給へ、我は及ばずながら一ツ力を盡して見ませうといふ考へを以てやりさへす  
れば、やる度毎に神は私共に失望をさせるやうなことは決してなさらぬのであ  
る、して見ると諸君、此所に心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる汝



の神を愛せよと示しなされた、其主たる汝の神を愛するといふに就いては、  
兎も角も一層一生懸命になつて、諸君と共に一勉強やつて見たいと思ふ。

神は事の大小はお問ひなさらぬ、事の輕重はお問ひなさらぬ、只心を盡すや  
否やといふことを神はお尋ねなさるのであるから、夫を深く思ふて、殊に姉妹  
方が大いに勵んでお立ちなさらねばならぬ、さうすると我々男子も之に遅れじ  
と大いに力を盡すやうになる、けれどもキリストが姉妹方をお賞めになつたの  
は、何うも女は賞めて貰はないと息附ぐ所がないからであらう、男子が叱られ  
たのは、叱られたのであるけれども、姉妹方が賞められたよりも宜いかも知れ  
ない、若しマグダラのマリヤにサタンよ汝後ろに退けとお叱りなされたら、道  
のマリヤも挫けてしまつたに違ひない、けれどもシモン、ペテロはサタンよ汝  
退けと叱られても、汝は三度我を知らずといふに違ひはないと云はれても……  
三度知らずと云つたけれども矢張りイエスの跡に従いて行つて、さうしてパウ  
ロに優ることがあつても劣ることはないといふ大人格を磨き立てたところを見  
ると、こりやア婦人では出来ぬ、婦人は賞められて従いて行く、男子は叱られ

ても従いて行くといふ、此所に元氣を惹起すところが男子の男子たるところで  
あるから、女子をお賞めになつたのは是れキリストの深き意のある所である、  
けれども今日の日本の男子は女子のやうな取扱を受けなくちやア立つて行かれ  
ぬ、叱られるともう直きに弱つてしまふから、是は矢張り賞めて行かなくては  
ならぬ、もう少し男子は腰が強くたかねばならぬ、サタンよ汝後ろに退けと叱  
られても、ナニ行きますといふ勢ひで全力を注いで修養するところがなくては  
ならないと思ふ、叱られるのが嬉しいか賞めらるゝのが嬉しいかは疑問、けれ  
ども矢張りイエスは人情の秘密を知て居られたからマリヤには賞めて下され、  
ペテロ其他の弟子はお叱りになつた、叱られても従いて行つたから、矢張り全  
力を盡して愛して下された其御心事を私共は忘れてはならない。

## 第八章 人生の價值

神の子をもつ者は生を有する者、生を有する者は生を有す

(約翰傳第一卷第五章十二節)

舊約聖書によれば、何でも人々が幸福と思つた事は家の繁昌と、長壽であつた、約百記を見るに、初めの三章はヨブが多くの財産を持つて居つたが、悉く之を失ひ、其上息子七人娘三人とも殺され、終りにヨブ自身も腫物が出来て痒くて堪へられない、死ぬるか生るかといふ目に遭つた、然るにヨブはかゝる災難に遭ふても泰然として動かさず、三人の朋友否四人の朋友が来て色々議論をして自若として應對することが出来た。神は最後に非常なる恩寵を賜はり其の身代を倍にして與へになり子供も以前の如く男七人娘三人を擧るに至つた、又ヨブ自らは長命を保つことが出来た、此の約百記は世界の文學上より見るも一大傑作といふことであるが、其筋書はヨブが百折不挫の精神と確立不動の信念を有したことを描いたものである、之を描くに家門の繁昌と長壽とを背景としたるを見れば極めて幼稚なる考であつたと申して差支はない。

舊約聖書の中でも詩篇には餘程高い思想が書いてある、詩の十六篇の十一節を見ると「なんぢ生命の道をわれに示したまはん、なんぢの前には充足するよろこびあり、なんぢの右にはもろくの快樂とこしへにあり」と記してある、家が繁昌するのが幸ひだとか、長壽をするのが福ひだといふ考もないのである、それよりも餘程進んだ考へ、生命の道を我に示し給へ、汝の御前には充足れる喜びがある、汝の右には諸々の快樂が長へにあり、神の御前に於いて生命の道を守る事が此世なき喜悅であると歌ふたのである、同じく詩の三十六章の九節を見ると云く「そはいのちの泉はなんぢに在り、われらはなんぢの光によりて光をみん」と、神の命を泉と見たのである、神の御前から生命の水が滾々と流れ出で、吾人の人生を濡すといふ高い意味の語である、神は御光であつて、其の御光は吾人の人生を照して、私共は陰雲濛々たる世の中に居らずして、實に晴やかなる大空に煌々たる明月を望むが如き生涯を送ることが出来るといふことを語つたのである、詩人といふものは何時の世に於ても、其の時代よりも十五年も二十年も五十年も百年も進んだ考を持つて理想を謳ふものであるから、

舊約聖書中の詩篇に於て、當時の人々は家が繁昌するのと、長壽をするのが此上なき幸福であると思つたのに、詩人は神の御前にあることが幸福である、神の御前に一日居ることは俗の世の中に千年居るよりも幸福であるといふ、極めて高い思想を有して居つたやうに思はれる。

新約聖書を見ると、生命の二字は其骨子となつてある、路加傳の十二章の中段に二人の兄弟が財産争をやつて何うしても判断が着かないので、イエスキリストの裁断を願つた時、イエスは例話を以てお諭しになつて、其終りに貪慾の心を慎めよ、夫れ人の生命は所有の豊かなるには依らざるなりと仰せられた、即ち人間の生命は財産の多少に關するものではないと示しになつたのは、舊約の家が繁昌する、長壽をするといふ考とは、雲と泥との差があるところの御教訓と申して差支はないだらうと思ふ、又馬太傳六章の二十五節以下を讀んで見ますると「是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飲また身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ生命は糧より優り身體は衣よりも優れる者ならずや」と示して、最後に至つて「まづ神の國と其義とを求めよ然らば此等のものは皆なん

ぢらに加へらるべし」とキリストがお叫びになつたのである、此本文は散文であつて、韻文ではない、けれども天空の鳥を見よ、野の百合を見よと示されたるその想は、詩に優る詩である、歌に優る歌であるかくの如くキリストが詩歌ならざる詩歌を以て、何を教へになつたかと云へば、先づ神の國と其義を求めよといふ、是れは何を意味するのであらうか、これは生命といふ、生命を求めよといふ意味である、然らば諸君が生命とは何ぞやと尋ねになるならば、只此の世の中に破れたる兵兒帯を引つ張つたやうに長命して居るといふのが生命ではあるまい、高利貸の爺が金は腐れるほど貯めたが、到るところに輕蔑され、到るところに毛虫のやうに嫌はれて生きて居る、これが生命であるまいか、私はこれを生命とは思はぬのである。

然らば生命とは何であらうか、私は子供の時から人の傳記を讀むのが非常に好きであつた、一夏或宣教師の宅で、明けても暮れても人の傳記を開いて讀んで居つた、其時にホルランドといふ人が書いたアブラハム、リンコルの傳を讀んだことがある、彼が貧家に生れて、手習をするには紙がないので、大きな

木の葉を拾ふて夫れに習字をなし、本を讀むのには本がないから、隣りの家から本を借りて来て讀んだ、かく貧乏の中に身を起したるリンコルンは、四年の間の大統領を勤めて、五年目に再び大統領に選舉された時に、祝ひの劇場で暗殺をされた所で筆を止めてあつた、其本を讀んだのは明治の十年であつて、今日まで三十年の年月を経て居る、然るに眼を閉れば、アブラハム、リンコルンの人格が躍如として現はれ来るのである、私の生涯にリンコルンがどれだけ深く這入つて来たかは知らんが、兎に角生命の一部となつて居るに違ひはないと思ふことである、其後讀んだ傳記の中で、クレルウオーのベルナルド、アシシのフランシスといふ此の二人の聖者は、矢張り私の生命の中に這入り來つたと思ふのである、尙傳記ではないが、亞米利加のニウヘウンのモンゴルといふ牧師は只の一度より遭つたことはないが其の人の生命が私の内に這入り込んで來たやうにふ、尙オクスフォードの神學者、サンデーと、倫敦の牧師ホルトンに會つたことは只の一度——けれども其人の生命は確かに私の内に這入り込んだと思ふのである、私が生命といふ生命は何であるかと諸君がお尋ねになるなら

ば、主イエスが約翰傳の十五章に「我は眞の葡萄樹わが父は農夫なり」と示しになつた、葡萄の幹と枝とは其皮の色が同じである、以上述べたところのアブラハム、リンコルン、セントベルナルド、セントフランシス、其佗、モンゴル、サンデー等の人格が——其の品性がキリストを現はして居るのである、品性がキリストに似て居ることを認めたのである、皮は生命の表に現はれたものである、内に生命があるから皮が生々として居る如く、内に生命があるから其の人達の人格、品性が生々として表に現れ来る譯である、即ち其の傳記を讀めば傳記に魅せられ其人に接すれば其思想なり動作なりに動かされることとなる、枝を包んで居るところの皮と、幹を包んで居るところの皮が同じものであるといふ所に味ひがあることは忘れてはならぬ。

けれども諸君、其皮の中に何ががあるかを考へなければならぬ、皮の中に生命がある、枝に通ひ來るところの液は幹から上り幹の中に溢れて居るところの液が枝を傳ふて遂に葉が出で、皮が出来、實が出来るといふ譯になるのである、然らば我々が茲に人を魅するやうな、一度其人に會へば、最う忘れられぬ程の

生命を現はす品性は何に依つて形成らるゝかと言へば、使徒パウロは羅馬書第八章に「靈の事を念ふは生なり安なり又肉の事を念ふは死なり」と申されたのである、何うして金儲けをしやうかといふことを寝ても覺めても思つて居る人に、麗はしい人格が出来ようか、斯ういふ別荘を造つて住はうとか、ドリーいふお座敷に於いて御馳走を喰べやうとか、或ひは美人を我が片傍に侍せよやうといふやうな、肉のこのみを考がへて居る人の人格がどうして出来ようか、左様なことばかりを寝ても覺めても考へて居る人は日々夜々に下落するだけである、左らばパウロが「靈の事を念ふは生なり安なり」と申された意味は何であらうか、私は本文として引いた約翰傳第一書の五章の十二節に「神の子をもつものは生を有その子を有ざる者は生を有す」とある、パウロもヨハネも其隠れたる生涯に於ては、寝ても覺めても神の子イエス、キリストを念ずるといふこと、イエスが如何なる心、又如何なる精神をお持ちなされたか、又如何なる人格をお持ちなされたか、イエス、キリストと天の父との間の御交際は何うであつたか、キリストがゲツセマの園に祈禱をなされたる時の御心情は何うであ

つたか、己を殺す者の爲に彼の立派なる祈禱をなされた御心持は何うであつたか、ヨハネに母親のマリアをお頼みなされたときに、イエスの心は何うであつたか、吾にキリストを念ずるばかりでなく、加拉太書の二章の二十節に「われ生るに非ずキリスト我に在て生るなり」とある如くキリストを意識するやうになつたので生命が表はれて神々しい品性となつたのである。

私は新島先生の家に屢々泊つたことがある、サア寝ようとする、先生が蠟燭に火を點けて寢床に導き、もう何にも用事はありませんかと云つて室外に去られ、朝起ると先生が盥嗽の湯にまで氣を注げて下さる、出立をする時には持つて行くべき辨當にまで氣を注げて下さるといふ時に、成程人間といふものは、これくらいに行届いたる愛情を以て人を扱はなければならぬと思つたのである、又彼のホルトンがあれだけの大家でありながら其家に人が訪ねて行けば、椅子を持つて来て、膝と膝と接するぐらゐに近く腰を掛けて顔を突出し、耳を傾けて心から打解けて餘念なく話をして居ることを思ふ時には、私共も斯くありたきものであると思ふことが、即ち生命となるのである。

然らば私共がキリスト、イエスを學ぶと云ふのは、キリストが癡病人の手を  
お握りになり、或は子供を失ふて落膽せる母親に同情を表し、如何なる場合に  
もイエスの口には嘘言がない、何所までも眞を以て押通しておいでになつたと  
いふやうな、其の御生命が一々我に移り、さうして如何に穢ない癡病人と雖も  
之れを遠ざくることなく、淋しき心の人に會へば心から同情を表するといふや  
うなことを初めと致して、キリストが終夜天にお祈りになつたとか、敵の爲に  
お祈りになつたとかいふやうな奥深きところに漸次／＼に相近きキリストの意  
を意とし、其高き清き尊きものが我に移つて來る時に、我が品性が不知不識の  
間にキリスト化するこゝとなり、人に對するには優しく寛かになり、人の罪惡  
を攻むる時には罪を犯したところのものは、もう實に我前には立ち得られない  
程の力を以て、威光を以て望むことが出来るやうになるのである。  
諸君、諸君の内には……殊に青年の諸子はどうか人格を磨きたい、どうか品性  
を養ひたい、どうか立派な道徳を修めたいと叫ばれるのである、私は其叫びを  
聴いて悦ぶが道徳も品性も人格も、突然として天から降つて來るものではない

ことを考へて頂きたい、葡萄の樹は深く地の中の見えないところに根を下して  
居る、其根から滋養分を吸上げて、幹や枝を養ふて居る、キリストの御人格は  
即ち天の父に結び付いて居ることを思はなければならぬのである、私が列擧い  
たしたところの人格もキリストに結び、キリストを通じて天の父に結び付いて  
居ることを思はなければならぬ、よくお分りなされるやうに申せば、密室に於い  
てミツシリと聖書を讀まない人、密室に於いてミツシリと天の父に祈禱をしな  
い人、尙教會の祈禱會などには冷淡にして出席をしない人、只人格を養ひたい、  
只品性を養ひたい、只道徳を高尙にしたいといふことを欣慕して居るが、扱て  
互ひに相會した時には、此世の話のみをして、更に天國の話せず、更にキリ  
ストの話せず、更に心の修養の話しない人にして、何うして其點に進まれ  
ようか、葡萄の皮の麗はしき、葡萄の葉の緑をなして居るところ、葡萄の實の  
如何にも房々して居るところは慕ふなれども、其の葡萄の中に通ふて居るとこ  
ろの液、其液を作出すところの根に心を寄せずして求むるのは、是れ猶ほ木に  
縁て魚を求むるの類ではあるまいか、今日の信者は何うしても眞個な生命を得

なければならぬ、眞個な生命は人格となり、品性となるのであるが、其の人格となり品性となるべき生命は何所から生じ来るかと云へば、キリストに結び付き、キリストを通じて神に結び付くといふこと、其の靈的生涯を送るといふことに歸着するのである、私共は寝ても覺めてもキリストを思ひ、寝ても覺めてもキリスト、イエスの内に在つたところの思想と精神と聖徳とを思ふて、さうして夫れが私共の内に満溢れて来て、遂に我が人格が清まり、我が品性が高くなるといふ譯のものであらふと思ふ、昔から今日に至るまで一世を風靡したといふやうな人格、或は人々の中に在つて、多くの人々に生命の感化を與ふるところの人物は、確かに神の子を持つ者は生命があり、神の子を持たない者は生命がないとヨハネが斷言された通りに、神の子を持つといふところが甚だ大切なことである、或人はキリストの言葉を引いて人間の生命は全世界よりも尊いといふ、それはセントベルナルドの生命、セントフランシスの生命、セントポールの生命、尙誰某といふ清らかなる人々の生命は全世界よりも尊いであらう、けれども日々慾のことばつかりを考へて、或は女色に耽り、或は金銭の

爲には親類を突飛ばし、或は己が名譽の爲には朋友を陥るといふやうな、詰らない生活をなす人の生命が、何で全世界よりも尊いことがあらうか、磨かない魂は何にも尊いことではないと思ふ、キリストを鑑とし、キリストに倣ふて磨か立てた生命にして初めて全世界よりも尊いといふことが出来るのである。諸君も私も折角此の世の中に生れて来て、磨けば斯の如く尊くなり得る魂を有して居りながらにこれを磨かず、折角キリストの福音を聞きながら、折角祈禱を受えながら其の福音を讀まず、其の祈禱を蔑ろにして、靈的命を磨かないといふ人ほど氣の毒な人はない、教會にお這入りなされるところの諸君が洗禮を受けて、暫らくの間は人格とか、品性とか、道徳とかいふやうな、問題でも來でなざる、サアもう一步進まなければならぬといふので、靈的といふところになつて來ると、何うも不熱心だ、キリストの後ろから多くの人々が従いて來た時に、キリストは靈の話をなされるものだから、もう私共は斯ういふ話を聴くに堪へないと云つて、一人減り二人減りした時に、キリストは弟子方に向つて、お前達も彼の人々のやうに我より離れるかと申された時に、ペテロと十一

人の弟子は、主よ、限りなき命の語を持てる者は貴方である、貴方を離れて誰に行けませうかと云つたのである、今日洗禮を受くる人々の中には人格問題の話がある時に實に兎耳を振り立て、聴かれるが、其の人格、品性といふやうな麗はしいところの道徳家を造出した源たる祈禱をしなければならぬ、聖書を愛讀しなければならぬ、更に神の御懐に這入つて尊いものを得なければならぬといふ、心霊の話になつて來ると、もう薩張り分らない、祈禱會には二度三度出席して見たけれども、一向面白くない、聖書の講義も五度六度は足は運んで見たが、一向面白味がないと云はれるのである、成程これは面白味がない筈だ、眼の着けどころが違ふから、其の奥深いところが分りさうな筈はない、丁度木の枝や實の如く表に現はれたものを見るのは容易いことである、けれども其木の根を掘つて見ようと思ふ時には實に困難である、汗水を流して掘らなければ見えない。

然らば諸君が其木の根を御覽にならうと思はるゝならば、祈禱會には五度や六度では不可ない、五十度も百度も五百度も通ふて、さうして朋友と共に心霊

のことを語り合ひ、共に熱心に祈禱をして御覽なさい、或は更に興味のあることは、密室に於いて天の父に心から祈り求めて、さうして手應へのあるところまで行つて御覽なさい、私はこれくらゐに興味のあることはないと思ふ、人生の價值といふものはキリスト化せられて、初めて生ずるものである、斯る妙味のあるとを知らない人生といふものは何の値打もない、實に穀潰しと云はなければならぬ、世の中に居つても何の役にも立たない、世を去つても地獄の釜汚しぐらゐである、どうか私共はキリストの聖意に適ふ生命を養ひ立て、此世に於いて芳しき人生を送るばかりでなく、天國に於いては尙更に麗はしい生命を以て、神の聖前に出るやうに、大いに磨き養ひたいものである、今日の我々は僅か幾萬といふ信者の數で、而かも四千八百萬の人間を感化しなければならぬ責任を負ふて居るのである、又是れより後に來るべき幾億の人間に感化を及ぼすべき責任を負ふて居るのである、又亞米利加や英吉利や獨逸邊りの信者よりも、尙更に清き麗はしい尊といふ……彼等の龜鑑となるやうな信者にならなければ、私共の責任を盡し得たりとは云へない、或人は四千八百萬の人間を感化



しなければならぬとか、亞米利加や英吉利邊りの信者の龜鑑とならねばならぬとか、何を夢見て居るのだといふであらうか、そんなことは何うでも宜い、我々はさういふ詰らない人には眼を注がない、我々の眼を注ぐところは聖書である、聖書の中に示されたるキリスト、聖書の中に注がれたる生命といふ、神の子を持たぬ者は生命がないといふところに眼を注いで、大いに養ふところがなくてならぬ、英吉利や亞米利加や獨逸邊りの麗はしい信者は兎も角も、一般の信者は左程感心の出來ないものである、其の左程感心の出來ないものを我々の標準にするならば、何うして此の四千八百萬の人間を、何うしてこれより來らんとするところの幾千萬の人間を感化することが出來ようか、セントベルナルド、セントフランシスを標準として、キリスト、イエスを標準として、大いに磨き、大いに清めたいと思ふのである、けれども今日の私共は實に詰らない、味ひのない生涯を送つて居る、私共の生命は全世界よりも尊いといふことは夢にも思へない、日本全國より尊いとも思へない、大いに磨いて、キリスト化した生涯になつてこそ、全世界よりも尊い譯であらうと思ふ。

どうぞキリストの語に對して耻ないやうに、値打ある生涯を天下後世に傳へたいものである、否、少なくとも我が子孫に傳へたいと深く感じただので、今日諸君にお話申した次第である。

## 第九章 人生の大願望

若我兄弟わが骨肉の爲にならんには我はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦わが願なり

(羅馬書第九章第三節)

凡そ人間ほど種類の多いものはあるまい、牛羊其他の動物にしても年所を経るに随ひ漸く種類が増えるやうなれ共人間ほどには多くないやうである尤も人種別にすれば、其の種類は五つか六つに限られてあるが、十人十色といふ意味の區別に致したならば、百人あれば百色、千人あれば千色、萬人あれば萬色、夫れから百萬千萬億兆となつて行けば、億兆色といふやうに分れて居る、實に千差萬別、殆んど算ふることの出来ない程である、而して斯の如く多くの差別を生ずる所以は那邊に在るかと思へて見れば、人間の願望が違ふある、銘々に願望がある、私は其の人生の願望の大きい小さい、又其の願望の高低に依つて、人格の上に非常なる相違が生ずるものではあるまいかと思ふ譬へば此所にコッ劔た椀を一ツ携へ、如何にも粗末な衣服を着た乞丐があつて、表に立

つて何か貰ひたいといふならば、大抵な家が腐れた飲か、喰ふに堪られないやうな汁でもやるだらうと思ふけれども、若し禁立の飯と禁立の汁を其の缺椀に入れてやつたならば、大満足……五度も六度も頭を低げて感謝しよう、是れは乞丐の願望である、乞丐の願望は飢れた腹を満たさへすれば宜いのである、ところが世の中には縮緬の衣服を着た乞丐が澤山に居る、錦の襪の上に座る乞丐が數多居る珍膳佳肴を以て口腹を満たし、夫れで満足するといふ其の願望は、眼の球ほど小さな願望、寧ろ小豆粒ほど小さな願望と申しても宜い、又夫れと同じやうなことがある、夫れは此の十九日からは醫文拂ひがあるから、高島屋か三越に行つてシツカリ反物を買ひ込んで、切めては簞笥一杯衣服を造りたいといふ人もある、イヤ其所で行かなくても、一ツの抽斗に満つる丈の物を得たいと思ふ人もあるけれども、其の願望や實に小さなもの、これも矢張り小豆粒ほどの小さな願望と申して宜からう、或る月給取が、おれは百圓取つて居るが、何ちも百圓では足りない、切めて三百圓ほど欲しいものだといふ、夫れでも小さな願望である、私は日本人の内で滿洲鐵道の總裁をして居る後藤新平と

いふ人は、實に愉快な男だと思ふ、日本の歴史に五十頁書いて貰ふやうな人間となるよりも、世界の歴史に一頁書いて貰ふやうな人間になりたいといふ願望を持つて居る、面白い……實に面白い、日本の歴史に五十頁書いて貰ふよりも、世界の歴史に一頁書いて貰ふやうな人間になりたい、さうすると彼れの願望は世界的の仕事を一ツやつて見たいといふ、何うも日本一の願望を持つて居るけれども、後藤新平さんも救世軍のブリスの傍に行つたならば、草履取にも償せんかと思はれる、何となればブリスは世界の凡ての人間、殊に貧境に居る人間は皆我子と思つて居る、世界を我家庭と思ひ、其家庭の中に居る凡ての人間は我子だからして、之を救はなければならぬといふので、七十幾つの高齡なるにも拘はらず、世界を巡廻つて力を盡して居る、何ば後藤新平さんがエライ願望を有すると申しても、世界の億兆を救ひたいと云ふブリス大將には及ぶまい。又私は人間の願望に高いのと低いのがあるといふことを考へて見たのである、何うしたらば朋友に賞めて貰へるか、何うしたらば世の人々にヤンヤと喝采をして貰へるだらうかといふやうなことを考へ、美しい衣服を着たい、美味しい物

を喰ひたい、柔かに蒲團の中に寝たいといふ、是等はみんな己れ……己れといふものが標準、何ぞ其考の低きや、或は新華族になると、直きに標札に男爵何の某、子爵何の何某と筆太に書るさせ、下女下男には直に御前様と云はせる、今まで旦那様といふたのが、俄かに御前様といふのだから、ウツカリ言損ふ、さうすると何うも怪からぬ、言直せといふ、何ぞ夫れ願望の低きや、伯爵様でも子爵様でも侯爵様でも、其心は己れといふより他にない、己れといふところに結付いて居るから實に低い、一碗の飯を貰ふて満足する乞丐と、願望の高さに低さといふ點から考へて見れば相去ること遠からず、即ち間髪を入れない、ところが見る影もなき陋屋に住んで居つて、神よ願くは日本國を救ひ給へ、願くは五千萬衆を救ひ給へと、祈る人が茲にありとするならば、其理想と其願望の崇高なるには感佩せざるを得ない、第十九世紀の前半に英國にトマス、アルノルドといふ大教育家があつて其門下より幾多の大人物を輩出したるとは諸君の知らるゝ通りである、其家に數十年の間寢床に寝た儘で動くことが出来ない老婦さんがあつたが、或人がアルノルドに向つて「先生は實に教育界の偉人である

のみならず、神の教會の爲にも大恩人である、一夜の夢の覺むるときは確に神の御前に於ては天國の上座を占めらるゝであらう」と云ふ意味の話をした所がアルノルドは赤い顔をしてイヤ「私よりもマア上座を占める人がある」と云はれた、ソコで其人は吃驚して「誰でせう、凡そ英國に於いてトマス、アルノルドほど立派な人間はない、トマス、アルノルドほど大人物を薫陶た人はない、功績より見るときは何人も彼に及ぶものはあるまい、然るに彼よりマア上座を占める人があるといふのは誰だらう……先生誰です」と問へば「私の内の姉さんです」と答へた、すると其人は「貴方の姉さんは幾十年の間寢床に寝たツ切で動けぬ人であつて、世の爲人の爲には口を開いて説教をされたこともなければ、又手足を動かして働かれたこともない、其姉さんが何うして貴方より上座を占めるのであらうか」と云へば、アルノルドは答へていふに「マア彼の姉ほど私心のない人はありません、幾十年の間寢床に就いて居りますが、自分の身上に就いて何一ツ訴へたことはありません、私の妻が外に出るときには衣服を着替や、頭のことから足のことまで注意をして呉れます、又私の子供

等の教育のことに就いて充分氣を付けて呉れますが、自分の事に付ては身に病氣のあることまで忘れて居るやうであります、自分が病身であるといふことは、殆んど思ふて居らないからである、只四邊の人々の爲に心を用ゐて、人は宜かれがし、人に過失のないやう、人が成功するやうに、人が立派な人物になるやうにと思ふて、日夜人の爲に心力を用ゐて居ります、到底私は姉には及びません、天國では確かに姉の方が上座を占めるでありませう」と言はれたと云ふが、いかにも其の姉君は立派な人であつたらう。

今一つ之に類した話がある、新島襄氏は我日本に於て、六大教育家の中に算へられた一人である、此大家の功績は今更喋々するには及ばないけれども、天國に於て、確かに氏よりも上座を占めて居る者があらうと思ふ、夫れは何人あらう、その姉君はアルノルドの姉君と同じことで、多年病床に臥して動けない人であつた、其人が此世を去られたときには、海老名君がそのお父さんのところに悔狀の代りに、喜悅の手紙を送られた、其文言は「承る所によれば、貴方のお娘御は天國にお嫁入をなされたる由、悦ばしいことである、此上もない悦

ばしいことである、今は天国に於いて嘆ぞ幸ひなことでありませう」と云ふ意味であつたそうだが、人が死んだのに悔みを云はず、お芽出たいといふ手紙を送つたといふは、同人間に一つ話として、傳はつて居る、斯くも新島襄氏の姉君の此世を去られたことを賞讃する所以のものは實に麗はしい品性の方であつた、實に愛の深い、私のない方であつたからである、何も此の世の中に於いてエライ仕事をしたからと云つてエライ譯ではない、其人が己れを忘れて、人の爲に父母の爲に、兄弟の爲に、弟妹の爲に、親戚朋友の爲に、又天下國家の爲にといふ、美しい、氣高い願望が其處に存すれば、夫れが此上なき立派なものとして賞讃さる、譯であらうと思ふ、夫れで私共の願望には大小があり、また、私共の願望には高下がある、何うしても人間は小さな願望よりも大きな願望、低き願望よりも高き願望を持たねばならない。

又吾人の願望に清められた願望と、清められない願望との差別がある、即ち或人は金を儲ける、金儲けにのみ力を盡して居る、實に小さい願望だ、金を儲けやう／＼と思ふ人は果して汚れて居る、ア、穢いと云つて袖を拂はなければ

ばならないようなのが頗る多い、去りながら諸君、私共の知れる内外の人々の内には、幾十萬幾百萬幾千萬の金を儲けても決して、穢いといふ言葉を附けることの出来ない人が居る、金が貯れば蓄るほど穢なくなるのは世の常であるが、金が貯るほど清らかになつた人がありとすれば、是れくらゐ清い人はない、是れくらゐ尊い人はない、ロッキンフエローは石油王として世界第一の金満家となり、世の公益の爲には幾千萬圓でも惜氣なく出す人であるが、人はロッキンフエローといふと、皆嫌がる、皆爪弾をするのである、同じ金を儲けた内にも、カルチギー翁は何時へ行つても尊敬される、何所へ行つてもカルチギーの話は人が雲霞の如く集つて聞く、何故にロッキンフエローとカルチギーに斯くの如き差異を生じたであらうか、同じく金を儲けた人であるのに、一人は排斥され一人は持囃さる、ロッキンフエローは實に亞米利加の人々から憎まれる、一人で道を歩くとも出来ないほどに憎まれる、金を出さないかといふと、市俄古大學の爲には既に一千八百萬圓も放り出したくらゐである、茲が即ち清いか汚いかといふ點であらうと思ふ、其の金儲けの方法が汚ないのと清いのととの相違であら

うと思ふ、又政治家といふものを見ても同じことである、政治家といふ名を聞くと、賄賂を聯想する、政治家と賄賂と云へば、マア大抵當らずと雖も遠からずだらうと思ふ、其同じ政治家の中でも、亞米利加の大統領ローズベルトが金持征伐をやつても、人々を牢屋の中に打込んでも、今日亞米利加の八千萬の人間が彼を敬ひ尊ぶ、實にこの人のやうな立派な人はないと賞讃して居るばかりではない、世界萬民が彼の人格には感服をして居るのは、抑々何故であらうか、多くの政治家は自分が權威を握つたならば、慾の爲に其の權威を用ゐようとか、世の中に盛名を得ようといふやうな、穢いものがあるからして、位の山に上つても、人々に嫌はるゝ譯であらうと思ふ、ローズベルトの如きは位の山の絶頂に上りながら、實に清き生涯を亘り清き願望を以て一心不亂に力を盡して居るから、人々に尊敬さるゝ譯であらうと思ふ、又同じ學者の内でも彼かと輕蔑さるゝ人もあれば知ると知らざるとに拘らず先生と仰かるゝ人もある、同じ學者であり同じ帝國大學の教授でありながら、一人は彼かと輕せられ一人は先生と敬はる何故に斯の如き違ひを生ずるか、是は其願望の清いか汚いかによる譯である。

ある。

して見ると諸君、私共は清められたる願望を持たねばならぬ、學問ではニコトンをして三舍を避けしむる程の大學者になつても構やアしない、金を儲けても構やアしない、政治家になるならば、ローズベルトの頭を押へてやるやうな政治家になつても構やアしない、只此所が(胸を示す)清らかであつて、人を救ひ世を救ひ、天下國家に盡したいといふ清められたる願望を以て立つといふことが、是れ甚だ大切であらうと思ふ、私共が四福音書を開いて、イエス、キリストの願望が何であつたか、彼の全生涯の願望は何であつたらうかと尋ねて見ると、亡びし羊を尋ねて之を救ふといふことに他ならぬ、將に滅びんとする人間を救ひたいといふ願望、夫れが爲には生命をも棄てなさるゝといふのであつたから、是れくらゐ高い願望はない、イエス、キリストの願ひの内には一點の私がない、然らばイエス、キリストの願ひはどのくらゐ大きいかといふと、萬國萬民を救ふといふことであつた、お弟子方は何うであつたらうか、パウロ曰く、若我兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈淪に

至らんも亦わが願なりと元來宗教を信ずるといふは、安心を得たい爲である、キリストに救はれたといふのが願望であるのに、使徒パウロの如きは同胞猶太人が救はるゝ爲であるならば、自分はキリストより離れて、沈淪に至るも一寸も介意ない、他人を救はんが爲には我身は滅びても介意ないといふ、凡そ新約全書の内に斯の如き大きな固い願望を持つたものを見出すことが出来ない、我骨肉我兄弟の爲にならんには、キリストより絶れ沈淪に至らんも亦我願なりとは、何ぞ其の願望の清きぞ、舊約全書の内に於きては、爰に讀み上げた出埃及記の三十二章の三十三節にモーゼが「然どかなは彼等の罪を赦し給へ然ずば願くは汝の書しるしたまへる書の中より吾名を抹さりたまへ」と祈つて居る、私の名前が神様の前に帳消にされても好い、イスラエル人民を偶像を拜だ罪より救ふて下さい、私の名前は帳消にして、イスラエル人民を救ふて下されと願つた、故に舊約聖書に於いてはモーゼほどエライ人物がない、故に新約聖書に於いてパウロほどのエライ人物がない、キリストは無論別者である、キリストを除ては、舊約聖書に於いてはモーゼが獨り曉の明星の如くに輝き、新約

聖書に於いてパウロが宵の明星の如くに輝いて居るといふのは何に故であらうか、其の大切な一命を失ふもて構はない、我が兄弟我が姉妹の救はるゝ爲にならばと云ふ願望によることである、心の底に在る願望の深さ、高さ、尊さは、神のやうな願望と申しても差支はない。

諸君、今日世界に於いて何所が一番宗教上の感化の行届いた、一番道徳の高し、一番清い人間が居る國であるうか、諸君は亞米利加のニューヨークと仰しやる、諸君は英吉利だと仰しやる、併しながら私は世界で一番清い一番道徳の高い、一番宗教心の盛んなる人間の住んで居るところはスコットランドと思ふ、多年スコットランドに留學をして居られた某君の話に、彼の地には實に美しい習慣が澤山ある、家の内に息子が三人五人あると、百姓屋では一人は牧師又は教授としてさづけなくてはならぬと云つて、一人は高等教育を受けさす爲に、餘の兄弟達が力を協せて稼ぐと云ふことである、實に美しい、五人の兄弟があれば、其内の一人は牧師か大學の教師にして神の御用を勤めさせたい、夫れが爲には他の兄弟は土を掘つて居るとはいかにも美しい話である、其の

スコットランドが世界第一の美しい國になつたといふのは、抑々何に原因するか、今を去ること凡そ三百年の昔にジョンノックスといふ清い人が居つて、「神よ我にスコットランドを興へ給へ然らざれば我に死を興へ給へ」と祈つた、ノックスの祈禱の底に一點の私がない、微塵の汚れがない、全身を捧げてスコットランドを救ひたいと祈つた、スコットランドの女王マリアは英吉利の女王エリザベスの兵よりも、ノックスの祈禱の方が怖いと云つたから、其願望を持つてノックスが方を盡した、其感化が……神様がノックスの願望をお聴入れになつたから、スコットランドは實に清められた。

諸君、今から三百年前に我が日本にザビエーといふ一人の聖者が印度から渡つて、豊後に上陸して、夫れから山口に行き終に堺まで来た、と云ふことである、ザビエーは「神よ我に日本國を興へ給へ」と祈つた、素足になつて日本を道中して、斯教への爲に力を盡した、さうして餘儀なく日本を去つて支那に行く途中或島で死んだ、ザビエーが我國に働いたのは僅か一年半であつたが其感化により彼の後に多くの宣教師が渡り來つて、終に十五萬の信者が出來た、其

のザビエーの「日本を我に興へよ」といふ大いなる願望を、今神が聴上げになつて居るのかも知れない、新島襄氏は將に死なんとする日まで、我は日本の前途の爲に計畫をなし、「神よ我國を救ひ給へ」と祈つて居られた、氏は明治二十三年の春に墓なく大磯の露と消えられたけれども、組合教會が今極めて優勢に神の道を傳へて行けるといふことを考へて見ると、死に至るまで祈られた「我國を救ひ給へ」といふ願望を神が聞き給ふたものと見てよからう、其清い願望は今尚生きて居る、我名に依つて求むるものは必ず興へらるゝと示しになつたイエス、キリストは私共の願望をお叶へなさらぬことはないと思ふ。

して見ると諸君、今日の我々とてもさう云ふ大きな祈禱は出來ない、さういふ高い祈禱は出來ないと云つて已むべきであらうか、日本帝國の爲に祈ることが出來ぬならば、何故父母の爲めに祈られぬか、何故良人や妻の爲めに祈られぬか、何故に息子娘の爲に祈りなさらぬ、何故に朋友方の爲めに祈りなさらぬか、眞個に神の御前に切なる願ひを捧げたならば、其願ひが聴かれぬといふことはなし、其二三の好適例を擧げて見よう、ノックスの願望がノック



スの眼の黒い内に聴かれたか、ザビエリの願望が、ザビエリの眼の黒い内に聴かれたか、パウロの願望も、イエス、キリストの願望も、其眼の黒い内には何にも聴かれなかつた、イエス、キリストの願望は千九百歳の今日聴かれつゝある、パウロの願望も今ヤツと猶太人が救はれ掛けた、千九百歳の後にパウロの願望が聴かれて、猶太人が救はれ掛けた、ノツスやザビエリの願望が今日聴かれつゝあるといふことを考へて見る時には、私共は十年祈つたけれども功驗が見えないと云つて、夫れで失望すべきであらうか、神の一步は五百年かゝるといふのであるから、十年や十五年は只束の間にして何でもないことである、けれども私共人間の方から云へばもどかしくて堪らぬが、神の方に於いては何にももどかしいことはない、其の願望が生きて居る内に聴かれなくても、眞個の願望を以て此世を去ることであつたらば、ノツクスは死んで後にスコットランドが清まり、ザビエリは死んで後に日本に基督教が擴まつた如く、私共が死んだ後に初めて聴るゝやうになるだらうと思ふ、假令又私共の願望が願ひ通りに聴かれなくても今お話し申すが如き大きな願、今お話し申すが如き高き願、

即ち清められたる願を以て、日夜に神の御前に祈る人があつたならば、其人の願は其人の心を清めるのである、其人の風采を清める、其人の人格を清める、其人を大きくするのである、大きい人は大いなる願を持つて居る、高い人は高い願を持つて居る、イヤ大きい願高い願を持つて居る人こそ大きい高い人格になれる、何うしたら美しい衣服を造れるだらうか、何うしたら美味しい物が喰へるだらうか、何うしたら立派な家屋に住めるだらうかといふやうな、小さな詰らない願を以て祈り、そんなことばかり考へて居つたならば、其人は段々詰らないやうになるものである、けれども眞個に大きな願望を持つて祈るのであつたならば、アルノルドや、新島襄氏の姉さんの如く、寢床に臥して何をも爲す能はずと雖も、其人の願望が天に申し、之に依つて幾多の社會が清めらるゝに至ることは必然である。

どうか諸君と共に大願望を起して、夫れが爲に有ん限りの力を盡すやうにして見たいことである、何ほ小さな人物と云つても、其小さな人物が他日清らかなる人物になるに違ひはない、棒ほど願つて針ほど叶ふといふのであるから、

私共は世界大の祈禱を致したいものである、かくして初めて我社會を救ふことが出来る、神のやうな清い願ひをしたならば、其願ひが初めて世を清めることが出来る、祈禱會に行つて、各々の願を聞くと、各々の祈禱は立派である、併し其人を見ると、何うも其願が相應せぬやうに見える、けれども祈らない人に比べて見たらば、幾分か清い、何うしたら美しい衣服を着られるか、何うしたら美味い物を喰へるかといふやうな詰らない願をせず神よ我を清め給へ、神よ御名の爲にならば私は何を差出しますといふ祈禱は、假令法螺であつても、其の法螺は實に清い法螺である、神は其清い法螺を認めて、確かに其の法螺を法螺でないやうになさしめ給ふに違ひはない、どうぞ虚言でも宜いから良い願をせねばならぬ、更に進んで其の願望を實現するやうに力を盡したら宜からうと思ふ。

## 第十章 人格の進歩に伴ふ愛の發展

己人に施れんとする事は亦人にも其如く施よ、己を受する者を受するは何の貧賤あらんや惡人にて己を受する者は愛する也、己に善を行者に善を行は何の貧賤あらんや惡人もまた是の如く行なり、爾曹貧る、事を得んとおもふ人に貧は何の貧賤あらんや惡人も其ごとく貧を得んとて亦惡人に貧なり、爾曹仇を愛し又善をなし何をも望みずして借典よ然ば其貧賤は大なり且至上者の子と爲ん夫上者に恩を忘るゝ者及び不善者にまで慈愛を施せば也

(路加傳第六章二十一節至三十五節)

只今讀んだ己れ人に施れんとする事は亦人にも其如く施よといふ言葉は黄金の法律と稱するものであつて、キリストの御教訓の中で最も大切なる一句である、他の聖賢方も略ぼ之に似よつた事を云つて居らるゝやうである、猶太のラビの間に行はれた言葉は己が憎む事を他人にしてはならぬといふ、希臘の哲學者の教にも是はストア派の言葉であるが、矢張り同じやうな意味の言葉がある、孔子が仰せられたる「己が欲せざるところを他人に施す勿れ」といふ言葉は丁

度猶太のラビの己が憎む事を他人によてはならぬと云はれたのと似て居つて、其意味も殆んど同一ではあるまいかと思ふ、キリストのは己が欲するところを他人に施せといふのである、他の聖賢方のは己が欲しないところは他人にしてはならぬといふ事であつて、其相違は裏と表の差である、積極と消極の相違であるから、字の面で見たところは左程大した相違ではないのであるけれども、之を實際に應用する上に於ては東洋と西洋の相違を生ずるのである。キリスト以前の文明とキリスト以後の文明の相違を生じたのである、己が好かない事を他人にしてはならぬといふ事であつたならば、詰るところは山の中に隠遁して、己れ一人を正しくし己れ一人を清らし己れ一人を立派にして居りさへすれば宜いといふ事になつて參るから、即ち是は利己に陥り易いのである、己が欲するところを他人に施せといふ方であれば、是れは段々末擴がりにズーッと擴がつて行かなければならぬ、之れを家庭に施し、之を一町村に施し、之れを郡縣に施し、之れを國家に施し、遂に之れを全世界に施すといふところまで擴がつて行かなければならぬのである。基督信徒の中にも中世紀の頃に於ては世の中

がイヤになつて或は山の間隙或は谷の奥に逃込んで、己れ一人を正しうしようとした佛法類似の隠遁者も出來た事である、けれども夫は己れを正しうし己れを清らしうしようといふ一念から發したのであるから、さて隠遁して自己が清められて見れば、キリストの御教訓は己が欲するところを他人に施せといふ事であるから他人の居らない山中、他人の居らない谷の奥では施すことが出來ないのであるからして矢張り山谷から出て來て世の中に愛の働きをしなければならぬいやうな事になつて來たのである。私は熱々と考へて見たが、凡そ人間のする事は何をすにしても先だつ者は己れなり、花一ツ見るにしても矢張り己れといふ眼鏡で見るのである、心に憂愁があれば青空に煙々として輝いて居る明月を見ても月見れば千々に物こそ悲しけれと云つて泣くやうな事になつて來るのである、心に喜悅があれば東の山の端に昇るところの太陽を見て、實に嬉しい喜ばしい宜い心持になつたと云つて飛立つばかりに嬉しくなつて來るのである、併しながら此太陽と月と果して何の相違があらうか、同じ大地を照すところの陰と陽だけの相違であるけれど

も、之れを見るどころの人間が陰氣になつて見れば悲しくなり、陽氣になつて見れば嬉しくなるといふやうな事である、天地宇宙の大主宰であるところの神の事を考へるにしても先だつ者は己れなり、己れが小さければ現はるゝところの神も亦甚だ小さいものである、己れが大なれば現はるゝところの神も亦大きい神である、海や湖水の表を照すところの月影は稍や大きいものである、草葉の露に移るところの月影は至つて小さなものである、己れが即ち土臺である、己れを棄てて計る事が出来ない、して見ると此黄金の律法も亦同じ事である、愛といふ問題になつても矢張り己が計りである、汚い心の人に汚ない愛が移る、高貴な人の心には高貴な愛が移るのである、世間狭い人の心には狭い愛が移るのである、世間廣い人の心の中には廣々とした愛が移るのである、淺墓な人の心の中には淺い愛が移り、棹せど底も知れぬ程の深い心の人には深い愛が移るのである。何を計るも皆我心である、我心を棄てて計る事は出来ない、茲にキリスト、イエスが己が人に施れんとする事は亦人にも其如くせよと仰せられたが、其己がといふのは何であるか、己がといふは即ち人格であらうと思ふ、人

格といふ内には智慧もあり智力もあり情もある、物を決し行ふところの意力も備はつて居る、言換れば人格といふは智も情も意も、總て我に屬する有りとならぬところの機關を統一して居るものであるから、此の人格が進歩するといふ時には、即ち己がと仰せられた、己れが進歩する譯である、山に登るにしても一歩高ければ夫丈眼界が廣くなる、數十歩高ければ、又夫丈眼界が廣くなつて来る、いよ／＼絶頂に登つたといふ時には、攝河泉は愚か大和山城までも眼界に這入つて来るといふ如くに廣々となつて来るのである、此人格が低いといふ人間であつたならば、其人格の低い人間が人にして欲しいと思ふ事はどんな事であらうか、内に無い物は外に出ないといふ、是は科學の法則、内に含まれた物でなければ外には出て来ない、此瓦斯管には瓦斯が一杯満ちて居るから、螺旋を捻れば其瓦斯が直ちに現はれ出て満室を照すのである、水道の管には漉上げたところの清い水が一杯に満ちて居るから栓を捻れば滔々として水が出て来る譯であるけれども、水が涸れてしまひ瓦斯の源が盡きてしまつたならば何ほ螺旋を捻つて見ても少しも出て来ない譯である、其出て来るといふにしても、

夫に汚ない水を充たして置けば汚ない水が出て来る。汚れたる瓦斯を充たして置けば汚れたる瓦斯が出て来る。汚ない水が出て来る。汚れたる瓦斯を充たして置くのである。淨瑠璃新内浪花節といふ譯であるからして内に在る物が外に出て来るのである。淨瑠璃新内浪花節といふやうなものを我人格の中に入れて置くといふ人即ち我情感は浪花節や淨瑠璃や祭文で始終悦ばされて居る人が此所にあるとしたならば、サア其人が何か自分が慰めて貰ひたいと思ふ時には、矢張り浪花節が淨瑠璃か或は祭文かチヨボクレか新内かといふやうなものであらう。又友人が茫然として居るのを見て一ツ慰めてやらうと思ふ時には、己れ人に施れんとする事は亦人にも其如くするといふのだからして、其所へ行つて浪花節をやつて見る、チヨボクレを語り出すといふやうな詰らない事になるだらうと思ふけれども、ベトールウエンの作曲かワグネルの夫れか、或はテニソン、ブラオニングの詩といふやうな類のものを常に味うて居る人であつたならば朋友が此頃鬱して困つて居る、何とかして慰めなければならぬといふ事を聞けば、己が欲するところを他人に施すといふのであるから、自分はテニソンの一節を君の爲に朗讀して見よう、自分は出来ないが一ツ誰かに頼んでベトールウエンの作

曲をやつて貰はう、イヤ夫れは宜からう、さういふやうな高い調子の人であつたならば、實に其人格が高いだけ夫丈施すところの愛も亦高いものである。又讀物と云へば自然主義の小説、何所で情死したとか何所で海に飛込んだとか縊死をやつたとかいふやうな事を読んで、我心に面白いと思つて居る人であつたならば、誰か他の人が何を讀物があるまいかと云へば、其最も汚ない下劣な情を描いたものが我心に欲するものだからして、夫れを人に貸してやらうといふ事になる、借りて讀んだところの者は、貸した人よりもマア一ツ下劣なところに落ち込む、地獄に飛込むのと同じ事である。

之に反して偉人イエスを思ひ或は波多野博士の「基督教の起原」を讀んで見たとか、別に慰安となつたといふ譯ぢやアないけれども非常に我智識を増したといふやうな書物を一ツ我々は進んで讀まなくてはならないと思ふ人がある、誰か讀物が欲しいといふ事であつたならば、其人の頭の中には自然主義の汚ない小説などは無い、推薦しようと思つても無い物を推薦する譯には行かない、君は「基督教の起原」をお讀みになつらば、宜からう、君にはスミス女史の書い

た「幸福の生涯」が宜からうと思ふ、君は歴史が好きだが、此頃村田勤氏が「宗教改革史」を書かれたが、十数年の骨折で書かれたものだからして是は御一讀になつたら宜からうといふやうな譯で、我衷に在る物を他人に出すより他に仕様はないのである、情の上に於ても智の上に於ても同じ事であつて内に在る物が出て来るのである、又何か他人の爲に盡すといふ時に何なつて来るかと云へば、自分は高尚なる贈物を受けて實に氣に入つた、ア、いふ贈物をして呉れる人の心は實に床しいものだと思つて居る人であつたならば、誰某に物を贈りたといふ時には野卑な物でなしに、實に高尚なる物を贈りたいといふ考になつて来るのである、何か他人の爲に盡すといふ時にも、同じやうに眞に其人が心の休養となり、心の喜悅となるやうな物を其人に施したいといふ事になつて来るのであるからして、人の贈物を見ても其人の人格が其所に現はれて来る、人の讀む書物を見ても其所に人格が現れて来るのである、他人を慰むるといふ時にも其人の人格が其所に現はれて来るのであるからして、我人格が高くなれば高くなる程他人に施すところの愛も亦高くなつて来るのである、或所に火災に

罹つた家がある、私は其災難に同情を表する手紙を一本送つたのである、其隣りの家は半焼までは行かなかつたけれども四分の一ばかり焼けたといふのだからして、其家にも亦一本の手紙を送つたのである、ところが思ひ懸けない其二軒からして非常に厚い禮狀が来たのである、夫れから其後其家族の人に會つたところが非常に禮をいふのである。過日其二軒の家を訪ねたところが、何よりも彼よりも先きに其の手紙の禮をいふのである、私は是れはしたりと思つた、一軒は丸焼をした、一軒は四分の一だけ焼かれたといふ、何か私が先方の家の道具とか何かさういふやうな物を送つたならば夫程に禮をいふて貰ふ譯もあらうけれども巻紙を取つてスラ／＼と五分か七分も費らない内に二本の手紙を書いて、三錢の郵便切手を貼つて函に放り込んだ丈である、ところがさういふやうに非常に悦ばれるのである、是は何ういふ譯であらうかと考へて見るに、先方の人は實に數十年劫を経たところの基督信者、日曜學校に於て教へ上げられたところの若夫婦である、そこで一本の見舞狀を貰つたといふ事は、筆筒一棹の贈物を貰つたよりも悦んで呉れるといふは何か其所に床しい人格が存する事

を認めざるを得なかつたのである。

使徒パウロの如きは我が爲に祈つて呉れるといふ事を、テサロニケの人々に前の書にも後の書にも言ひ送られた、前の書の五章の二十五節を見ると「我儕の爲に祈るべし」とある、後の書の三章の一節を見ると「我儕の爲に祈れ」とある、他人に祈禱をして下さい、我神の道を憚るところなく説得するやうに我爲に祈つて呉れるといふ、其非常に高いパウロの人格は贈物を下されとは云はな、我爲に祈つて呉れるといふ要求をせられた、そこで使徒パウロが人々に何を與へようかといふ時に我爾曹の中に記憶して居る事は神が證據人であると書かれた、パウロが他人に與へようとする第一の贈物は祈禱である、自分が他人に祈つて欲しいといふのだからして、他人も亦祈禱が欲しからうと思つて他人の爲に祈るといふ、自分が災禍に遭ふた時に同情の手紙を貰つて實に嬉しかつたといふのならば、同情の手紙を他人に送る事が即ち其人に盡すベストだと心得るのと同じ事である、自分が病の床に臥した時に他人が慰安に来て呉たといふ事を此上なき喜悅とするならば、他人を慰むる爲他人を訪問する事を以てベスト

と考ふるのは是れ當然であらう、自分が罪を犯した時に他人が二度も三度も来て我を諫めて呉れたといふ事を此上なき愛と思つて居る時には、他人が墮落しようとする時には面を冒して諫める事は、是れ他人の爲に與へるベストであると思ふのは當然であらうと思ふ、昔に人々が只一時愛の爲に是々の事をしようと思ひ立つばかりではなく、全生涯を愛の働きに打込むといふ決心をするのは何の邊から湧き出して來るか尋ねて見れば、矢張り己が人格の底に非常に感ずるところのものがあるからであらうと思ふ。

嘗てアウトルックを讀んで居つた時に感じたのは、一人の看護婦がある、其看護婦に對して貴女は何うして看護婦に成られたかと問ふと答へていふには私が九ツか十かの時であつたと記憶致します、其時私の母は亞米利加の西の開墾地に住んで居つて大病に罹りましたところが、醫者も居らない、切めて看護婦なりとも間近に居つて呉れば此病氣は助かるだらうと思ひました、看護婦は居らない、醫者にも掛る事が出來ず看護婦にも介抱さるゝ事が出來ずして到頭我母は亡くなりました、夫れから私は其九ツか十の幼な心の中に自分が人と

成つたならば看護婦になつて、切めては斯かる場合に遭遇した病人を助けたいといふ情から、身を捧げて看護婦の職に就きました」と、其幼な心に動いたものが其女の全生涯を通して、愛の使者として、幾百幾十の病人を勸り助くるところの愛の施しとなつた事を思はなければならぬ。ゴルドン將軍が千軍萬馬の間に立つた時には、實に如何なる大軍をも取挫ぐといふ勇猛豪氣な軍人であるけれども、彼れが病人の傍に行つて葡萄の房を千切つて、之を病人の口に含ませる時には何と云はうか、實に好個の書題だ、其ゴルドン將軍が全生涯を通して愛の働きをしたといふのは、是れ何か將軍の心の中に深く感ずるところのものがあつて、遂に其所へ至つたのであらう。

諸君、下劣なる人間は……否下劣なる人間でなくとも、私共の人格がまだ進まない時には報酬附きの愛を人々にしようとする、己れ人に施れんとする事を其如く人にせよといふのであつた、斯くして置けば又人が斯くして呉れるであらう、如彼して置けば又人が如彼して呉れるであらうといふやうな、實に水臭い愛を施すやうな事になつて來るのであるけれども、其人格が進んで來て、い

よく清くいよく尊とくなつて來た時には、其人は何をも要求しない、神よりも人よりも報酬を貰ふといふやうな考は更に抱かないで、只我衷に在るものを他人に施したいといふ一心になつて來るのである、ナサレのイエス、キリストの愛には報酬が附かなかつたのである、イエスは報酬を望みなさらなかつたのである、假令報酬を望みなされたとしても、彼の十字架の上に命を棄てるといふ犠牲の精神に對して誰が報酬を與へる事が出来るであらうか、恐らく神も人もキリストに報酬を拂ふ事は出来なかつたであらう、報酬の附かない愛なればこそ二千歳の今日に至る迄幾千幾萬の人々が其愛に濕ほされて、自ら悦ぶのみならず、慰められ、勵まされ、他人をも慰め勵まし且つ助くるといふ事になつて來た譯ではあるまいかと思ふ。アシ、のフランシスの愛にも報酬を望む者はなかつたであらう、他人に施れ様と思ふ事を他人にするといふのぢやアない、其所は解脱してしまつて、他人が憎まうが嫌はうが叩かうが介意ない、自分が善い事をして貰ふといふのぢやアない、善い事をせずしては居られない善い事をしなければ安心が出



来ないといふので、全心全力を注いで他人の爲にするといふのであるからして、其愛や實に非常なる感動を與へるのである、其愛や非常なる潤を與へるのである。私共の父母の愛にも報酬を望むやうな分子は少なかつたと思ふ、私共の愛に對しては父母が報酬を求めたかも知れない、斯うして育て置けば、老境に及んだ時に卒んで呉れるといふ考を有つたかも知れない、けれども未子の私に對しては、到底此子が大きくなつて家を持つまで自分達は生存へる事は出来な  
いと思ふたかも知れない、故に少しの報酬だに求められた事はないだらうと思ふ、そこで其の父母の愛は私の心の中には非常に響いた、非常なる感動を與へたのである、私共の愛も他人に斯うして貰ひたい、如彼して貰ひたいから自分も斯うするといふのでは不可ない、パウロがいふやうに「我愈々爾曹を愛すれば愈々爾曹に愛せられず左れど我爾曹の爲に財を費し身を盡すべし」といふ、是が聖賢方の愛である、是が神の子の愛である、使徒パウロは正しくキリストの愛を我心に受けて、遂に其愛の報酬を望まずして施す事が出来るやうになつたのである、不肖私共の如き詰らない者でも、初めは多分の報酬を求むるやう

な心持で愛もいたしたが、漸次／＼に報酬を望むやうな卑しいものは薄衣の如く減らされて、報酬を望まずして眞個の愛が施したいものであるといふ理想丈は、確乎として我衷に存するやうになつたのではなからうかと思ふ、諸君も亦同様であらうと思ふ。

けれども諸君、我衷に無い物は出て来ない、英語を稽古した事のない人が西洋人に出會つても英語は決して出て来ない、和歌一ツ學んだ事のない者が如何に美しい景色に觸れたと云つても歌が出て来ない、我衷に愛を感じた事のない人であれば何うして愛が出て来やうか、他人が我に盡した事か、神キリストが我の爲に盡しなされた事を深く覺えて居る人でなければ、實は我四邊の人々に對して愛の心も起らないからして愛の働きも出来ない譯である。して見ると他人の愛をアツブリシエトする事は是れ實に大切である、他人の愛を受けてグツと我心の中に感興を起して居るといふ事が是れ大切である、忙しい人が某を訪問しなくちやアならぬ、ア、昨日も出来なかつた今日も出来なかつた、到頭此週間は出来なかつたが、切めては日曜日の午後になりと其人を訪問しようよ

思ふと、日曜日の午後貴重なる時を割いて訪問に出て行く、さうしてア、我勤めを盡した、是れで肩の荷が下りたマア、一週間思ふて居つて遂に日曜日の午後に訪問をした、ア、嬉しかつたと思ふ、其人が又忙しい人の訪問を受けた時に君はマア忙しい中で此遠方によろこそ来て呉れた、サア上つて呉れると云つて特別の待遇をする、忙しい中を割いて人を訪問した事のない人は、忙しい人が訪問して呉れた時に左程に感ずるものではないのである。他人に物を贈るにも之にしようか彼れにしようか何を持つて行けば彼の人々が悦ぶであらうかと、夫婦額を集め、二三日の研究の末、ヤツと是れならばと云つて他人に物を持つて行つて悦ばれたといふ経験のある人であつたならば、又他人が心盡しの物を贈つて呉れた時に、ア、此贈物は一寸したもの、金に積れば一回か一回五十錢だが、此贈物を送るに、彼の夫婦が幾度も相談し幾度も考へて、遂に之を持つて来て呉れたかと思へば、其親切を實に有難く感ずるのである、さうまで思つて持つて来て下さつたかと思つて、深く此方が其愛を受入れる事が出来るのである、ところが諸君、人格の下劣なる人間は夫れが分らない、他人を愛した事

のない人は他人の愛を認むる事が出来ない、他人の愛を認むることの出来ないやうな人であるならば又他人を愛する事も出来ない、是に於てか私共は神の愛を深く味ひ、キリスト、イエスの十字架上の愛の犠牲を深く心に味うて、夫れから父母の愛、師匠の愛、朋友の愛、或は人々の愛を深く我心に味うて置いたならば、内に在る物が外に出て、遂に夫れを他の人々に致へ施す事が出来るやうになつて来る、何故に人が明智光秀を憎むであらうか、何故に足利尊氏を憎むであらうか、何故に歐米の人はイスカリオテのユダをあれ程に憎むであらうか、他ぢやアない、イスカリオテのユダはキリストの愛を他の弟子方と同じやうに受けたに拘はらず、恩に報ゆるに仇を以てした、足利尊氏は後醍醐天皇の寵愛を受けながら、遂に天皇に向つて弓を引いた、明智光秀は織田信長に頭を叩かれたといふ忿怒はあらう、けれども信長の恩寵を身に浴びながら信長父子を本能寺に斬つたといふので人々が憎むのである、世の中に恩知らずほど仕方のない人間はないといふのは即ち夫れである、恩を知らないといふ人間、恩を忘れるといふ人間は人間の屑である、恩を知らず恩を忘れるやうな者が何

うして他人に愛を盡す事が出来ようか、恩を思ひ恩を返す人にして初めて愛の  
實行が出来、私共基督信者が神の恩を思ひキリストの愛を深く感ずるにあら  
ざれば到底報酬の附かない眞實の愛を人々に施す事は出来ないであらうと思ふ。  
此黄金の律法は個人と個人の間に行はれて居り、又家庭と家庭の間に行はれ  
て居つたが、遂に今日では國と國との間に之を行はなければならぬといふので  
ある、然るに國の人格が低い國では行ふ事が出来ぬ、世界に於て國としての人  
格が一番高いのは英國である、英國が第一に之を實行する資格を有て居りはし  
ないかと思ふ、亞米利加は勿論之を行ふべき國であるけれども、如何せん八千  
萬の人間の中には伊太利人ありボヘミア人あり獨逸人ありといふやうな譯で、  
種々雑多なものを含んで居るから、大統領は實に人道的大統領といふルーズヴ  
ェルトを頂きながらカリフォルニア其他の州に於ては日本人を排斥するといふ  
やうな非人道的の決議をやらうとする、實に亞米利加の善い人々に取つて氣の  
毒に堪へないのである、善い人々がキリストの黄金の律法を實行しようとする  
のに、其矢先に悪い無智な者共が其黄金の律法を片端から破るといふ、我日本

も同じ事である、善良なる民は韓國民を教化したいと思つて居るのに善からぬ  
同胞が韓國人を虐るので、いよく韓國人は日本人の憎むべきを知つて慕ふべ  
きを知らないといふ事になる、是は日本の國としての人格が低いからである、  
個人としての人格が高まつて初めて高い廣い愛が出来る、家庭の人格が高まつ  
て初めて其家庭から清い高い愛が現はれて来る、國家といふ人格が進んで、初  
めて其國家から高い清い愛が流れ出る譯である、併し國家が黄金の律法を守る  
やうになるのは前途尙遠である。  
どうか私共の家庭の内に御互ひ個人がキリストより流れ出る愛の泉を汲  
んで、此愛を四邊の人々に是非施したいものである、夫れで人格の進歩に伴ふ  
て初めて清き高い愛が發展するといふ事を、此黄金の律法と共に御記憶あら  
んことを切に希望するのである、

## 第十一章 沈黙の教訓

其時いたりて必ず成へき我が言を信ぜざるに因なんぢ瘡となりて此事の成日まで言ふこと能はじ

(路加傳第一章二十節)

然りといへどもエホバはその聖殿に在ますぞかし全地よその御前に黙すべし

(哈巴谷書第二章二十節)

先日路加傳を開いて見ると、ザカリヤといふ祭司が神の宮に登つてお祭りの事をいたして居つた時に、神が其妻エリサベツに一子と與へ給ふとの示しを受けたところがザカリヤは甚く其事を疑つて、年も既に老いたるものであるからして、到底さういふ嬉しい事はあるまいと思ひ神命を受けなかつたからして曇朗讀致した如く汝は必ず成るべき事を示されたのに信じないから、子供が生れる日まで瘡となつて物言ふことが出来ないといふ神の宣告を受けたと書いてある、これ、果して事實であつたか何うだか些と疑はしい事である、然し只一の傳説として教訓を學ぶ事にせよ、瘡となつて物言ふ事が出来ない、而も

其間が十ヶ月の久しい事であつたといふところからして、此十ヶ月間の沈黙の生涯はザカリヤに取りては何の教訓を與へたであらうか、彼は十ヶ月間に沈黙に依つて益を得たのであらうか、又損を得たであらうか、彼れの精神は向上したであらうか將又下落したであらうか、何うであつたらうかと考へて見たいものだ、餘り願ふ事ではないが自分達も進んで瘡となつて、若干の日の間又は若干月の間精神の修養をいたしたならば確かに益が多からう、確かに我心は向上するであらう、ザカリヤは沈黙して深く神の恩愛を味ふた上に、年頃日頃求めて得なかつた一人の子さへ得たといふ事であれば彼れに取つては内外に於ての恩愛であつたと思はれる、して見ると沈黙といふ事は實に味ひのある事だといふ考へが起り來つたのである。

諸君、私共人間には外面の生活と内面の生活との二ツがある、扱て外面の生活といふのは何うして食はうか何うして着ようか何うして飲まうか、どんな家に住まはうか何の仕事をやらうか、家を何ういふやうにして治めやうか、天下國家の爲に如何にして盡さうかといふやうな譯で、我身を處し、我家を治め、

社會に對しての人間の道を盡すことに外ならない、内面の生活とは或は書齋に引籠か、或は化學室に這入り込、或は人里遠き奥山に潜む、して心意の働をするものである尤もさういふやうな所に潜まなくても、道を歩いて居ても汽車に乗つて居ても其人の心の内の働きをすることである、外面の働きは身體の外に現はれ、内面の働きは多くは身體の内で行はれて居る、幼兒は一種の肉の塊見たやうなものであるが、又其内面の働きはないとは云へないが未だ內的働が始まらないと云つても宜いくらゐたらうと思ふ、そこで幼兒は外から來るところの刺戟又は暗示に依つて動くものである、非常に泣いて居つても抱へて動揺つてやると直ぐに泣止む、又母親の聲が聞えること、今まで泣いて居つたのか直ちに泣止む、何か外から刺戟を興へ暗示をいたすと、其方角に心が轉じてさうして色々な動作をやる、大抵十か十一くらゐまでは始終外の物に動かされて居るから一寸もシツとして居らない、三十分シツとして居れと云つてもシツとして居らぬ十分頼からシツとして居れと云つても、三分でも宜いからシツとして呉れると頼んでも、其三分も何うやら難儀である、始終動いてく止まない、と

ころが十二ぐらゐか十三四になつて來ると内の働きが大分出來て來る、頻りに石盤を持つて何かやる、姉や妹が其近所でワイ／＼云つて騒いで居つても平氣で何か書いて居る、實に妙だ、十か十一ぐらゐまではなかくシツとして居ない、餘程面白い玩具でもやつてこれで遊べといふ、其玩具を以て二十分か三十分は遊で居る、けれども直きに倦いて來ると又騒ぎ出す、實に面白い、十二十三になつて來るとチャンと一人で治り返つて居る、十でとつくり治まつたといふところは其所だらうと思ふ、實に妙である、自分の子供の時の事を考へて見ても同じこと、諸君の幼い時分のことを考へられても同じ事、さう喧しう云はずにシツとして居れ、些さぐらゐは一人で其所で遊んで居れと幾度叱られたか知れない、お前は本を讀んで居るのか遊んで居るのか分りやアしない、本を讀むなら一人でシツとして讀み、本を讀むのは心で讀む、口先ばかりで讀んで居る、手習は手の先である、心ちやアやつて居ない、夫で矢張り手習しとるつもりか、右の手で手習をして居つて左の手で何かやる、口では本を讀んで居つて此方の手では隣りの人の首筋を掴んで何かして居る、なか／＼シツとして居

ない、けれども十でとつくり治まる、私は九歳の時に治まつて、グツと自分の心に何か感じた、夫までは矢張り口で本を讀んで耳では他人の話を聴いて居つた、右の手で手習をして左の手で遊んで居つたが、九ツの年に不圖感ずる事が出来てからは、本を讀む時にはジツとして本を讀む、手習する時には一生懸命に手習をする、夫で矢張り静かにして治まつて勉強も出来る、家で家内やなんぞと實に彼の子はサツパリ性根が入らぬ、何うもならぬといふやうな事をいふが、私の九ツの時分の経験があるから今に治まる、今に沈黙するに違ひないと思つて居ると、果して皆それ／＼内面の働きの出来て来ると治まるといふ事を見るのである。

是は子供の生活であるが大人の生活も同じ事である、些どもジツとして居ない人がある、起つて見たり坐つて見たり歩いて見たり窓から覗いて見たりマア何か始終ガサ／＼やる、實に何うも他の人が氣忙しい程に其人がガタ付く、夫が家で些どもジツとして居らない、誰かを相手にして喋舌つて居る、お朋友を連れて来る他家に出掛けて行くといふやうな譯で薩張り坐りが着かぬ、夫かど

思ふと何日でも黙つて殆んど居るか居らないか分らないやうな人があるのである、イエス、キリストはそんな人であつたらうと思ふ、彼れは喧しき事なく其聲は巷に聞えなかつたと記してある、治まり返つて居らつしやつたらうと思ふ、どんな人が治まり返つた人であるかといふと、心の確かな人思ひの深い人内面の生活のエライ人である、どんな人が騒ぎ廻るかといふと、學問もなく教育もなく、内面に於て何等の働きのないやうな人が動き廻つてガサ／＼して居るのである、果してさうであれば大抵其人の動作を見て、是はエライ人か詰らない人か、是は深い人か浅い人か、是は高い人か低い人か直きに分る、何うも人間は過日から話をするやうに何でも看板に現はれて来るから仕様がなない、其内面の事をよくせよといふ事になつれば沈黙の生涯が甚だ必要であらうと思ふ、之を歴史に探ね之を今日に徴して見ればよく分る、一體どんな人が沈黙を守るかどんな人が沈黙の生涯を求めて居るかと尋ねて見ると、いづれの方面にもある、ルースワエルのやうなエライ政治家は一寸もジツとして居らないだらうと思ふであらうがさうでもない、彼が大學に居つた時に朋友の部屋に遊

びに来て其邊に本があると「一寸此本を見せて呉れる」と云つて、さうして安樂椅子に腰掛けたらば、他の連が皆返つてしまつて、其訪ねて行つた朋友も其所に居なくなつても、些とも知らずして矢張り其本を讀んでしまふまで讀入つて居つた、アブラハム、リンコルンの如き政治家は彼れ程の活動をやつたのだからして沈黙といふ事は知らなかつたかと思つて尋ねて見ると、リンコルンは青年の時代には學校へ行く資力かなかつたので、日々勞働をして働いて居つたのである、時に近傍の小山の上に登つて、木の下に朝日の射す時には西側に坐り、夕日の射す時には東側に坐つて、心から本を讀んで居つた、スプリングフィールドに於て彼れは毎朝運動をする、彼が運動をする時に人が道で出會つても些とも知らない、其脇をスレ／＼に歩いて行つても知らない、其時はアブラハム、リンコルンは政治問題を頻りに考へて居つただらうと思ふ、ジョンステュアルトミルは倫敦に住居をして東印度會社に事務を執つて居つた、自分の家から會社へ行く間に、或時は道端の瓦斯燈の柱にコッソリ行當つたり、或時は向ふから來る牝牛に行當つて帽子を脱いで失禮御免なされと云つて挨拶をしたり、

或時は淑女に衝當つて此畜生めがと云つて無禮をしたといふやうな逸事が澤山あるが、我宿から其印度貿易會社に足を運ぶ間に彼れは一ツの大思想を辿り辿つて、遂に一代の傑作を出したといふ、二三日前にデカルトの傳記を見て居つたが、近世哲學の鼻祖と仰がる、デカルトは八年の間天主教の學校で勉強をして、其勉強が終ると、家庭の切なる願ひに依つて軍人生活に這入つた、軍人の常として彼れも實際社會に出なければならぬやうな事になつて來たからして、少時交際の花を咲せて居つたといふ、けれども一人の學者と話しを交へ、一人の朋友と學問上の話しを致した其瞬間に、快活なる少年士官と交はるよりも陰鬱なる學者と交はるは餘ッ程優れりといふ考へになつて、遂に彼れは巴里の或巷に隠れてしまひ、門を閉ぢて學問の研究に取掛つた、二年の間は親戚も朋友も何所にデカルトが隠れたか知らなかつたといふ、軍人生活の間に冬營をやつた、寒風凜冽と吹頻る時に營所に籠つて居つた、此營所に籠つた其間にデカルトは人世觀、或は宇宙觀を考へた時代でつて、彼れの内面生活の最も活動をしたり時だと申す事である、而して彼れが一卷の書物を著はすと評判が高くなり四

方八方から論戦を向けられたけれども、戦ひを避けて静かな所へ云つて或は和蘭に逃げて行き或は瑞典に逃げて行つて、沈黙の生涯を送らんことを彼れは努めたのである。

宗教家といふことになれば、パウロは三年の間亞拉比亞の野の中で沈黙を守つたのである、ペテロは大方毎日々々物干に登つて沈黙を守つたであらうと思ふ、中世紀の聖人達の内には己が家を飛出して、深い谷や深い山に籠つて沈黙を守つた人もあるのである、ナザレのイエス、キリストは十二年までは矢張り子供の生涯で、近所隣の腕白小僧のみを相手にして遊び暮しなされたかも知れない、けれども十二の年以來父ヨゼフが死去して後は、何かイエスの心の中に深く思召す事があつたか、三十の年まで十有八年の間沈黙の生涯を送られた、尤も大工の仕事をして日々お稼ぎなされたのであらう、けれども時にはテールボル山に登り、時にはガリラヤの湖邊を散策なされて沈黙の生涯をお送りになつたであらうと思ふ、其證據にはあれ丈のユライ考の人、あれ丈の奥深き智慧と思想とを持つところの人が、三十の年に公の生涯に這入つて弟子を取つて活

動を始めらるゝまで、即ち外面の活動を始めらるゝまで近所隣りの人は一個の大工さんと思つて居た、何にもユライ人とは思はなかつたそうである、彼れはヨゼフの子に非ずや、彼れは大工の子に非ずや、何うして大工の子がア、いふ學問をしたかと近所隣りを驚かせた、其三十の年までは確かに沈黙の生涯をお守りになつたであらう、公けの生涯にお這入りになつて食事をなさるゝ暇がない時でさへも、ソツと宿を脱出で山にお登りなされて、終夜沈黙の生涯をお送りになつたといふ事が聖書の中には彼所此方に見えて居るのである、英吉利の諺にも「口喧しき人は頭が空虚」とある、頭の充實した人は口を噤んで居ると云つても間違ひはなからうと思ふ、貴方方の知己の内考へて御覽なさい、彼れは初めから終りまで喋舌り續ける、道などでウツカリ會へぬ、掴へて喋舌るから困ると思ふ人がありませう、そんな人に頭のユライ人があらうか、四斗樽に三斗八升酒を入れ置けば能く音がするといふ、四斗樽に四斗入れたら……一杯入れたら何の音もしない、即ち沈黙である、人間も亦然り、内に充實をして來ると外が喧しうない、外の喧しいのは内に何にもない證據と云つても宜い



だらうと思ふ、沈黙なるかな、沈黙の生涯こそ實に味ふべき生涯である、  
イエス、キリストは「汝等祈禱をする時は嚴密なる室に這入り戸を閉ぢて隠  
微たるに在す天の父に祈れ」と示しになつた、彼の密なる室といふ言葉を見  
ると嚴めしい室の中に這入つて而も扉を閉て其内に沈黙して居れといふこと  
ある、私が勝海舟にも目に懸つた時に先生は「私は氷川に住んで居る實に東京  
の中央でなか／＼喧しい所に居るんだ、私は東京の中央で隠居が出来るが、板  
垣退助は土佐に引籠まねば隠居が出来ない」と是は眞に味ふべき言葉だと思ふ、  
海舟は大都會の眞中に在つても隠居の出来る人、喧々囂々の巷を歩いて居つて  
も隠居の出来る人だが板垣さんでは六ツかしい、其所が勝伯のエライところ  
と思ふ、内面の働きのエライからどんな所でも隠居が出来るが、内面の働きの  
乏しい人は隠居は出来ない。然らば諸君が私に向つて沈黙して何うする、小人  
閑居して不善をなす至らざるところなしといふが、我々が沈黙の生涯に這入つ  
てジツとして居るとどんな事を思ふかも知れない、夫よりもまだ彼方此方馳  
り歩いて居る方が餘ッ程ましだといふ、夫はエンブチマインドの人がジツとし

て居たら不徳義な事を思ふかも知れない、そこで沈黙の生涯に這入る第一歩は  
讀書することである、其讀書物を開いて眼をバツチリ開けて字丈讀んで居る  
ではない、本を開いて居ても心は隠居しちやア居ない、心は沈黙を守つちやア  
居ない、道頓堀を歩いて見たり、千日前の喧しい小屋の中に出這入をしたりし  
て居れば、半日本を見て居ても其人は本を見て居るのぢやアない、沈黙をして  
本を讀むといふのは、其書物が與へる思想、其書物が與へる奥深きものに觸れ  
て、さうして内面の心の働きの非常に盛んになつて來て、續々と面白い思ひが  
湧いて來、新らしい考が其所へ附いて來て止められないといふやうになつた時  
が、即ち沈黙の効能の現はれた時である、多くの人は本を讀むのに、友あり遠  
方より來る又樂しからずやといふやうに大きな聲を出して讀む、坊主が經を  
讀むのに大きな聲を出して讀む、夫は口が讀むのである、心で本を讀まうとす  
れば沈黙する、黙讀する、ジツと沈んで書物の中に這入り込んでしまふのだか  
らして大きな聲などは出ない、聲を出して本を讀むといふのは、外部の騒がし  
いのを防ぐ爲なら宜いかも知れない、けれども眞個に書物を讀む人は黙つて心

で讀む、讀めば讀むほど内の世界が面白くなつて来る、諸君さういふやうに本を讀れた事があります、なか／＼六ツかしい、私も六ツかしい、本を讀む内に時々心が外へ遊びに出で、仕様がな、けれども朝早く起きて静かなる時、我心の未だ散らない時に良い書物を手に取つて、之を讀去り讀來るほど面白い事は無い、次には考察といふ事が大切である、暗記するやうに本を讀んでも仕方がない、本に書いてあるところを皆覚えてしまつたところが別に益するところがないかも知れない、是は物識になる丈である、物識になつたとして仕様がな。今度は沈黙の間に考察する、或は讀んだ事或は見たり聞いたり、何か茲に興へられた暗示に依つて考へ、我は何所から何を爲に來たか、其仕事が終わつたから何所に行くか、宇宙は是は何の爲に存するものであるか、宇宙の内には我は存して居るが、我は無意味に此所に生れて來たのであらうか、或は今日の我日本に對して我は何ういふ使命があるか、其使命を果すのには何ういふやうにやらなければならぬかといふ工合に或は考へ或は察し、考察といふ事を頻りに努むるやうになつて來たらば、もう傍へ來て人が下らない芝居の話を

したり、相撲の話をしたり、イヤ何所其所で情死があつたとか、イヤ何所其所で首釣があつたとか、井戸端會議で斯ういふ事をいふたとか云ふ事を聞くのは嫌で／＼堪らないやうになつて來て、人が來てさういふ事を耳に入れる程心の奥深い所に入つて、さうして口ではウンさうか／＼と聽いて居るけれども、自分の心の内面の働きが非常に活動して居るから、さういふ話を聴くと、社會問題を考へ始めて奥深い所を研究して居る、イヤ井戸端會議などいふものは非常に風俗を悪くするから不可ないとか、或は芝居を見たり相撲を見たりするのは考へ物だといふやうに考へて行くやうになつて來る、其考が他日現はれて或は書物となり或は演説となり或は人に對する助言となり、さうして非常に益をなすやうになつて來るのである。

夫から其次には冥想である、冥想といふは眼を閉ぢる、此眼は心靈の門といふ、此の門を閉ぢて、さうして心が奥深い、或は神の愛を考へ或は我心靈の行末を思ひ、或は神のやうな清き心には何うしてなれるか、キリストのやうな美しい愛は何うして出来るか、さうしてキリスト、イエスを憶れ慕ふて、其美し

い性質が我心の中に感化を及ぼして來るところまで行く、瞑想といふのは今まで冷たい氷のやうな心であつたのが解けて、ア、春のやうな心持になつたといふ如く神を念じキリストを念じて居る間に感化せられて、自分の煩悶も取れてしまひ、心配もなくなつてア、キリストあるが故に我は實に聖なるものである、重きを負へる者疲れたる者は我に來れと仰しやつたが今日はキリストを念じて初めて我心の冷たい氷が解けたといふところまで行くのが、是れ私は瞑想であらうと思ふ、神の心に眠入り神の心を我心とするといふところまで行くのが瞑想の目的である。

夫から其次には祈禱である、一昨日であつたが、三四の牧師が私の家へ見えて研究をいたしたのである、私は其時に云つた、何うも監督教會などへ行つて祈禱の模様を伺ふのに、彼れは神との交際ではなくして、司會者と信者との掛合問答だ、神は大なるものなれば神に従ふべしと司會者がいふ、さうすると神は大なるが故に我々隨んで神に従はん信者がいふ、宛然問答だ、神は天の高き所から子供等が何か問答をやつて居ると懸はせ給ふに違ひはない、祈禱をし

て居るとは思召さぬだらうと思ふ、組合教會の祈禱は、多くは神の名前を唱へて、周圍に居る人々に對する演説である、神よといふ事はいふのであるが、其次に何をいふか、私は斯ういふ決心を致しまして、是から此決心を貫かうと思つて居りますといふと、周圍の人々がエライ決心を彼の人は感じたなと思ふ、私は是までは愛心が少なかつたが、是れからは一ツ愛心を燃して人々の爲に犠牲の生涯を送らうと思ひますといふと、ア、彼の人は犠牲の生涯に是れから這入らつしやるさうだなと思ふ、又神の方ではなか／＼エライ事を彼所へ來て唱へて居るエライ唱事を始めたものだと思つて聞いて居らつしやるだらうと思ふ、けれども其心を開いて神との交際はとんとなひのである、さうして大抵な祈禱が斯様な事が出來するやうになし給へ、我を清き者となる事の出來るやうにして下さいと云ふ、是は自分が清き者になるから、兎に角清き者になるやうに上の方から些とばかり手助けをして下さいと云つて祈るのである、直接の祈禱には適當しない言葉である、而し其言葉の奥を尋ねて見ると、祈を唱へさうして近所隣りの人々に聞えよかしに長演説をやる、夫れなれば先づ演説をする

が宜い、祈禱をせよと思ふ者は聴衆に或は其所に集れる人々に向つて、私は愛心の足りない者でありましたが、是からいよ／＼深く愛心を養ふて犠牲の生涯を送らうといふ決心を致しました、私は今日までは詰らない生涯を送りましたが、是から心を入換へてやりますといふ演説をなし而して後神の方に向つて、神よ斯の如き決心を發表致しましたからして、私の力ぢやア行きませんからどるかお願ひ申しますといふ祈禱をするが宜しからう、實に此嚴かなる室に於て神に祈禱をする、沈黙の間の祈禱といふのは、神に話しをしてお聴かせ申すといふよりも、神のお話を聴くといふ事の方が大切であると思ふ、祈禱は唱言に非ず、演説に非ずして神の聖意を伺ふ事である、果して祈禱が我靈と神の靈との交際であるとするならば、私共は神の聖前に沈黙して、大御心が何所に在かを伺ひ奉るべきであらう。

斯の如く祈禱が沈黙の間に出来るやうになり而して會衆と共に祈禱をするといふ時には、其祈禱は極めて簡單である、キリストの教へなされたる祈禱は極めて簡單である、又キリストが御賞讃なされた祈禱は極めて簡單である、神をだ

いに使つての演説的の祈禱は極めて長い、司會者と聴衆との問答的祈禱は極めて長い何も彼も知つて居らせらるゝところの神の前に出て、祈る祈禱が眞個の祈禱であるならば一言半句にて盡きる筈であらうと思ふ、繰返し事も何にも要らないとキリストはお示しになつたのである、斯く考へ來る時に私共は未だ祈禱の奥妙なる味ひを知らない、どうか諸君と共にキリストの教に從ひ、靜かなる室に於て沈黙の間に神と交際をして、其交際の結果はいよ／＼起つて此所に公衆と共に祈る時にも、密室の内の祈禱が其所へ現はれて來て、我周圍に人あるを知らざるが如き祈禱に這入りたいものである、ソコデ初めて祈禱が眞面目になり、初めて祈禱が眞實な祈禱になるだらうと思ふ、神よ眞個に祈ます、眞に祈りますと云つて、言葉丈が眞個に眞にといふ事を繰返す時には、心が嘘言だ／＼と云つて内の方から其人の心を引張るに違ひはないと思ふ、眞個の祈禱には眞個にとも、是が眞心から、心からの祈禱だとも云やアしない、オウオウといふて泣く時には眞個に泣くのぢやアない、眞個に泣く時にはオウ／＼もア／＼も出るものではない、蒲團に喰入つて泣いて居る、眞個の祈禱をする時

には沈黙の間でなくてはならない、私共夫婦の間に於ては口には出さない、けれども眼と眼で話しをして居る、心と心で話しをして居るが如く、神と我との間には心と心との交際でなくてはならないと思ふ、キリスト、イエスが弟子の方と一度も祈禱をなさつた事がなかつた様であるが、キリストの高き心と弟子の方の低き心では提灯に釣鐘、何うも一緒に祈禱は出来なかつたやうと思ふ、ゲッセマリの園にお這入りなされた時でも、三人の弟子に共に祈つて呉れと云はれても直さに疲れて寝てしまふ、そこでキリスト一人でお祈りなされたのは、其キリストの御心事を考へて見ると、キリストのみが天の父とお交際が出来たのであつて、ペテロ、ヤコブ、ヨハンの輩はまだ祈禱が出来ない、後に至つて修養に修養を積んで、さうしてペテロなりヨハシなりヤコブなりの心がズツと高くなつて来た時に、成程イエスが自分等と共に祈りをなさらぬのはア、此所の意味であつたと思つたであらう。

眞の沈黙は以上四つの事を實行する、さうして我内面の世界が開け心の働きが非常に進んで来たならば、私共は何時でも黙つて居る、已むを得ずして話す

といふやうになつて来て、其話が心の奥深いところから出て来た時に一言半句が人の胸に徹するやうになるのである、けれども話が口から出て来ると、何ぼ上手に喋舌つて居つても人の胸に徹底しない、自分が實驗した事や、沈黙の間に考へた事、又自分が手に握つた事を腹の底から探つて来たならば、隻言半語と雖も人の胸を突くのである、其所が大切である、聖書六十六卷は何所から生れて来たか云へば矢張り預言者なり、キリストなり、弟子方なりの沈黙の生涯から生れて来たのである、私共は餘りに口喧しい生涯をやつて居る、外面の働き丈をやつて居るから、新たに内面の働きに這入り而して、神の聖前に右も話し申すが如く、黙つて居つても口未だ物言はざるに人の心を引きやうになつて、多くの人々が従いて来て沈黙の間に我を學び、我を味ふて呉れるやうになる、其所が私共の大切なところである、ザカリヤは十ヶ月の沈黙を得て初めて神の聖旨を得たから、我々も若干の時間の間沈黙して祈るならば、神の聖旨が分るだらうと思ふことである。

## 第十二章 味爽の祈禱

味爽にイエス早く起人なき所にゆき其處にて祈禱せり (馬可傳第一章三十五節)

イエス、キリストは神の福音を宣傳ふる爲にガリラヤの彼方此方に説教をなされ、而かも其御説教は非常に力の入つたものであつたと見えて、聽聞に來た人々は是は學者のやうではない、權威を以てお話しになつたと云ひ、中には是は如何なる新らしき教ぞやと云つて驚いた者もあつたと書いて特書してある、何ぼエライキリストのやうな方でも人々に深い感動を興へる程の説教をなさるのには、随分力をお入れになつたに違ひはないのである、力をお入れになつた結果はお疲れになつたといふ事も想像が出来る事である、扱て、いよく説教が済み、歩いてベツサイダのシモンペテロの家にお這入りになつた所が、生憎其姑が熱を病ふて居つたので、之を癒してお遣はしになつた、姑は悦んでお給仕をしてイエスをお待遇し申したと書いてある、而して其食事が濟むと多くの病人や、狂人を連れて來たので、イエスは一々其人々に應接をなされに、是

は御説教よりも五月蠅いことでお疲れになつたらうと思ふ、説教の方はキリストの使命である、福音宣傳の事はキリストが悦んでなされたところで、何ぼ力をお入れになつても夫程にお疲れではなかつたらうと思ふ、けれども多くの病人だの狂人だのを其所へ連れて來てワイ／＼と騒ぎ立てたのは是は五月蠅いことで、餘程キリストをお疲れ申したらうと思ふのである、去りながらキリストの慈悲心の深き、折角頼つて來たものを無氣にお返しなさらずして癒せる丈のものは癒してお遣はしになり、又慰めもしてお遣はしになつたらうと思ふ、其晩は大分疲れて寢床にお這入りになつたものと見える、又前日來の奔走と、病人だの狂人だのいふものを癒す五月蠅い事柄の爲に、天の父とお交際をなされる時間はなかつたものと見える、キリストは多忙しい時は已むを得ず天の父とお交際もお見合せになつたかも知れない、然しイエスの心としては暫時も天の父の聖顔を拜せずして居らつしやる事は出來ないのである、其晩暫らく身體を寢床の上に横たへてお就眠が出來たので、まだペテロも其妻も其妻の母上もお弟子方も皆な温かき夢を食つて居る時に、誰も知らないやうにキリス

トはコッソリと寢床を脱いで、外に出ておしまひなされた、此所はガリヤの湖の西北の海邊であつた、恰度イエスが外にお出ましなされた時はまだ夜は明放れて居らなかつたが、曉の明星は東の山の端に煌々たる光を放ち而して明鏡のやうな湖水の表には星の光は黄金の浪を漲らして居つたらうし、其所に颯々と吹来る湖水の朝嵐は、イエスが寒さを防ぐ爲に上に纏ひなされてあつた肩衣のやうな上衣を翻へして、如何にも心地よき有様であつたらうかと思ふことである、獨り人なき所に於いて祈禱をなされたといふ事であるから、或は木の蔭か或は石の上に座して祈禱をなされたであらうと思ふ、祈禱をするのに非常の時と普通の時とは少し異なるものである、何か出来事があつて、何うしても神の力を仰がなければならぬといふ刹那は時所に構ひはないのである、何所にも真面目な祈禱が出来るか、けれども普通の場合、別に何にも事があるのではない、只天の父と交際を致したい、只其大御心を伺ひたいと思ふて祈禱を致しまする場合には、時と場所を選ぶ必要があらうかと思ふのである、猶太人は朝の祈禱は九時、晝の祈禱は十二時、午後の祈禱は三時と時を定めて居

つたと云ふ、午後の祈禱よりも十二時の祈禱の方は時が宜かつたらう、十二時の祈禱よりも朝の九時の祈禱の方が時は宜かつたらうと思ふ、朝の九時の祈禱よりも味爽の祈禱は更に宜かつたらうと思ふ、イエス、キリストは味爽の祈禱の時をお選びになつたからして、是が最も好い時であつたと思はれるのである、何となれば先きにもお話し申した如くに彼の麗かなる湖の邊り、而かも曉の明星が湖面に黄金の浪を漲らして居る其景色を眺めつゝ、眼を閉ちて天の父と交際になると、はや東は白んで来る、東が白むと共に千鳥は聲高らかに音楽を奏する、風は梢を鳴して之に和するといふ時には、小女子が謳ふ歌に優つて、キリストの心を悦ばしめて、其祈禱を助けたに違ひはないと思ふのである。

朝の祈禱は私共の心に非常なる關係がある事を思はなければならぬ、夕の祈禱は疲れ果たた身体と衰へたる頭腦であるから、精神が散亂して、何うしても精力を集注して祈る事は出来ないものである、時には祈りつゝ睡眠に這入る事もないではない、けれども一夜静かに眠りつて身體は元氣付き、頭腦は新らしくなつて來、而して心に懸る心配は夕の睡眠と共に消失せたと云ふ、朝の時に而も

味爽に於て神々しき聖前に祈禱をする時に、四圍の境遇は鳥は謳ひ花は笑ふて、我が祈禱を助くるといふわけであるからして、私共の情念は清らかなになり、私共の心意は一に集注が出来何となく清々してゐるから其時に祈禱をする事は最も適當である、若し夫れ私共の祈禱が佛者や神道家のするやうな加持祈禱か又は唱言であつたならば、只大音聲を擧げて叫びさへすれば宜しからう、けれども諸君、私共の祈禱は一面から見れば禪學者や禪僧が試むるところの座禪のやうなものである、座禪義といふ書物を開いて見ると、三不足を謹まなければならぬと書いてある、三不足といふは衣服が足らずして冷々しく身に覺える事は不可ない、衣服が温か過ぎても不可ないであらうが、まだ温か過ぎるのは宜いかなのである、今一の不足は睡眠不足であつて、眠たい眼を擦り／＼座禪は出来ぬといふ、私共が心を澄して天地の神の聖前に靈と眞を以て話しをするといふ時は是れ座禪に似たものである、神の聖前に或は天の恩寵を思ひ或は我心靈の行末を思ひ或は又キリストの榮光と恩寵を思ふ時は、是れ實に靜思冥想の時

である、其時に腹に力がなく、もう風引きさうな心持になつて來たり、又眠たといふやうな事であつたらば、何うして眞個の瞑想に這入る事が出来ようか、まだ瞑想丈であるならば宜いのであるが、祈禱の妙境は天の父の御聲を聴くといふ事であり、又天の父の聖旨を悟るといふ事ではないか、聖旨を悟り御聲を聴くといふ時に眠たかつたり、風引きさうなと思つたり、腹が減つたと思つたりしたならば、もう夫で氣は振けてしまふので祈禱は駄目となる、いよく祈禱の妙境に這入つて天の父の御心を知り又御聲を聴くといふ時には、我身體のある事を忘れてしまはなければ不可ぬ、イエス、キリストの如き聖なる人でさへも、人なき所に這入つてお祈禱をなされたといふのは、深い意味のあつたことである、四邊に子供の泣聲がする、人々が高らかに笑ひ興ずる音が聞えるといふやうな時でつたならば何うしても氣が散つて、幽玄なる神の聖旨を伺ひ、神の聖聲を聴く譯には行かないのである、人なきところに這入つてゐるのは外の譯ではない、四邊の境遇が寂として聲なく、何にも我思ひを散らすものがないことを期するのである、而かも腹工合がよく、衣服の工合がよく、頭腦は



極めて鮮明であるといふ事であつたらば我を超脱してしまふ、己れを忘れてしまふ、我を超脱し我を忘れてしまつたといふ時に初めて、天の父の御聲が私共に聞ゆるの時ではあるまいかと思ふのである、是が祈禱の妙境であり、是が祈禱の本旨でありとありとすれば、イエス、キリストが味爽に早く起きて人なき所に行き、其所にて祈禱せりと書いてある、此一句は最も學ぶべき、最も大切な教訓ではあるまいか、諸君は天の父に祈禱を捧げる場合に我が四邊の事を忘れてしまひ、己れをも忘れておしまひになつたといふ御經驗をなされた事があらうか、使徒パウロが我は身體の内在に在つたか身體の外に在つたか知らないが、携へられて第三の天に登つて、聞くべからざる神の聲を聞いたといふ實驗を、哥林多後書の十二章の初めに記されたが、是れが即ち祈禱の妙境に這入つたといふものではあるまいかと思ふ、私共は祈禱に實驗のないものである、けれども或時には祈禱會に列して、其所で一の大切なる問題に就いて祈禱を始めた時には、司會者の居らるゝ事も、我が四邊に兄弟姉妹の居らるゝ事も打忘れてしまひ、而かして、一生懸命に祈禱をなし祈禱を終つた時に、隣りの人が祈

禱を始めたのを聴き、我が祈禱に同情を表して啜泣をして居る者があるのを見て、ア、是はしたり此所は祈禱會の席であつたかといふ事に氣が注いだ事もあつたことを憶起す次第である、又或時に二人の姉妹と家庭の祈禱をして居つた時に、我思ひが漸次々々に高くなつて、遂に神の聖前まで登つたかと思ふやうな事もあつた、其時も我が前に二人の姉妹が頭を低げて共に祈つて居るといふ事は全く打忘れてしまつて、祈禱終つて眼を開けて見た時に、姉妹がボンヤリとして其所に座つて居るのを見て、ア、共に祈つて居つたかと思ふやうな事もあつたのである、己れを超脱して、我が精神がいよいよ神の聖前に進み近づぐ時に方つては、快感と申しませうか清き思ひと申しませうか、實に使徒パウロが聞くべからざる聲を聞いたといふは其所であらうと思ふやうな心持である、使徒ペテロが曰く言ひ難しと申しました趣は即ち夫れであらうかと思ふのである、いつ何時御互ひが祈禱を致しても、天の父は耳を傾けて下さるに違ひはない此頃（暑中の大阪）諸君が水道の水を取らうと思つてバケツを携げて、朝の六時半か七時頃に行つて栓をよ振じなされると、龜の尾の如くタラ／＼、タラ

くと僅かばかりの水が出て来る、夫から半時間も経つてバケツを携けて行つて、其栓を何ぼ振つてもく一滴も水は出て来ないのである、けれども朝五時か或は五時半頃にバケツを携けて、其水道の栓の口に充てゝ振ぢて御覽なさい非常なる勢ひを以て水は滔々と心地よく出て来るのである、私共も同じこと、もう七時八時といふ時になつたならば、サア子供は學校へ行くと云つて大騒ぎをする、家の者は其邊を拭掃除をして居る、もう郵便屋が郵便を放り込んで来る、新聞屋が新聞を放り込んで来る、サア朝飯を喫するといふ大騒ぎ、まだ其時は少しは水が出て来る、もう十二時頃になつたならば何うであるかといふと、大分自分の頭腦が何所へか散つてしまつて居る、さうして夕方になり、もう夜の十二時頃になつて、サア是から祈禱をしようと思つて祈禱を始むるが、何を祈つたやら少しも分らない、祈禱と共に眠つてしまふといふ事である即ち一滴も水は出て来ない、本當な祈禱は何うしても朝でなければならぬ、一度祈禱の妙境に到達しましたならば、朝起する事が快樂となるものである、殊に誰もまだ目を覺して居らない隙を窺ふて、天の父の聖顔を拜する事が非常なる快樂と

なつて来るのである、私は大阪で初めて家を定めたのは土佐堀の五丁目であつた、何所ぞ人の顔の見えない所へ行きたいものであると思つて、夕方から中之島の北側を捜して見ても人ばかり、公園へ行つて見ても人ばかり、是ではならぬと思ふて、終に城の南の杉山といふ、今の射的場のある少し北の方へ行つて見たが、其所でも矢張り人の聲が聞える、是ではならぬと思つて夫れから教會に這入つて見たが、此教會堂とは違ふて、小さな日本建の教會であつたからして、是又喧しい、其時にもう大阪では人なき所にて祈禱をすると云へば、味爽人々が寢静まつて居るときを選ばなければ眞個な祈禱のときは得られないかと思つたのである、今は幸ひに玉造の極く静かなる所に居つていつでも水残が出来、私の書齋は朝早く雨戸を開け放せば、東山が一目に見える、而かも太陽が東の山の上に顔を出して呉れるので、其光線を背に浴びつゝ聖前に祈禱を捧ぐるといふことは非常な喜悅である、牧師としての生命は人なき所に於いて天の父に祈禱をして、其の聖聲を聴き、聖旨を悟るといふところ在于とするならば、ア、いふ静かなる所に居らるゝといふは、是れ天の恩寵に非ずして

何ぞやといふ考へも起り來ることである。

何うしても諸君、一日の内に……若し一日の内に一度祈禱の妙境に這入ることが出來ないとすれば切めては一週間に一度、一週間に一度祈禱の妙境に這入ることが出來ないならば、切めては一ヶ月に一度はキリストの如くに味爽に早く起きて、人なき所に行き其所にて祈禱せりといふ、其實験を繰返すことが必要ではあるまいか、今日の信者は獨り日本のみとは申さない、歐羅巴でも亞米利加でも徳を修めようとか人格を磨かうとか、家庭を整へようとかいふ實地の問題には餘程熱心をいたすやうであるが、彼のベタニヤのマリヤが我家にイエスを迎へ申して、お膝元に坐つて、イエスの口から迸り出る玉の言葉に耳を傾けたといふ、彼女の實驗……彼女の實驗を得ることが甚だ疏遠になつて居りはしないかと思ふ、宜しく基督信徒の祈禱は何所から出て來るか考へなくてはならぬ、家を修め身を修め我人格を高くするといふことは是れ祈禱の結果である、結果のみを求めて其原因に遡つて天の父の聖顔を拜し、聖聲を聞き、又聖旨を行はうといふ、此祈禱の妙境に這入らずして居るといふことは何ういふ

譯であらうか、昔から今日に至るまで如何なる人物が世の中に出でたとしても、眞に清らかであり、眞に奥床しくあり、眞に尊い神々しい人物と云へば、みんな祈禱を常にした人、祈禱の妙境に達した人である、かの信仰の泰斗オーゴスチンから祈禱を取去つてしまつたならばオーゴスチンは何うなるであらうか、オーゴスチンの母親のモニカから祈禱を取去つてしまつたならば、果してモニカの名が今日に傳はたであらうか、果して彼の放蕩息子がセントオーゴスチンといふ聖人になることが出來たであらうか、セント、ベルナルドから祈禱を取去つてしまひ、セント、フランシスから祈禱を取去つてしまつたならば、其セントといふはなくなつたであらうか、聖なりといふ言葉は取消されてしまふ、ルイテルとかカルビンとか、是は新教の聖なる人であるすから、セントといふ肩書はなかつたのであるけれども、確かに聖者であつた、此等の聖者たちは神の聖前に屢膝を曲げてお交際をしたといふ、實に祈禱の妙境に達した人々であつたと思はれる、私共は三時間の二時間のといふ祈禱は、何ぼしようと思つても出來やアしない、切めては十分間か二十分間、時を費やして聖前に祈禱をす

るといふことは大切である、先日同志社女学校の生徒に話しを致した時に、美しい娘さん達も多く見受けたのである、その時に私は考へた、あなた方は女の嗜みとして鏡の前に坐つて二十分ぐらゐ顔のお化粧をなさるだらう、成程夫れは必要なことである、けれども二十分鏡の前に坐つてお化粧をする時があるならば之を十分にお減らしなすつて、残の十分を以て心の鏡の前に坐つて、心のお化粧をなされたならば何うでござりませうか、顔のお化粧をしても眞個の美は現はれませぬ、心の鏡の前に坐つて心のお化粧を一日に十分か二十分かなされたならば、あなた方の心が清くなり奥床しくなり、心が美しくなつて來ませう、其清められたる心美しき心尊き心があなた方の顔を映出して來た時に、得も云はれない美しき清き尊き顔となりますぞと申したことであるが、是は獨り女に限つたことではないのである、私共男子も此頃はなか／＼洒落れて所謂ハイカツテ頭を撫で付ける、中にはチツクを附けるといふやうな譯で、鏡の前に坐つてお化粧をする男も大分出て來たやうである、けれども鏡の前に坐つて五分でも十分でも頭を撫で鬚を撫でる時があるとするならば、夫れと同時に心の鏡

の前に坐つて、我心のお化粧をすることが甚だ必要であらうと思ふ、心の鏡とは何ぞや、天の父の前に出で聖書を開いて、夫れから聖書を通して神の聲を聞くことが必要である、聖書を通して神の聖旨を知ることが必要である、更に聖書を疊んで直接に神の聲を聞き、神の聖旨を悟ることが甚だ必要であらうと思ふ、けれども多くの人は時がないといふ、然り時がない、時は造らなければならぬ、此頃五時に起きて御覽なさい、もう夜は明放れて居る、四時四十分にも夜は明放れて居る、五時半に起きる人が五時に起きたら結構、六時に起きる人が五時半に起きたら結構、六時半まで寢坊をする人が六時に起きたら結構、三十分間早く起きるといふ決心さへすれば、未だ會て見ないところの味爽の景色を見ると共に、時には曉の明星の光り輝く有様をも見ることが出来る、諸君が朝早くお起きになり、さうして神に交はるといふ祈禱の妙境に這入ることは、是れ實に人間の生涯に取つて之に優る快樂はないのである、之に優る喜悅はないのである、斯の如き喜悅があればこそ斯くの如き快樂があればこそ、主イエスは昨夜の疲勞を物の數ともせずして、味爽に早く起出で、人なき所へ行つ

て天の父とお交際をなされた譯であらうと思ふ、どうぞ此祈禱の妙境を真似をして頂きたいものである。

### 第十三章 祈禱の生涯

なんぢ祈る時は秘密なる室にいり戸を閉て隠微たるに在す爾の父に祈れ然ば隠微たるに  
鑿たまふ爾の父は明瞭に觀たまふべし  
(馬太傳第六章六節)

私共人間は先づ普通の場合に於いては、凡そ生れた時から死ぬる時に至るまで我が周囲の人間に對する生涯を送つて居ることである、父母の如き尊長者、紳士淑女と云ふやうな徳の高い人に對した時には、我心が汚れてあれば自ら耻るやうな思ひを生じ、又我が行狀が卑しければ堪えられないやうな感がある、夫れは確かに私共の修養に取つては一積の善き感化である、けれども多くの場合には、見る物、聞く物、觸る物悉く私共を害するやうなのが多いこともある、春の彌生の花咲く頃に郊に散策をし、扮装を凝して歩く佳人を見れば、何か心の内にムラ／＼と浮上るものがある、夫れは決して良い心ではない、花を見ようと思つて偶々花の下に行けば、酔ひ狂ふて居る者が見える、心を害するやうな三味線の音が聞える、其他我が遭ふ人我が觸れる人は大抵我心を引下

しこそすれ、之を高めるやうな感化力を有つものはないりません、是れが人間普通の生涯である。

さて祈禱の生涯とは何を意味するであらうか、極く容易く一口に云へば、心を天に向けると云ふ事である即ち對天の生涯である、併しながら祈禱と云ふ中にも加持祈禱と申して、病氣に罹れば病を治して下さい、身上建立に付ては金を儲けさせて下さい、地震災難に對しては災禍を避けさせて下さいと祈るので、是れは基督信者の間にも屢聞く祈禱であるが、多くは稻荷大明神、金毘羅、其他の淫祠に對して御利益を下さいと云ふのであるから、決して心を向上せしむるやうな善き感化は受けないのである、吾人基督信者が對し奉つる神は如何なる御方であるかを悟られたならば、疫病避けの祈禱などは余りしないやうになるだらうと思ふ、尤も金儲けをさして下さいと云ふやうな祈禱は余り聞かないことである、災難を道れしめ給へと云ふ祈禱は折節聞くやうである、夫は人間の弱點として免がれない事ではあるけれども、斯様な祈禱ばかりを致すならば、假令天の神にお祈禱を致して居ても、其人は弱い詰らない乞食根性の下卑た人

間になつてしまふと云ふ事は、私が斷言して憚らない所である、又一方には禪宗或は儒道の流れを汲む人があつて、詰らない神や佛は拜まない、我は眞如に對して渴仰するとか、天は則ち理なりとか、又音もなく香もなき、蒼々の天に對して居るとか云ふが、是等は狐だの貉だの金神だのに對して居る者に比べて見れば宜い、確かに宜いけれども、其實は空々漠々のものに對して居るが故に、悲觀的になつてしまふやうである、一寸高尚なやうではあるが、其空々漠々たる譯も分らないやうなものに對した結果は、極く／＼高慢なるものになつてしまふ、有るか無いか分らぬと云ふやうなものを對手にして居る時には、我ほどエライ者はないと云ふ考へに驅られるからして、實に其の品性を傷ける事は少なからぬやうである。

左らば吾人は何に對して居るかと申せば、高尚幽玄なる靈的實在者に對して居ると云ふ感有つものである、世には基督教は淺薄なりと云ふ人もあるやうなれども、夫れは高尚幽玄なる實在者に對して居ると云ふ眞意を知らないから起つたことである、私の心の奥の院に潜まつてある所の我靈と、天地の奥深

い所に内住せる實在者と相對すると云ふ事を實際に悟つたならば、森嚴の念に打たれざるを得ない、私の友人に某なるものがあつて外國の公使館に勤務を致して居つた、其人は同志社で神學を修めた人であつたが、遂に基督教より飛出した人である、一日其人に向つて「其后君の生涯に於て祈禱をした事はないか」と尋ねた取ところが「自分は露西亞の内地を旅行して、何百哩縋いて居るか殆んど際涯の知れないやうな森林の中に這入つて、白晝と雖も眞暗黒であつて何方を指して行けば人里に出るか分らない時には極めて森嚴なる感想に満たされ、天地の主よと叫ばざるを得なかつた」と答いた、此の天他の奥深き所に内住せる實在者に對する時には、何か我衷に森嚴なる思念の生ずるは、是れ免がるべからざる事である、併し夫れだけでは矢張り禪僧の所謂眞如又は儒者の所謂天に對した時の如く、空々漠々たるものではないかと云ふ疑ひがある。

そこで其の實在者は眞實正義、少しの傷も汚れもない、徳の上乗にて在ます所の神である事を認めねばならない、かく認めると我衷に眞面目な心が勃如として起り來り、而して、眞實であり正義である神に對すると云ふ念が強くなれ

ば強くなる程、己が汚れた事や己が下劣なる事が分つて來る、即ち己が罪惡が分るやうになる、猶太人がシナイ山に對して戰き懼て、最う大神の御前から道れたい、神に彼方に去りたまへと叫んだと聞くが、私共にも同様の威が起ることである、舊約聖書を開いて見ると、アダム、エバが罪を犯した時には神の御前が怖くなつて、木の蔭に隠れたと書いてあります、イエス、キリストがペテロの船の中に突然乗り込まれた所が彼はいたく恐れて海の中に飛込んだと書いてある、人間でさへも聖く義しき人に會合すると、其威嚴に打たれて時々戰慄する事がある、況んや心の底の底までも知り給ふ實在者に對するに於てをやで、戰慄ざるを得ない、又若し神に對して戰慄ないと云ふ人があるとするれば、其神が如何に眞實に在ますか、又如何に正義に在ますかを知らない、盲蛇に怖ない云ふ仲間であらう、基督信者の中にも盲人が多いので、あるまいか、森嚴なる神の御前に出で居ると口に唱へながら、己が罪を憎まず、己が賤しきことに、氣付ず、昂然としてエラさうな祈禱をする人があるが是れは實際に神を認識して居らない證據である。

諸君、高尚幽玄なる實在者を認める時に方つては、此の世界に居りながら我は天地の奥に這入り込んだやうな心持がすることである、又眞實にして正義に在ます神を認識する時に方つては、若し地に穴があるならば、其中に這入りたいやうな心持がする、よしや穴の中に這入つたとしても、神の御前を道れる事は出来ない、詩人の句調を以て云へば「曙の翼をかりて海のはてにすむともかしこにて尙なんぢの御手われをみちびき汝の右の手我をたもちまはん」(詩百三十九〇九、十)天涯地角いづれに參つても、神は其所に在ますが故に、森嚴なる御前を道れる事は出来ない。併し神の眞實と正義を單に認むるだけであるならば、最う苦しくて堪らないだらうと思ふ、けれども基督イエスは弟子方が祈禱を教へて下さいと願つた時に、高尚幽遠なる實在者と教へ給はず、又眞實正義なる神を指さして祈れとは教へ給はず、天に在ます我儕の父よと祈れと教へ給ふた、若し基督が高尚幽玄なる實在者を指さし給ふか、眞實正義の神のみを指さして祈れと教へ給ふたならば、其の結果は何うなつたであらうか、私會で富士山に登つたことがあるが、丁度一合目邊の松の木は上に伸る事が出来ずして、地に

匍ふてある、何となれば山上から吹下す山嵐に壓迫されるからである、吾人人間も、神の威嚴にのみ打たれたならば、此松のやうに地に踟躕して居るであらう、然るにキリストは人間の弱さを知り給ふが故に天に在ます我儕の父よと祈れと仰せられた希伯來書の記事は此意を汲んで「憚る事なく恩寵の御座に來りて祈れ」と教へ、使徒パウロは「爾曹が受し靈は奴の如く復び懼を懷く靈にあらずアバ父よと呼ぶ子たる者の靈なり」と示された。

諸君、天に在ます我儕の父よと祈れと教へ給ふたのは天のお父様に對せよと云ふ示されたのである、私の祈禱の生涯に於いて、祈禱ほど喜ばしいものはな

いと云ふ感に這入つたのは、他ぢやない、天のお父様と云ふ事が……天のお父様と云ふ事が分つたからして、此世に於ては時に誤解され又時に曲解され、左なくとも苦しい生涯に陥るやうな場合にも、夜寢床に這入る前に天のお父様と云ふ聲を出して祈禱をする時には、一日の疲勞も苦痛も、人の誤解も曲解も打忘れてしまつて、恰も今まで眼を泣腫して居つた幼児が、お母様が外からお歸りになつた時に、其の膝の上に、昇つて其温き懷に抱付いたならば、今までの



悲歎も今までの悲哀も打忘れてスヤ／＼と睡るが如く、私共は眞に安心の境に這入る事が出来る、即ち私は天の父に對して居るのである、左らばと云つて其の父は余りに懐かしいが故に、余りに親しいが故に、馴過ぎてはならない、何ほお父様が親しい懐かしいと云つてもお母様が親しい懐かしいと云つても、其のお父様お母様に學問があり、徳行があり、威嚴があつたならば、馴々しい中にも、子供はお父様お母様の前には慎重の態度を以て事へると云ふ事は、あなれた方のお認めなされる所であらう、天のお父様は實に親しいお方でありませ、只獨子のイエスキリストさへ惜まらずして與へ給ふた愛のお父様である、けれど其のお父様は高尚幽玄なる實在者であり、又た眞實正義の神で在りますので、馴過ぎる事は出来ない、諸君、斯の如き思念を以て天のお父様に對すると云ふのが祈禱の生涯である、只時に口を開いて唱言をするばかりが祈禱の生涯ではない、朝起きてから寐る時まで、夜寢床に這入つた時にも、天のお父様の懐の中に在る思ひを持つて居る人が、實際に祈禱の生涯に這入つた人である。

舊約聖書に祈禱の事に就いての詩が凡そ六篇、其五つは詩篇中に出てある、即ち十七篇、十八篇、九十篇、百二篇、百四十三篇である、最う一度繰返して置かう、詩の十七と、十八と、九十と、百二と、百四十二と、夫れから哈巴谷書の第三章である、是れは韻文で書いてある、六篇共に御通讀なされたならば、高尚幽玄なる神に對しての趣きも見え、又、眞實正義の神に對しての味も見え、又仁愛に富み給ふ天の父に對した意も見え、此の六篇の中で私が愛誦して置かないのは、先きに朗讀を致した詩の十八篇である。今十八篇を開いて、御注意の爲に五ッばかりの言を擧げて見よう二節にダビテが神を何と唱へて居りませか、云く「エホバはわが巖、わが城、われをすくふ者、わがよりたのむ神、わが堅固なるいはほ、わが楯わがすくひの角、わがたかき楯なり」と、キリストは天の父と云ふ一語を以て此の總てを其中にお含めになつたのである、二十節には「エホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひ、わが手のさよきにしたがひて報賞をたれたまへり」と書てある、天の神に對する所の私共は此心でなくしてはならない「エホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひ、わが手のさよ

きにしたがひて報償をたれたまへり、われエホバの道をまもり悪をなしてわが神よりはなれしことなければなり。『悪い事をしては神より離れて、偶逆思ひ出して苦しい時の神頼みでは、お父様の懐に入る事は出来ない、』われエホバの道をまもり悪をなして神よりはなれしことなければなり。この念慮が神に近づかしむるものである、二十四節「この故にエホバはわがたゞしきと、その眼前にわが手のきよきとにしたがひて我にむくいをなし給へり」二十五節と二十六節「なんぢ憐憫あるものには憐みあるものとなり完全なものには全きものとなり、きよきものには潔きものとなり僻むものにはひがむ者となりたまふ」と書いてある、夫れから四十六節に「エホバは活ていませり、わが誓はほむべきかなわがすくひの神はあがむべきかな」とある、此の詩をどうか皆様が今日初めから終りまで繰返して讀んで、さうして斯くの如き人間の琴線に觸れる言葉には圈點を施して、後日の紀念にお備へなさらん事を希望する次第である。

新約全書に於いては、主の祈禱を第一とするのである、馬太傳の六章の九節以下にある主の祈禱が第一である、其他はキリストの時々刻々の祈禱である、

否其他のキリスト、イエスが終夜山へ行つてお祈りなされたとか、ヘルモン山頭白雲漢々の邊に於いて、空々漢々たる所に天の父とお接しなされた所などは如何にも意味の深いものである、基督の御生涯の中に於いて奥深い事を尋ねたならばキリストの言葉ではない、祈禱の言葉である「我意の儘に爲さんとするに非ず聖意に任せ給へ」と云ふやうな所になつて來ると、私は分らない、其の言葉の意味は分つても、其の奥深き心情が分らない、尙分らない事は、何うして終夜祈り續ける事が出来させられたか、何うしたならば天の父と顔と顔と相對する事が出来るか、何うも私は分らない、夫れで私共の祈禱と云ふものは實に加持祈禱のやうな淺慕な……私共の祈禱と云ふのは世の人が考へて居るやうな詰らないものである、祈禱する時丈天の父に向つて居るやうでは駄目だ、常に天の父に對して我心が向いて居らねばならず、兄弟姉妹と共に寄集へば、誰か一人言を出さなければみんな同意して心を一にして天の父に向ふ事が出来ないから一人が聲を出して其所に居る會衆の心を導くことである、祈禱會と云ふのは即ち是れである、今度青年大會に臨んで三四百の人が集つて、さうして

祈禱會が始まると、支那人は支那語で祈り、印度人は印度語で祈り、朝鮮人は朝鮮語で祈り、獨逸、佛蘭西、英吉利、みんな各々の國語で祈つたが、珍奮漢で薩張り意味は分らないけれども、熱誠溢るゝばかりに祈つて居ると云ふ事は、其音聲によつて知る事が出来た、私は今度の大集會の内に於いて何が嬉しかつたか、何が森殿の思ひをなさしめたかと云へば、此の諸國の言葉で彼方の隅から、此方の端からも祈り始めた時であつた、分らぬからして何うしてもアメンと、云へなかつたが其の祈禱の心が天に向つて居るばかりぢやアない、其所に集まつた人は、平素祈禱の生涯に這入つて居る者が多いと云ふ事は確かに認むる事が出来たのである。

何うか私共も祈禱の生涯に這入りたいと云ふのは、毎も仰いで天のお父様に事へて居る心を持ちたいと云ふ願ひが夫れが現はれて祈禱の言となることである、即ち夫れが現はれて天に對する訴願となり、願望となり、感謝となるのである、天に對する思ひがあつたならば、只時と場合に依らず祈禱の生涯ほど森殿なるものはないのである、祈禱の生涯ほど私共を眞面目ならしむるもの、清

くならしむるもの、尊くならしむるものはないのである、基督信者が祈禱をして居つてすらも、汚ない思ひに染んで居ると云ふのであるならば祈禱をしない人々は何れくらゐ汚れて居るか、何れくらゐ汚ないかは私は測られないと思ふ、實際に祈禱をしようと思へば祈禱の準備が必要である、祈禱の準備と云ふのは、先きに引いた祈禱の詩が最も妙である、其の祈禱の詩を暗誦して、或は只今誦ふた「夕暮靜かに祈りせんとて」と云ふやうな讚美歌を謳ひ、さうして目を閉て深き悲に入り、いよ／＼天の父の前に我は居ると云ふ思念に這入つた時に、其思念が唇を突いて出て来る、かくして、實際に祈禱の心を以て祈りの言を發すると云ふ事になつて来るのである、斯くの如き祈禱が私共をして眞に清く、正しく、且つ眞面目なるものにならしむるものである。

由來我が日本の信者には未だ敬虔の念が乏しい、故に祈禱の生涯など云ふものを味ふた者は、私共牧師を初めとして多くの信者諸君の中にも少ないやうである、殊に此頃バプテスマを受けて教會に這入つた人の中には、未だ祈禱の何たるを知らない方もあるやうである、今日お話し申した「森殿なるかな祈禱の

生涯』と云ふ事を能く味ひの上詩の十七と十八と九十と百二と百四十二を御  
記慮になつて、さうして哈巴谷書の三章をお読みなまつて、自ら進んで祈る人  
になつて貰ひたい、只説教を聞いて、其の説教の言を覚えても何の役にも立た  
ない、其の説教に依つて祈禱の生涯に這入る人が出来てこそ、初めて此の説教  
が實切を奏したと云ふものである。

#### 第十四章 祈禱の極致

少し進んでひれふし祈ひけるは吾父よ若かなほ此杯を我より離ち給へ然ど我心の  
従を成んとするに非ぞ聖旨に任せ給へ (馬太傳廿六〇三九)

諸君の御承知の如く、物質の世界には遠心力と求心力の二つの大きな力があ  
つて、前者は外へ飛出して、中心から離れようとする力にして、後者は中心に  
近づかうとする力である、夫れと同じやうに私共の神靈にも遠心念と求神  
念との二つがあり、遠神念と云ふのは神に遠ざかる思ひであり、求神念と云ふ  
のは神を求むる思ひである、只今讀んだ主のゲツセマの祈禱の中に「我心の  
従」と云ふのは遠神の方にて、私共銘々の心を一貫して居る所のものである、即  
ち主我心の意味である、然るに此の天地は正義の神が、即ち聖旨を以て御支配  
をなさるのであるから、何ば人間がエラくつても、銘々が己が心の儘を爲さ  
んとしても、神の聖旨に背く事は出来ないのである、何うあつても聖旨には従  
はねばならない次第である、ところが主我心が強い爲に、小さな時から何をす